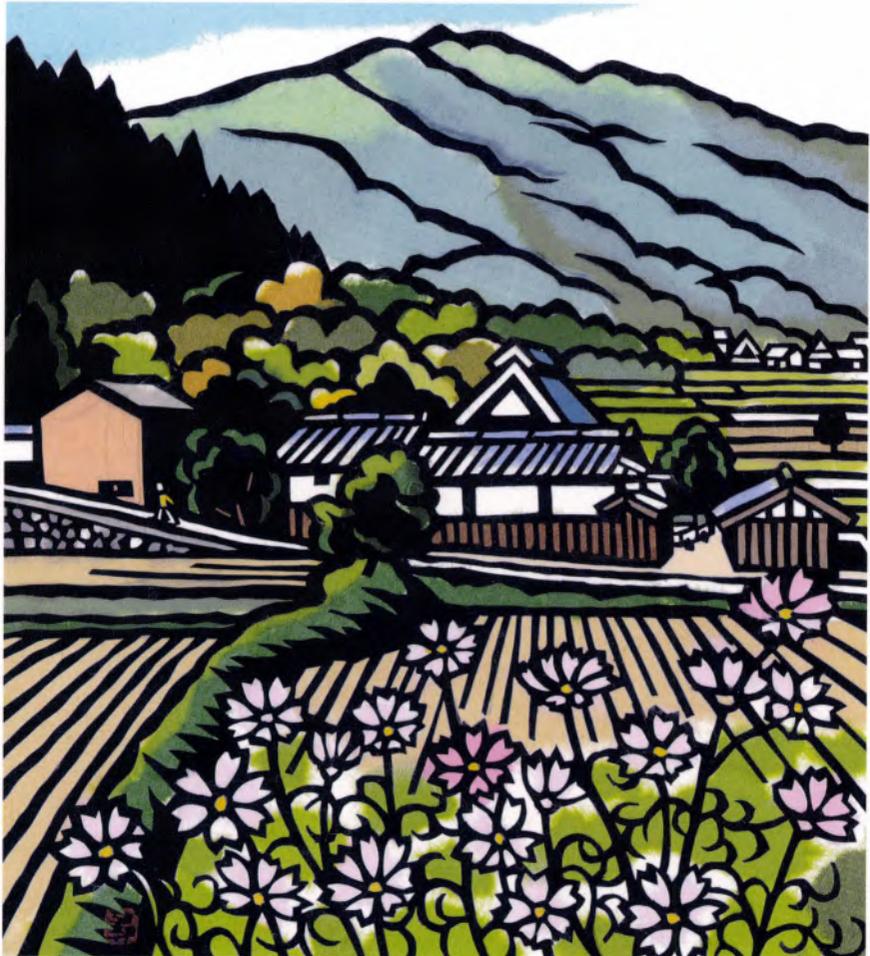


川柳塔

創刊大正十三年 通卷一一〇九号



日川協加盟

令和元年度 六賞発表

No.1109

十月号

お知らせ

第8回 春の川柳塔まつり誌上大会案内

課題と選者（各題2句 共選）

課題吟

「窓」 みぎわ はな（ふあうすと川柳社）
森山盛桜（川柳塔社）

「許す」 梅崎流青（川柳葦群）
安土理恵（川柳塔社）

自由吟

片岡加代（番傘川柳本社）
小島蘭幸（川柳塔社）

投句料 一〇〇〇円（切手は不可）

締切 令和2年2月20日（木）消印有効

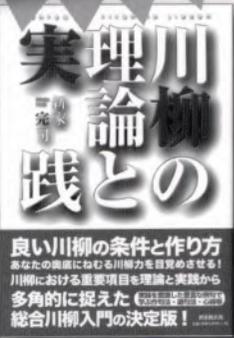
※詳細は12月号

新家完司・著

ご注文は下記へ、ハガキかFAXにて。
お支払いは到着後で結構です。

川柳の理論と実践

お待たせいたしました！
第四刷出来！



実践を意識した豊富な例句で学ぶ作句法・選句法・心得
初心者はもちろん、中級者やベテランにも役立つ

〒689-2303 鳥取県東伯郡琴浦町徳万597 新家完司
326頁。送料+消費税=2,000円 FAX 0858-52-2449

しまね文芸フェスタ前夜

小島 蘭 幸

しまね文芸フェスタ二〇一九が間近に迫ってきて、今私は何故か松江城の天守閣から見た美しい町並みを想像しています。

そうすると、川柳塔で活躍されていて今は故人となられた同人の皆さまのお顔が次々と浮かんできました。かつて川柳塔まつえには七人の侍がいて、「川柳塔巻頭作家を斬る」という人気コーナーがありました。私も一度だけ大上段から真つ二つに斬られたことがあります。読んでいてとても爽やかな気持ちになったことを覚えています。川柳塔まつえの会長をされていた恒松町紅さんとは、郵便川柳を通じて親交がありました。その関係で私は若い頃から松江で開催される記念句会、大会によく出席していました。「蘭幸さんは、松江に親戚があるのですか」と出雲の尼緑之助氏に聞かれるほどでした。

町紅さんをはじめ、先達の皆さまが繋いできたパトシ、「川柳まつえ吟社」は現在、石橋芳山氏が会長をされていて今年、創立50周年を迎えます。記念大会は島根県民会館で11月4日に開催されます。

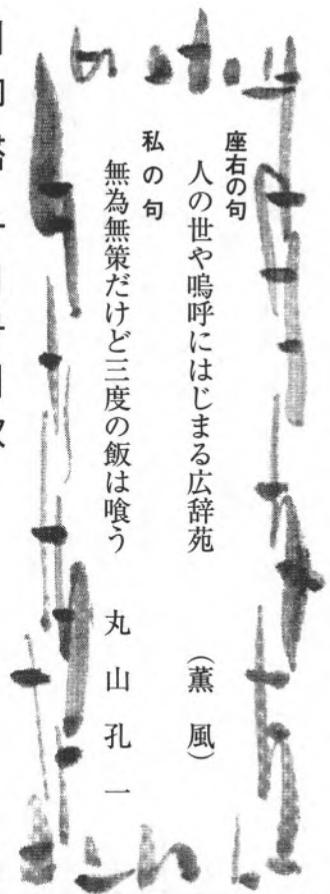
さて、しまね文芸フェスタですが、私が初めて出席したのは江津で開催された時でした。NHKひるまえ川柳に応募されている皆さまにお会いしたいという気持ちからでした。昨年は俳人黛まどか氏の講演を聞くために出席しました。初の書き下ろしエッセー「聖夜の朝」から一句

遠雷や夢の中まで恋をして 黛 まどか

令和元年9月15日、島根県民会館で私が講演します。故人の皆さまにも届くように、しみじみとたくさんと語りたと思います。

台風十五号により多大な被害に遭われました皆様にお見舞い申し上げますと共に、一日も早い復旧をこころよりお祈り申し上げます。

川柳塔社



座右の句

人の世や嗚呼にはじまる広辞苑

(薫風)

私の句

無為無策だけど三度の飯は喰う

丸山 孔一

川柳塔 十月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「大阪豊能の秋」

■巻頭言 しまね文芸フェスタ前夜……………小島 蘭 幸 ……(1)

盆火に揺れて……………福 士 慕 情 ……(2)

川柳塔(同人吟)……………小島 蘭 幸 選 ……(4)

川柳塔の川柳讃歌(17)……………木津川 計 ……(40)

橘高薫風句抄……………自選集 ……(41)

自選集……………早川 清 生 ……(42)

句集の森……………温故知新 ……(45)

温故知新……………水煙抄 ……(45)

水煙抄……………英語 de Senryu (94) ……(46)

英語 de Senryu (94)……………俳風柳多留一二篇研究 76 ……(64)

俳風柳多留一二篇研究 76……………令和元年度 ……(66)

令和元年度……………路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞 ……(66)

路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞……………檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞 ……(66)

檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞……………せんりゆう飛行船(106) ……(75)

せんりゆう飛行船(106)……………新家 完 司 ……(75)

盆火に揺れて

福 士 慕 情

盆火を一人で焚いていると父母の事、先に旅立った友人、知人のこと、なかでも、三年前にお亡くなりになられた波多野五楽庵師の事が燃え上がる炎と共に胸を熱くする。

私が起業して間もない頃、先輩から、半ば強引にライオンズクラブに入会を勧められた。そこで知り合ったのが波多野祥二氏でした。私と同じ巳年生まれ、B型で一回りのライオンということでの例会の後の二次会には決まってネオン街に誘ってくれました。歯科医でもあり何度となく菌の治療もしていただきました。公私にわたっての温情は終生忘れることはありません。

しばらくしてライオン誌の柳壇に波多野五楽庵選が設けられ、初めて川柳で名のある人だと思いを新たにしました。波多野祥二氏が五楽庵師と知ったのはこの時からでした。例会で何回か川柳の

愛染帖	新家完司選(76)
檸檬抄「袋」	水野黒兎・鴨谷瑠美子共選(80)
一路集「料理」	吉村久仁雄選(84)
初歩教室「知恵」	富永恭子選(85)
川柳塔鑑賞	居谷真理子(86)
水煙抄鑑賞	村上直樹(88)
■シヨートエッセー(めぐり逢い)	上田ひとみ(90)
『麻生路郎読本』余滴(54)	細川花門(91)
インスピレーション・ナビ 印象吟	栗原道夫(92)
九月本社句会	大西泰世(94)
句会燦燦	板垣孝志(100)
各地柳壇(佳句地十選/辻内次根・米澤俣子)(101)
十月各地句会案内(114)
柳界展望(116)
川柳塔WEB句会「締める」	Sin・平井美智子(118)
■編集後記(ひとこと/真島久美子)	朱夏・勝弘(120)

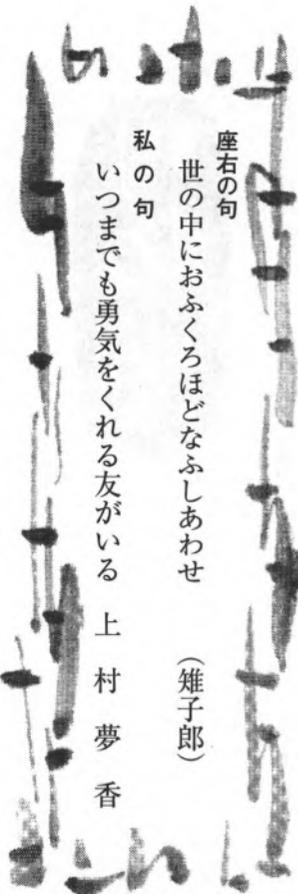
座右の句

世の中におふくろほどなふしあわせ

(雉子郎)

私の句

いつまでも勇気をくれる友がいる 上村夢香



講話をされ、「出来れば当クラブからも投句してくれば嬉しい」と言うのを聞いて投句を四、五回続けたのですが入選するわけがありません。川柳を忘れかけていたある日に五楽庵師から「楽しい仲間と一杯やるので来ませんか」と誘われて行ったのが句会場でした。それが縁となり、以来、県内外の川柳大会へ同行することになり、なかでも大阪の川柳塔まつりや西尾葉七回忌、橘高薫風叙勲記念大会など、五楽庵師をみちのくの黄門様に(故)順風さんが助さん、私が格さんとして上阪したものです。時には父のように、時には兄のように励ましてくれた師の笑顔が炎の中で見守るように浮かんでは消え消えては浮かんでいきます。

奇しくも師の旅立ちの日が私の誕生日ということもあって縁の深さに驚いております。お盆はあらゆる御霊を供養する行事とのことですが、しみじみと彼岸の人を思い出しては盆火を焚いております。

生かされて盆火焚くのも勤めです

慕情



小島蘭幸選

米子市 竹村紀の治

盆提灯飾って独り酒を酌む

迎え灯にひとり暮しの愚痴を言う

縁日で目と目が合った金魚たち

食べ残しするがお酒は残さない

晩酌で反省会と感謝祭

死球でもガッツポーズの甲子園

痛でした友のひとこと眠られぬ

手秤で減塩料理しています

塩ひとつかみ血圧いくら上がるのか

膝痛の筋トレ三日続かない

ウインドー映る私を見ておれぬ

伸び放題我が家の草は幸せだ

生命保険ゼロと言ったら笑われた

糸トシボ清水の風に同化する

コーヒーがおいしい今日が始まった

松山市 柳田かおる

万歩計のおしゃれピンクのスニーカー
ゆらゆらと金魚も時間割がない
触るなど書いてあるから触りたいの

鳥取県 斉尾くにこ

ノックせずいきなりドアを開けた夏

少女等の素足に水は嬉しそう

いつときの夕立野次も称賛も

どの皴も笑い皴だと笑つとく

良心の喜ぶツボを撫でられる

着ぐるみを脱いで人間あらわれる

大阪府 平井美智子

鉛筆の芯まるまったまま晩夏

酔を少し入れて妥協をする話

まちがいはまちがいのまま固結び

またねまたねまたねと遠くなつてゆく

消しゴムの匂いの中の波の音

明日開くページ幸せだといひね

倉吉市 牧野芳光

使うこともあろうと溜まるボールペン

ガツクリと来たら立ち直れぬ齡

ややこしいもの片隅に置いておく

弁舌は爽やかレジメ棒読みに

横になっても縦になっても出てこない

人情がうすれていって大企業

札幌市 三浦強一

バンクシーどうぞと塀が待っている

少し呆け少し確りして米寿

生きるためだった踏み絵の数知れず

六方を踏んで行こうかあの世まで

道頓堀聖子の雨に逢う旅情

川柳燦燦わが人生の道標

大阪市 谷口義

ふんわりと風が坐って秋になり

あれこれと迷い播り潰してしまふ

もう忘れまじとカレイの一夜干し

ところどころ面白い人生だった

今日だと思つたらやはり今日である

さてさてとこれからのこと分かりません

河内長野市 山岡富美子

たおやかに木槿の花が咲いている

早朝のごみだし秋を独り占め

パン一つ分けた記憶も遠くなり

付度をする気なさそう温度計

関節も脳波も夏枯れの様子

戦争も平和も選ぶのはヒト科

桜井市 安土理恵

出会ってそして夢をみさせてくれました

無理するな秋まで待とう墓そうじ

じりじりと老いの侵食止まらない

大人だもの火種ひとつやふたつある

最後の切り札かくした場所がわからない

お守りにしている一枚のハンカチ

橿原市 居谷真理子

サングラスかけて世間と距離を置く

ご先祖が今日も立たせる歩かせる

ソプラノとメゾが話している車内

安っぽい噂と薄い耳たぶと

初デート君も動物園が好き

姓名という旗立ててここに居る

岡山市 丹下凱夫

夏の夜の月にむかってハイタツチ

イノシシもサルも見掛ける墓参り

子の墓に供えたアイス食べている

盆トンボ墓の回りに多くなり

ハグをして帰る子の墓夕焼ける

世間体という物差しで暮らしている

三田市 久保田 千代

想定外八時間もの手術に耐える

これで終りか一瞬の覚悟する

点滴の一滴ごとに湧く希望

知らぬ間に心臓泣かせていたんだね

入院のおかげ塔誌を全部読む

病室の窓から眺む街あかり

尼崎市 山田 耕治

噴水の向うで帽子振っている

あなた見てよと夢に立つドレス

隅の方に皆出席が坐ってる

じいちゃんにアタリが出たぞ棒アイス

手花火の起承転結見えています

妹の鼻緒が切れた蛍狩

松山市 栗田 忠士

涙もろくなつたやわらかくなつた

日陰にも花が咲くから頑張れる

缶ビール一本までと決めている

森友も歴史の闇に消えるのか

修羅地獄の悲鳴を今に八月忌

風鈴も団扇も敵わない猛暑

東かがわ市 川崎 ひかり

予定表ゴルフカラオケフラダンス

子沢山元気あふれていた昭和

ライバルは何時も元気でいてほしい

感謝感謝元気で傘寿のパーズデー

お元気だ今朝も新聞受けが空

すり切れてとても着やすくなるパジャマ

堺市 内藤 憲彦

無敵だったなあ力道山の兄

愚痴を言うわりに金菌が光ってる

マンネリを叱ってくれる青豊

肩に手をおくと心も通じ合う

助手席のサイン通りの定年後

恋のイロハ孫にみっちり聞かされる

藤井寺市 鈴木 いさお

目一杯強がり生きています

喜寿ですと言うたら若いねと言われ

お先真つ暗主治医に先立たれ

退院の朝僕だけの青い空

こぼれ種へもたつぷりと水をやる

初恋のごとし川柳との出会い

鳥取市 倉益 一瑤

他人事のように聞いている天の声

笑っても泣いても時計止まらない

どっこいしょ命重たくなって来た

空元氣正体出していいですか

立ち位置を変えて明日の風を待つ

懸命に生きて天罰あるもんか

岸和田市 岩佐ダン吉

非常口ばかり探してないですか
踏みしめた大地よこれは信じよう
ここ一番やっぱり僕が外される

いつからかティッシュ配りに逃げられる
国訛り話に嘘はないらしい
笑ってるきつと怒っているんだね

鈴鹿市 小河柳女

川も流れて人も流れて何処へ行く
人間の讃歌をうたうお尻たち

愛されて豊かに生きる猫がいい
心は空洞からからと音がする

家々の灯が平和だと歌っている
ぐっすりと眠る天と地が解けて

北九州市 小松紀子

馬鹿やなあ思う時ある私です
頂きものまずは仏さまどうぞ
あちこちが痛い想定内である

明日はわが身少しやさしくなりました
住所氏名バッグに入れて持ち歩く
おいしかったうれしかった息子の料理

大阪府 米澤俣子

百歳目指す私流の生き方で
もっと生きていて欲しかった人ばかり
日本列島火炙りの刑真っ赤っか

サクサクサク暑さを崩すかき氷
亡母の歳越えても五欲捨てきれず
金では買えぬ曾孫三人ありがとう

大阪市 小野雅美

前髪を伸ばし表情悟らせぬ

ワンパターンの表情あなた去ってから
パスポートは切れた日本の四季迎る
信念を自由自在に曲げている

深追いはしない傷つくだけだから
泣きながらの電話に友も泣いていた

神戸市 富永恭子

手を入れぬ奥入瀬に涌く命の芽
ねぶた祭五臓六腑に太鼓の音
竿燈の妙技に拍手鳴り止まず

存在が派手で洋服地味にする
ちぎり絵のばらは枯れぬが飽きてくる

朝顔は蔓の先まで花咲かす

竹原市 岩本笑子

仰ぐのは夾竹桃の八重の花
いいんです夾竹桃は許し合う
黙祷は地球の真ん中で君と

ポケットにあめ玉年をとりました
クーラーを買ったぞ昼寝でもするか
暑さとや今年も耐えてみせましょう

富山市 島 ひかる

植木屋が来るので少し草むしり
次つぎに花咲く庭を褒められる
仏花には不自由しない庭の花
帰省客に恥じないようにガラス拭く
山海の珍味にグラスよく動く

可児市 板山 まみ子

丑の日のウナギ買う列また伸びる
長い目で見るのは辛い不肖の子
花八日落葉三月の桜守り
ガタ来てもほつぽつ磨く大事な歯
チンをするだけの食卓でも元氣

大山市 金子 美千代

待ちかねたお日様やつと梅を干す
侘しくなるかまほこのうなぎもどき
騒音に聞こえる今日の蟬時雨
大声で笑ってふと氣付くひとり
おとなりの芝生も同じ色だった

大山市 関本 かつ子

扇風機足で止めてるのはだあれ
一等席居間で氣を吐く甲子園
韓国のモグラ叩きが止まらない
令和元年あつという間に終わりそう
美しい夕焼け明日が猛暑でも

愛知県 早川 遯行

休肝日なしで今日まで生きてきた
冷蔵庫にも聞いて見る晩ご飯
誉められた昨日の味がもう出ない
俺に似て年寄くさくなつた影
20円足りず戻ってきた投句

和歌山市 (故) 磯部 義雄

八十路坂エンドマークは先
百年と言われ氣力の出る歩み
大量の葉が僕の命綱
洪滞は覚悟帰省は子等の為
梅干しが蜂蜜抱いて値を競う

和歌山市 上田 紀子

ひまわりによく似た人を好きになる
後の祭り段だん増えている加齢
生死彷徨うドクターヘリが命綱
魂に磨きをかけて一直線
愚痴を聴くゆとり器広くなる

和歌山市 柏原 夕胡

産地などどうあれ鰻食べている
ステージ4の姉が弱々しく笑う
ホタルの如く私を置いて逝つた姉
妻という位置でうたた寝しています
私をわたくしらしくする夫

和歌山市 坂部 紀久子

クローラーが苦手で上衣手放せず

化粧などさらさらする気ない猛暑

この夏に遺品となった借りた本

楽しみはテレビそれで満足してますか

総入れ歯と知らない人に誉められる

和歌山市 武本 碧

すらすらとバイリンガルの小気味良さ

平和だな非常袋の期限切れ

度が過ぎてぐるぐる巻きにしたおいた

見えないが仲間の中に棲む掟

見くびった鱷の背にもある矜持

和歌山市 土屋 起世子

老骨のあせりに見えぬ段差ある

何もせず今日は心の洗濯日

スーパ―が無いがドクター町にいる

不用意に口は挟めぬメカ音痴

ちよっと姿勢崩せば楽になるこけし

和歌山市 古久保 和子

遣り残しいっぱいあつてどっこいしょ

高揚を包む花火のあとの闇

うんちくは不要ビールは喉で飲む

レシートが無駄は私の潤滑油

鉢植えが乾く罪悪感しきり

和歌山市 堀 富美子

秒針を無駄に終った日を悔む

日替りのランチ口だけ肥えて来る

よく喋り食べているのに告知され

永らえて出合いの友の湯に浸る

身の丈で今日を翔ぶ日を感じする

和歌山市 松原 寿子

壁破る覚悟の一步踏みしめる

ふるさとへ向く矢印にある決意

てきぱきと捌く若手に負けられぬ

胸ぼんと心切り替え歩き出す

炎天下疑問ひとつが解けぬまま

岩出市 藤原 ほか

こだわりを捨てると楽に生きられる

ハーモニカ昭和の響きかもしだす

ハーモニカあの子と吹いた幼い日

隠さずにあるのままであるきたい

流れ星の街で出合い叶えたい

海南市 小谷 小雪

初盆のお参り済めばアキアカネ

縮まないよう付けておくかきかっこ

まだ野心抱いているのは秘密です

金網に絡んだ草の炎天下

八月の空のどこかに負の記憶

海南市 堂上泰女

良く眠る夫を猫が不思議がる
ダッコねだる子が可愛くてまっしぐら
頼れるのは自分の足と今日も研ぐ
風蘭が香る夏バテしてないか
私の家の標よ朱のカンナ

紀の川市 山東日出男

水割りにハードバップで暑氣払い
二言目には改憲を言う総理
ヒロシマの悲劇を語り継ぐ遺品
競いあうシニア仲間の歩数計
負けん氣と度胸で凌ぐ崖つぶち

橋本市 石田隆彦

核禁止の願いスクラム緩まない
八六と記した墓石に手を合わす
静けさに風抱き締めている独り
独り居に声を発してくる家電
解説は見事な喋り稀勢の里

京都市 清水英旺

ゆるすまじ歌い今年も原爆忌
この年齢になれば怖いものただ一つ
もう走る必要がない最終章
耳鳴りとコラボしている蟬の声
モーツァルトが午後のコーヒー旨くする

京都市 藤井文代

傾けたグラスが知らず二十四時
はみ出した返事は顔に出てました
消費税はみださぬかと生活費
内面のお洒落もしてと言う鏡
断捨離で広くなったと言つて買う

京都市 榎本宏子

残り物やつば母さん食べはった
泣かさぬよに叱らねばすぐパトカーが
男同士で孫の自慢はやめといて
氣がつけば父母も夫も抜けて喜寿
弱い男自慢はつたり止まらない

長岡京市 山田葉子

一日の幸せ約す空の青
柔らかいタッチでピアノ語り出す
異常氣象知らぬげに咲くさるすべり
蜂の生態巣を作られてまた学ぶ
知らんこと知らんと言える歳になる

八幡市 今井万紗子

笑ろてる間に生命線がまた伸びた
伸びて縮んで百歳までのスクワット
やっと退院まだまだこの世生き直す
泣いて笑うて君はやっぱり美しい
最期まで笑える氣力所望する

大阪市 磯島 福貴子

金釘流筆に不足は無いのだが
個個の胸に平和の誓い八月忌
夫居る煩わしさと安穩と

薬では治らぬ痛み腰に出る

大阪市 榎本 日の出

キンキンに冷えたビールに下戸の愚痴
八月が年金月でありがたい

鈍行で行く駅弁のコレクシオン
充電の期間についた怠けぐせ
花火見て思う平和の有難さ
香水はシャネルでも杖は放せない

大阪市 内田 志津子

5カラット自信に満ちた薬指

両親の五十回忌も済み令和

大阪市 榎本 舞夢

土用の日国産鰻フルコース

敗戦を知ってる夫婦恙無し

母の忌に姉妹揃って盆参り

長寿の御蔭孫の結婚式参加

五輪まで覇者は表情ゆるめない

学友と趣味や旅行と日日集う

孫守りの任を解かれてカフェテラス

夏休み祇園祭りと賑わしい

大阪市 宇都 満知子

墓石にも日傘さしかけ盆供養

シナリオから食み出したがる芸達者

大阪市 大川 桃花

ひと雨が欲しい街路樹と私

日本列島どこにも逃げ場ない暑さ

からっから洗濯物も日焼けする

積み上げた信頼ファイにした簡保

富士山の万年雪も溶く暑さ

アランドロンも年取り病んでいると言う

年上でした夕刊を配る人

大阪市 江島谷 勝弘

お星さまに悪さしているはやぶさ2

ルンパ見てこれは便利と買いません

大阪市 大治 重信

百円で目をまるくする三歳児
おふくろの甘いあまい卵焼

日焼けした息子が四人夏休み
いきいきと焼肉減って夏休み

素直だがよく騙されるお婆ちゃん

天皇の国に生まれて三世代

温暖化ストップなをなすべきか

御仏の動じぬままに蚊が留まる

大阪市 奥村 五月

大阪市 古今堂 蕉子

飲み仲間訃報もださず家族葬
米寿過ぎ趣味も一つにまとめねば

生めよ増やせよ校庭は子で一杯
初恋の彼は正論まっ四角

名を忘れ同窓会で呼ぶ渾名
私を守ると言つて認知症

アバウトな良さに惹かれて妻となる
人生の丸がいびつになりやがて

呼び出しも電波届かぬ妻あの世

片肺が低空飛行 雨になる

大阪市 笠嶋 惠美

大阪市 近藤 正

京アニは事件で知つてすごさ知る
思い出を整理するため掘り起こす

大阪を甦らせる道はある
トランプのカードはきつと核兵器

娘とシャンソン浮き浮きはすむ別世界
嬉嬉として夏草のびる炎天下

追い込まれなお改憲を叫ぶアベ
長話おばちゃんの真似するカラス

やさしい友よ暑中見舞の涼し声

帰省する孫と予定を合わせてる
好き勝手言つて楽しくビール飲む

大阪市 金川 宣子

大阪市 坂 裕之

夫婦喧嘩サツと白旗上げる夫
レストランに招いてくれた誕生日

一番は諦めたけどピリも嫌
気に入らん事なら嫌と言えはい

三食に手抜きはしない夏休み
僕の恋金魚みたいに掬い上げ

言うよりは思いのたけを文にする

五十年効いてきました妻のジャブ

詰め放題急に張り切る妻である
仲直りするか背中中の湿布葉

大阪市 川端 一步

大阪市 高杉 力

人生はこうありたいね肩ぐるま
役終えた蟬大の字で天仰ぐ

診察日先に埋め込む予定表
忘れるという知恵もあり旅に出る

いい友だ苦言ときどき言うてくれ
言うまいと決めたら腹が空いてきた

大ロマン世界の戦費なくさんか

大阪市 高杉 千歩

乗ってきたらごはんホーム獨り
見えてても拾えない車椅子
老いるとは繰り返して車椅子
車椅子押して歩けば最高だ
歳上が食べることに食べること老人ホーム

大阪市 田中 廣子

あれこれと想ってくれる深い愛
夏山の楽しい思いで数えてる
夏の雨暑さandraぎ立ち直る
癌と聞き身を引きしめて結果まつ
蝉しぐれ聞いて盛夏を乗りこえる

大阪市 田中 ゆみ子

周波数合わせ家族になつていく
大丈夫毎朝呪文かけて出る
昔は良かったやがて私も言うだろう
青空はまだまだ遠い豆の蔓
することがなくてストレスが溜まる

大阪市 津村 志華子

うかうかと生きた浦島花子です
強かな卒寿猛暑を追い遣った
目の術後鏡の前に魔女が居た
ルーベは不要ちよつとおしゃれにサングラス
よく見える目で仏だんを磨いてる

大阪市 寺井 弘子

捨てきれぬ拘り解かずロゼワイン
天空へ逃げ込む癖が直らない
人肌のお酒身にしむ古都の宿
残高を確かめ今日も黙り込む
野仏の見守る棚田風光る

大阪市 寺本 実

良い方とレッテル貼られ生きにくい
珍しい病気で医者にもてている
恋心泡立てているもう一度
美女同伴早く見つけてくださいよ
片付けができぬ心のゴミ屋敷

大阪市 中井 萌

今日ひと日喋る相手も無く猫背
大掃除あさつて頃に出る疲れ
金づるにされても孫に癒やされる
寝入るまでうちわ扇いでくれた亡母
いずれ死ぬさし当り死ぬまでもない

大阪市 原田 すみ子

勢いが恐い下り坂ブレーキ
記念日は小さな罪の消えゆく日
家中が揺れてる孫の帰省中
町内の年齢下げてるマンション
B品の夏野菜からでる元気

大阪市 平賀 国和

出会いと別れ重ね人生今がある
もみじマーク車に貼って老い自覚
知りたいことまだまだあつて学ぶ日々
被爆手帳母も持ってた原爆忌
九条の初心に還る八月忌

大阪市 藤田 武人

願い乗せ紙飛行機の着地点
若いけど笑えるうちに遺産分け
オットット僕の人生綱渡り
風呂上がり軽やかに鳴るブルトツプ
エンマから託され人間を裁く

堺市 奥時 雄

出来不出来言わなくなった米作り
田の水を父は夜更けに見て回り
誰か来る蛙の声がはたと止み
ハイテクの日本松茸ままならず
鎖国して少し昔に返そうか

堺市 柿花 和夫

朝顔の咲く音知った定年後
れんげよもぎ土が恋しい街暮し
親になる資格テストの要る時代
ベル押して逃げたやんちゃも人の親
珍客を古酒一本が待っている

堺市 加島 由一

有明の月と目が会う二日酔い
エコノミー症候群になる旅行
生きすぎてゴミの分別うまくなる
神様に女難の相をいたわられ
爺ちゃんが暴走をする交差点

堺市 源田 八千代

夏空に入道雲と虹の橋
夏休み祖母を手伝いバイト料
豪雨に猛暑どうなる五輪一年後
紫陽花から向日葵となるのれん替え
店頭に並べない品苦情言う

堺市 齋藤 さくら

今の子に親の考え押し付けず
人間の無力台風避けられぬ
ジョークやと言っているのに拗ねてはり
吉本の話題そろそろ飽きてきた
年金に介護保険の矢が刺さり

堺市 坂上 淳司

足甲に激痛悪寒走る朝
痛風を疑うDr.の初見
即入院ベッドで謹慎塾居のみ
家族旅行もドタキャンさせた憎い奴
冷房の効いたベッドで避暑とする

堺市 澤井敏治

痛風の身には刃のすき間風
ポーっととちやうのんびり生きてなに悪い
長寿時代死を失つてどこへ行く
虫しぐれ小さい秋へ爛の酒
問われれば野菊の墓の少年期

堺市 遠山唯教

感動を分かつふたりは素晴らしい
亡き母の積んだ苦悩が疼きだす
ありがたい子が気に留める誕生日
老老の介護そのときどう動く
住むところがふるさとになり共白髪

池田市 太田省三

そのうちにカロリーオフの米が出る
ひかえ目の甘さに慣れた退院後
一年が速度違反で過ぎてゆく
一晚は金魚のためのポリバケツ
高騰の土用うなぎは予約制

貝塚市 石田ひろ子

生かされる喜び添えて盆飾り
八起き目をそつと支えた五七五
真ん丸い孫とひまわり同じ顔
三世帯昼はひとりの残り物
おはようと蜘蛛の巣に顔撫ぜられた

河内長野市 大島ともこ

来世は売れぬ役者か小説家
シャイでナイーブなのに巷じゃ能天気
独り居にお早うの声かかる幸
相容れぬ人と過呼吸競い合う
母の死にホッとした自分悲しい

河内長野市 梶原弘光

40度僕を外して墓参り
息子には言うておかねば墓仕舞い
ここんとこらくちんコース金剛山
思考停止孫3歳の額のまま
老いふたりサブリにおやつ付いて来る

河内長野市 木見谷孝代

築かれた信用ひと言で失くす
お誘いに意地を張らずに乗ってみる
別れ際の手のぬくもりにまだ未練
平和ボケさせぬ原爆資料館
包丁の切れ味試す葱ごぼう

河内長野市 黒岩靖博

寿命のび百年時代夜明け前
風鈴に願いをこめて清水寺
老兵は消え去るのみと蟬時雨
まだ若い者に負けない技を持つ
入社一筋遂に昇進部長の座

河内長野市 辻村 ヒロ

ハイタッチちよっぴり照れる片思い
押し寄せる老いの戸惑い逆らわず
雑念を沢山持った手を合わす

息抜きの趣味のつもりがオットット
年年とバス停遠く老いる足

河内長野市 中島 一彌

深呼吸して尖ったころろ丸くする
ここ10年走った記憶ありません
下手でもいい真似はしないでやってみる
うるさくても鳴かねば寂し蟬時雨
転勤の終着駅に墓を買う

河内長野市 藤塚 克三

叶わない夢ひとつずつ虹と消え
空っぽの脳にはびこるストレスめ
脳みその皺に秘密を刻んでる
別れるのが面倒なのでまだ夫婦
今の世は何が普通か判らない

河内長野市 村上直樹

袋小路長生きしたし金は無し
自肅自戒口を開けばああしんど
付度すれば地獄の蓋も開くらしい
どうしようあの世で妻に出会ったら
セ・シ・ボンまだ燃えているまだ傘寿

河内長野市 森田 旅人

母似だと言われうれしい里の風
待つ人のいない故郷の盆踊り
国訛り警戒心を解いている
風の声今日も聞こえる応援歌
梅田を闊歩高齢者の元氣

河内長野市 山室 光弘

風采などとてもかまえぬこの暑さ
故郷の祭りばやしにめぐる四季
片減りの靴の底にもある履歴
スマイルで風をおこして世界一
すぐ忘れ仕事の様な探しもの

岸和田市 宮野 みつ江

盆三日仏達へもクーラーを
熱中症警報出ても甲子園
庭の隅小さな秋の赤マンマ
猛暑に負けたかコスモス枯れる
暑いからと言って九条捨てないで

岸和田市 雪本 珠子

新しい時代の風に馴染めない
風向きが変わるのを待つ赤トンボ
人生の答出ぬまに曲がり角
頭では理解してるが踏み込めず
叶うならも一度見たいあの笑顔

四條畷市 吉岡 修

婚活の心配もせず孫すんだ
はやばやと手直しすすむ公約の
びったりと合った入札という謎
記憶にない約束手形出していた
じつくりと考えたって金出来ぬ

吹田市 野下之男

大統領硬軟つけていかがです
西郷どんの銅像の前礼をする
弟も年相応の白髪です
まあ良いか息子が先にはいる風呂
誰でしよう机の上にもいつも飴

高槻市 片山 かずお

そら夏だ夏だと白い雲が湧く
暑さごときに負けてなるかとカンナの朱
幸せに暮らした証笑いジワ
歳だからと間口狭めることはない
なかなかの頑固ツムジが二つある

高槻市 島田 千鶴子

美しいままでいられぬ花の鬱
花活ける胸のざわめき消えて行く
音のない花火ふる里遠くなる
ほどほどの頑張りでいい老いの夏
飛切りの笑顔が偉業やっつてのけ

高槻市 初代 正彦

加齢臭柿渋ソープの世話になる
鰻井にヤル気ももったヤセ蛙
猛暑こそ似合うゴーヤの面構え
丁寧もつけんどんも同じ人
夏真つ盛り虎の見事な負けつぷり

高槻市 杉本 義昭

訂正とお詫びが好き日本人
本心は握り拳に隠してる
よい日和と一日洗濯して終る
無礼講無礼のレベル間違える
宝くじ当り別なあなたが走り出す

高槻市 富田 美義

事ここに至れば余命カクゴ決め
お洒落する行き先一ツお病院
外出が続きお洒落に出る手抜き
お洒落して何処に行くのかまたトイレ
お洒落後もヤッパリわては大阪弁

高槻市 富田 保子

聞き上手争いさける私です
三角にまた三角に千羽鶴
男の背愚痴も言わずに80年
カラオケで日頃の無口嘘のよう
誇りまで捨てて免許を返上す

高槻市 原 洋志

防災マップ欠かさず抱いて床につく

生き甲斐の実感あつてこそ長寿

やっと来た宅配便に道訊かれ

ボランティアの汗がビールの美味さ知る

バステルカラーみたいな人によくほれる

高槻市 松岡 篤

暑いけど蟻のボヤキは聞こえない

物忘れ一緒やなあと同期生

米寿まで五体満足ありがたい

うまい空気我が古里は無量大

クラーを毛嫌ったツケ高くつき

高槻市 安田 忠子

四天王寺万灯供養厳かに

光あふれる万灯供養四天王寺

伝統の万灯供養に魅せられて

恵まれた人生だった今思う

素晴らしいタッチを受けて今の幸

豊中市 池田 純子

尺玉のドンで弾ける夏の夢

猫兎金魚も居はる夏休み

だんだんと私もスマホ族になる

三歳の傘は出番が嬉しそう

女丈夫と呼ばれた祖母に泣き黒子

豊中市 上出 修

歌にみる万葉びとの恋ごころ

プロ級だ誉められ上司まだ歌う

性格が良くて万年平社員

夕立に汗だくの町洗われる

文化財京都の夏を練り歩く

豊中市 藤井 則彦

ぶぶ漬けを出しても効かぬ長つ尻

素人らしくしてると偶に良いヒント

京アニメ歳を忘れて見るもよし

ソフトタッチしたのに妻は知らぬ顔

自転車のベルも鳴らせぬ世の怖さ

豊中市 松尾 美智代

ずっと続いてほしい二人の今のまま

時どき違う方見て息を抜いています

冷蔵庫の中に逃げたい熱帯夜

世界中くすぶっている戦の火

ありんこはみんな仲よし助け合う

豊中市 水野 黒兎

バスワード忘れさまようヤブの中

肥後守で削るエンピツ昭和の香

リフォームの床を素足が嬉しがる

余命とや猫を飼おうか止めとくか

隣近所声かけあつて老いの路地

富田林市 片岡 智恵子

空の文字一切を生み一切を捨て
アニメ社放火日本の宝多く逝き
もうひとつ疲れぬ牀欲しくなる
百四十四人赤ちゃんポストに運ばれて
人生に待ったは無いと将棋盤

富田林市 中村 恵

新しい自分に出会うまで走る
もて余すわたしの中の氷点下
ほほ笑んだ風と契ったのはむかし
二人きり宙ゆうゆうの観覧車
分別のかけらが恋の邪魔をする

富田林市 山野 寿之

幸せは知足温めて日向ぼこ
再会の絶句絶句は素手と素手
ライバルと酒酌み交わすノーサイド
天辺のとても寂しい風ひとり
菜園の汗へ野菜の笑い声

寝屋川市 伊達 郁夫

終活がほぼ片付いた眼鏡拭く
仲直りしようよ外は雨だから
腐葉土になって明日の命抱く
思うこと言いたいことがある背中
モノクロで梅雨に私が溶けていく

寝屋川市 富山 ルイ子

クーラ設置立秋になり台所
買物を娘に任し家の中
この世のようあの世も暑いのだろか
今年もまたミニトマト五〇〇取れる
老人会で祝ってもらう米寿です

寝屋川市 平松 かすみ

家中の鏡に映るおばあさん
七不思議ですわたくしが生きている
断捨離で見えた梱包ままの本
時時は四股も踏みます八十路坂
ママチャリもギコギコとして老化

寝屋川市 森 茜

濃緑に移ろう少年期の一途
思いやりのなかに発酵する言葉
老齢とは立ち止まること教えられ
わたくしを放つとかない養生訓
約束の駅は炎暑の真ただ中

羽曳野市 安芸田 泰子

少子化に悠々と鳴く蝉の声
朝顔に朝の生気を貰い受け
プランター茄子もトマトも熱中症
失言を聞いていたのは馬の耳
深々と下げた頭を信じたい

羽曳野市 宇都宮 ちづる

スパイクが火傷球児の甲子園
健闘の球児が掬う砂に汗
猛暑日の風鈴と蟬黙んまりと
庭先で孫が頬張るプチトマト
孫と解く鶴亀算に脳目覚め

羽曳野市 徳山 みつこ

冷房をつけているかと子の電話
ヨイショドッコイショあいの手欠かせない
被爆者の声きかず橋渡しとは
地検財務省付度の合唱だ
怖いこと心の荒れが顔に出る

羽曳野市 中川 ひろ介

甲子園父にあの日がよみがえる
しあわせは手造り野菜盛るサラダ
悠然と生きようガンから生還
食欲の秋に下がった血糖値
水は低きへ金は高きへ流れゆく

羽曳野市 藤原 大子

クーラーをつけなさいよと蟬時雨
カレー作る三日は食べる覚悟して
生き方も字も下手にする力みすぎ
ひと言がトラウマになり羽交締め
トップより意見の言える席が好き

羽曳野市 三好 専平

漢方薬を麦茶とともに飲み下し
雀の子人がすわれれば寄ってくる
一弦のギターが夏の風を呼ぶ
ひっそりと太陽パネル埋め
板門店そろそろ閉じたらいかげです

羽曳野市 吉村 久仁雄

善人の目では今の世見渡せず
四季の花路地は豊かな顔を持つ
細々と生きているのに消費税
良心はいつも小声に耳澄ます
実現が大事小さな夢を持つ

東大阪市 北村 賢子

おはようと交わしいつもと同じ朝
日韓の深まる溝が恐ろしい
とまどいをやさしく包みこむ微笑
抱きしめた子らが案じてくれる今
岐路に立ち来たこの道の是非を問う

東大阪市 佐々木 満作

万分の中から生涯の伴侶
バラのとげ愛と憎しみ併せもつ
白い画布真つ赤なバラが笑ってる
法の綱くぐり悪知恵跋扈する
生物に欠かせぬ水という宝

枚方市 丹後屋 肇

孫娘の帰省に撫でる無精髭

よく喋るインコ一羽を連れてくる

孫の手料理うまいと箸が舌を打つ

嬉しさは立居振舞い亡妻に似る

バイバイの仕種も亡妻の真似だらう

枚方市 二宮 山久

手作りの野菜でもてなす老いの儲

朝顔に元氣をもらう病み上がり

夕焼けに明日を託すウオーキング

十六歳弾けるような孫電話

なりゆきにまかせて歩む老いの道

枚方市 藤村 亜成

朝顔のつるが絡みついている不気味

素直になれば相方ともに救われる

安全な歩道で油断してしまふ

よく目立つ席がポツンと空いたまま

折れず曲らず神の杖つき世を渡る

枚方市 山口 弘委智

花火とは別の夜空でひかりたい

流星に願うひとこと妻快癒

球児らの次次消えてゆく晩夏

人生の終着学ぶ縄のれん

福の神貧乏神も思いよう

藤井寺市 太田 扶美代

訳もなく楽し蜻蛉の多い年

電卓を操るほどでない余生

気休めの嘘にしがみついています

孫帰ってくる背中に羽根つけて

夕焼けを背負って少し若返る

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

蓮ひらくうすくれないの風の朝

サンダルは夕べの余韻そのままに

逝く時の話で弾む真昼の間

美学とは黙って座ることでしょう

饒舌になつて妻を疑おう

藤井寺市 高田 美代子

ロトシックス一枚買っている遊び

年毎に夏が苦手になつていく

台風が邪魔をしている盆参り

気が付かぬ振りをなさいと教わらぬ

ピッチャーは父キヤッチャーは母でした

藤井寺市 吉田 喜代子

平和展哀しき記憶蘇る

食べ過ぎてダイエツトする罰当り

猛暑にて日々思考力まとまらず

あつぶあつぶ見掛け元氣に見えるらし

不平不満人の命を道連れに

箕面市 大浦 初音

軽いので受けたが重い責任感

過ぎた年考えるより明日のこと

四倍の早さで老いる犬と猫

杉さまに肖り免許返上す

滝の前心を洗う水しぶき

箕面市 酒井 紀華

本当の強さを隠す夾竹桃

のらりくらり私を試す不整脈

雑踏の中でわたしとすれ違う

コーヒーカップ星降る夜の内緒事

その時の心の音で降る小雨

箕面市 出口 セツ子

入院の次は骨折日々介護

医者代が無くて病気になれません

簡単に約束破っている小指

お互いに感謝忘れる老夫婦

どうにもならぬことは悩まず前を向く

箕面市 中山 春代

ハザードマップ踝までは来ると言う

雨三日メダカの水があふれそう

温度計買って猛暑をむかえ討つ

向日葵は金管楽器五万本

暑かったニュースをアテに発泡酒

箕面市 広島 巴子

土用干しい塩梅とおちよほ口

ご先祖も子等も帰省で賑やかに

皆揃いキャベツ切る手もリズムカル

助かるな夏はやつぱり冷やっこ

梅雨猛暑台風続きひきこもる

八尾市 内海 幸生

病院の待合で聞く詐欺被害

詐欺なんか隙があるから言うて遭う

もう欲は無い筈の目が追う株価

飼主に牙見せている猫の恋

地球にも太陽にもある寿命

八尾市 寺川 はじむ

のほほんと居れる日本に住める幸

神様は留守でなかった孫入試

火を付け乍ら涼しい顔の週刊紙

地球儀の永遠脅かす温暖化

茹だる猛暑へ怒鳴りたくなる蝉時雨

八尾市 宮崎 シマ子

封印した長持がある古い蔵

名前だけ貼り替え一人住んでいる

踏み込んで聞けない友は病んでいる

年金に合わせて今日も我慢する

母を看る帰宅の足のその早さ

八尾市 村上 ミツ子

テレビから滝の飛沫がとんでくる

一本も木のない場所でせみの声

さばよんで若くなるならいいのだが

始末して貯めたお金が目べりする

きつとつかむピンチのあとのチャンス

八尾市 山根 妙子

数万の花火が写るなにわ橋

宇治金にしてみたくなる雲の峰

秋立つも真っ赤に染まる日本地図

かち割りもお洒落になって甲子園

来世ではもつと優しい人になる

神戸市 上田 和宏

知らなかつた世界の宝京アニメ

弔辞かな蟬いっせいに鳴きだして

人生はも一つあるよ八十歳

男トイレ冒険かもね四歳児

温暖化の割に頑張る蟬しぐれ

神戸市 奥澤 洋次郎

思い出は高層ビルに消えている

暇なのに締切日まで句が詠めぬ

ガソリンの目盛気になる暮し向き

終戦日あり昭和の夢を生きて来た

自分流生きて名もなく消えてゆく

神戸市 敏森 廣光

あと何度この暑い夏越すのかな

おしゃれ心暑さに負けて出てこない

近くの国心の距離は遠いなあ

甲子園応援団も耐えてます

久方に夢に出た母また叱る

神戸市 能勢 利子

車止め自転車に嵌まった息子

最新の装備満載ツーリング

何キロも自販機もない道もある

電動かと聞くと一笑する息子

自転車の次はマラソン視野に入れ

神戸市 山口 光久

伸び代を信じせつせと水をやる

現実を知るにはやはり裏通り

状況がくるくる変り後手を踏む

今一の料理を器引き立てる

辛せが逃げないように窓閉める

神戸市 山口 美穂

もしももしも詮ないことをふと思う

伏えたけど間違いでした尻尾ふる

地図にない八十路ゆっくり一歩づつ

鉛筆削るやつぱり肥後守が好き

家計簿へペランダ胡瓜書き添える

神戸市 山崎武彦

さわやかな笑顔悔しさなど見せず
子に託すバトンは光るまで磨く
再検においでとレントゲンの影
ごもつともごもつともです山の神
深呼吸背伸びもしたい秋の風

明石市 糀谷和郎

ガラガラとアリバイ崩す妻の感
好きなことしたらいいよと医者ぼつり
赤いのがいいのに青にされたバラ
燃えてるか老いを擽る夕茜
ロボットに日本の未来重ね見る

尼崎市 近兼敦子

楽な道選んでみてもいいのかな
病床の笑顔に希望の風がふく
一週間返信がない息子たち
待つことで伸びた子ども们的思考力
あと数秒待てぬナニワの交差点

尼崎市 永田紀恵

後悔を先にしたら酔わぬ酒
認知症幼児のような顔になる
腹八分酒は六分で百歳へ
二ツ目の命を買った手術痕
年金を親子で受給する時代

尼崎市 藤井宏造

訳あって一人住まいを続けてる
年金日までしばらくわたし蟄居する
味よりもインスタ映えで流行ってる
ムードには弱いがお金にはシビア
黒い雨降った記憶は忘れない

尼崎市 藤田雪菜

元氣貫う朝練の子らの声
あこがれた山をテレビで見る至福
朝陽からもらうパワーでストレッチ
短冊に心を込めた子の願い
花筏亡母が乗っていませんか

加西市 山端なつみ

菩提寺まで詠歌を唱う小学生
父の無い子等三人経唱う
孫が来て暮しが変わる盆正月
歳なのか一つの事に時間食う
蟻が運ぶ七日目の地に落ちた蟬

川西市 山口不動

人の世で生まれたのです鬼もまた
充電は時間がかかる歳らしい
娘来て期限切れみな捨て帰る
見蕩れるカサブランカのようなひと
朝ドラが無いから今日は日曜日

三田市 足立 つな子

望み失せ諦めなのか角立たぬ

難避けて静かな道を心掛け

サンダルにペディキュア光るおしゃれな娘

深夜から朝にかわった怪メール

塩そえて夏はやっぱりスイカ好き

三田市 上田 ひとみ

原因を探すつもりはありません

ばあちゃんのはた餅そりやあうまかった

明日のこと心配なんかしなかった

物語今も続いている森へ

やわらかい声で私を抱きしめて

三田市 大西 重男

とりあえずオリンピックを見て逝こう

襟正す言ったあとからすぐ崩れ

世の定めとは言え独り残された

さつきまで思っていたこと出てこない

この写真終活ノートに挟んどく

三田市 尾崎 一子

八月六日ひろしまの空に黙祷

非核非戦令和を生きる覚悟

兄十三回忌皆後期なり

行事には子が付き添ってくれる齢

人は皆生きて幸あり平和な世

三田市 九村 義徳

母卒寿家事一切もこなします

若者のセンス取り入れ磨く古稀

途中下車ばかり人生気まま旅

秀吉も惚れた金銀有馬の湯

金銀のお湯に浸かつて灘の酒

三田市 多田 雅尚

墓掃除来る人みんな高齢者

椰子じゃなく流れ着くのはプラのゴミ

狭い道でも我が物顔のスマホ族

日に5分だけの運動何故出来ぬ

地ビールと聞けば必ず飲んでみる

三田市 谷口 修平

待つてなどいないがやとと遅い梅雨

蝉の声消したあの日の黒い雨

家系図に拘りすぎてまだ独り

やれやれと思つた途端医者通ひ

雑草のパワー太刀打ちできぬ老い

三田市 野口 真桜子

エアポート手荷物便の猫弱し

獣医師を捜しあぐねる日曜日

点滴のくだに命がぶらさがる

とどいた祈りすっかり君は甘えんぼ

抱きよせて頬よせ小貓あたたかい

三田市 福田好文

炎天下球児の顔に汗がない

長男ほど出来を気にせぬ次男坊

親の趣味子に押し付ける幸不幸

事故つたら免許返納誓わされ

通販でパッドの入った下着買う

三田市 堀 正和

布団干すもうすぐ孫は盆休み

五カ月で東京弁になつてゐる

猛暑日はお墓参りも空いている

番宣がくど過ぎますよNHK

隣国と子供のケンカする時か

三田市 松本 ゆかり

パクチーはよう食べませんあしからず

犬逝つて夫婦目と目をみつめ合う

ポニーテール白髪ですが如何です

褐色の肌で世界へ日本の子

一本が六万円の歯が生えた

三田市 村田 博

炎天下脳にも詰めるアイスノン

遠雷に古里の事親の事

雨宿りする縁側の長話

誉め言葉必ず役を連れてくる

着々と準備進んでいるカジノ

高砂市 松尾 柳右子

蝉しぐれウォーキングは夢の夢

長風呂を氣遣うこともなく独り

クーラーに感謝しきりの熱帯夜

熱中症避ける外出控え目に

突然の宅配マンネリを抜ける

宝塚市 丸山 孔一

令和初枕詞が囁しかまひす

暴言もピンタも駄目でモヤシ生え

人の欲戦争の種無数なり

不戦の誓い他国は知らん顔

事故前に返し安堵の免許証

丹波篠山市 久保木 剛

同人に推されたじろぐ句に悩む

定位置に決まり勝ち出すタイガース

午後十時丹波の里も三十度

ラジオから名付けた眞知子早や六十路

お中元日向子スマイル戴いた

丹波篠山市 酒井 健二

好き嫌い神はひいきがきつ過ぎる

念入りに化けていましたお互いに

ようやくたあなた命光つてた

沈黙は同意ではない抗議です

水中花あの世の花が咲いている

丹波篠山市 長谷川 善 輔

青空をすだれ越しでも夏は夏

台風の行先聞いて寝床入る

抽出しを意味なく開けてまた閉める

出歩いて転けて笑うも一人きり

祭りだな花火の音で知る一人

西宮市 秋 元 てる

任せとき言うてた人が先に逝く

気をつけよう口にするもの皆旨い

不老不死恐ろしい世が来そうな気

あて百歳摩訶不思議なる心地

十円の賽銭それなりの音がして

西宮市 緒 方 美津子

八月は祈りの日日や稲の花

八月忌チエルノブイリを忘れまい

炎帝に追いまわされて熱中症

どや顔も神妙になる齒科の椅子

山仕事支えた母の手弁当

西宮市 亀 岡 哲 子

不老不死無理でどっこい生きている

貫禄だ祖父六十の肖像画

お喋りを止めたらちよつと良い男

トラブルと急に元気の出る男

下戸なのによろけています蹴躓く

西宮市 西 口 いわゑ

落日に両手を上げてありがとう

お医者さんに行くにも勇氣いる暑さ

夜店に行こうよ曾孫に連れ出され

蟬しぐれ幼なじみの訃報きく

淋しくも華やかにする盆灯籠

西宮市 福 島 弘 子

三回のドタキャン誰も物言わぬ

缶蹴りにくつも一緒の露地だった

足繁く通ったパン屋店畳む

友のくれたアメチャン袋手放せぬ

継ぎ接ぎの堪忍袋もう限界

西宮市 福 田 正 彦

好奇心老の一字が邪魔になる

地球人争い事が好きだなあ

平常心疑心暗鬼を封印す

書棚より出された本が背伸びする

ありがとう聞いて生き甲斐沸沸と

西脇市 七 反 田 順 子

ご先祖へ暑いですねと水をくむ

トランプ氏毒を吐くのが趣味らしい

前むきな生き方だった人大往生

早朝に散歩するのが好きな犬

会う度に成長みせる孫である

南あわじ市 萩原 狸月

縁のない地に縁を得たIターン
カーナビを信じて未知の地に迷い
無器用な箸はそうめん流す役
よちよちに天衣無縫に罪がない
タレントの浮気暴いて得意顔

奈良市 宇賀史郎

聞き役に徹シトラブルから距離を
気持よい淋しさのないさようなら
見舞客指で盃持つ会話
満員の周囲は女性手の遣り場
作り出せ日韓融和するアブリ

奈良市 大久保 眞澄

老人を嫌い老人独りぼち
ぶつかつた歩きスマホに叱られる
なんぼ生きても死にたいと思わない
し寸がラクで2Lの日も近い
命懸けです猛暑の祭り墓参り

奈良市 高橋 敬子

とり残した草に可憐な花が咲く
話のタネ尽きぬ女のティータム
避暑がてら割引の効く美術館
ガタがきた体猛暑にチェックされ
期日前行ける時にと投票所

奈良市 辻内 げんえい

主夫の家事終えて朝寝がルーティーン
宴会のお呼びかからず夕寝する
飛んできた種が主役のうちの庭
おとりの孫にときどき捻子を巻く
栓抜きを知らぬ使えぬ孫世代

奈良市 山本 昌代

子らが来るピンと背筋も伸びてくる
いい日なり子らと連れ立つ墓参り
ばあちゃんの歩幅で話しかける孫
久しぶり敵はまあるくなっていた
絵手紙の暮しほのほの友の覇気

奈良市 米田 恭昌

恋したか素直になつてきた娘
まだまだまだもつとに挑むアスリート
肚の虫なだめすかして笑うとく
日向子スマイル偉業成し遂げて凱旋
盆帰省車中とび交う国訛

生駒市 飛永 ふりこ

忌憚なく語れビールで暑氣払い
ハンディファン汗掻きにとのありがたさ
二歩引いて君のプライド際立たす
縁側で西瓜ほおばる昭和ふと
怠けずに跳躍せよと立葵

香芝市 大内朝子

青春のあの輝きが懐かしい
A型のしんどい殻を破りたい
愛された記憶あの頃華だった
参院のバリアフリー化道開く
希望と言う宝を抱いている豊か

香芝市 山下純子

悩まされた子に悩み事打ちあける
丸文字は卒業しよう母になる
恋してる友の手紙は字にも艶
世界旅終えて見直すわが故郷
トキメキをちよつと残してフルムーン

奈良県 安福和夫

吉本のギャグで育った浪速っ子
次世代が望む笑いの新機軸
笑門来福諍いなくすキーンワード
五輪では笑い盛り込む演出も
万博も浪速の笑い出番です

奈良県 谷川憲

はやぶさ2わくわくさせる夢に満ち
里人の暮らし見守る道祖神
懸命に社殿に登り孵化の蟬
すみませんありがとう口癖となり
町内会女性を立てて恙なし

奈良県 中堀優

良く聞けば俺を肴に敵味方
少額の年金がボケ遅らせる
空っぽの脳へ古希から詰めるもの
あの人と一緒に登る遍路坂
生かされてるんだ真面目に生きて行こ

奈良県 長谷川 崇明

テレビ見る場所が決まっていた昭和
こぼれ種次のドラマの幕を待つ
妻の持つ紐の長さに慣れました
緩みゆく老いを戒めネジを巻く
今日の無事終えて明日の風を待つ

奈良県 渡辺 富子

まっさらな朝とわくわくハグをする
からませた指からするり抜けた恋
お湯溢れ今日の出会いを深くする
ていねいに生きて人生折りたたむ
青い意見核心に触れたじろがず

岩国市 上村 夢香

朝昼晩汗拭いしつつ聴く法話
草刈りの途中サイレン手を合わす
多数決で未来にツケは残せない
ピアノ弾く見て見て見てと五歳児は
あの世までとても仮面は外せない

宇部市 平田実男

偏差値は高いが人間味は薄い

オアシスになっていました爺の膝

ちらかった部屋にあちこち句のヒント

消しゴムがいる日本史も自分史も

ペアルック着るとしこりが溶けてくる

防府市 坂本加代

セカンドに置いて安らぐ私の座

応援は私も出来る拍手する

目いっぱいやれば後悔しないはず

婚活にもものさし要らぬフイーリング

見てくれる君が居てこそバラダイス

鳥取市 池澤大鯨

薪能蚊にさされても気づかない

無人駅地元の人が花を活け

無人駅それでも町の顔である

切符自販機やつと使用に慣れてきた

待ち合わせ遅れた人は置いていく

鳥取市 奥田由美

兄が逝きケーキ届かぬ誕生日

十五キロ痩せ半年のリバウンド

占いの余命知りたい病み上がり

縫い痕を自画自賛する形成医

オペ後は少しいびつな臍の位置

鳥取市 加藤茶人

気に入りと秀作は別ボツとなり

人生のオマケを生きる二千万

同情の欠片はミクロ程の余地

老いた背へ湿布薬に針に灸

暮らし向きランクは中と日本人

鳥取市 岸本宏章

泣き虫の孫が今では指図する

除草剤でごめんなさいね先祖さま

ブラごみが漂う海に誰がした

安倍総理子ども食堂知ってるか

子を刺した親に同情してしまい

鳥取市 岸本孝子

ばあさんになっても苦手どころけ

夕ご飯揃って食べた椅子七つ

美しい四季と重なるわらべ歌

ふつつと詐欺師の知恵は底がない

荒れ果てた空き家の主をふと思う

鳥取市 棚田大

温暖化聞いただけでもドキッとす

海もまた子ども少なくなさびしぞう

もの忘れ笑った奴もおかしいぞ

迷いの世チエンジするのはあんだだよ

国と俺 課題難題どんと増え

究極の楽な暮らしは無一文

鳥取市 谷口 回春子

秋茜青田の上をランデブー

夫にそえるピリツと辛い妻の愛

猛暑の日脳がパンクと自己弁護

放言が出世街道露払い

鳥取市 永原 昌 鼓

焼き茄子が好きかつお節たつぷりと

普通免許返すと老いが押し寄せる

熱戦の汗も晴ればれ勝ち名のみ

墓まいり父母も兄貴も星になり

日記帳新聞記事で茶をにごす

鳥取市 中村 金 祥

惨劇はアニメの中にして欲しい

電化製品ある日突然止まる怪

執刀医選べぬままに手術台

老いた身も夏を味方にして元氣

平和への仕草にぎこちない握手

鳥取市 夏目 一 粹

放つ日が来るよ愛しい孫娘

銀杏の葉っぱ拾いをした純よ

夏なのに蚊やハエ見ない気にかかる

男女とはゼロの美しさに惹かれ

動物の笑った顔を見たいもの

平行線辿るクールな嫁姑

鳥取市 平尾 菜 美

恍惚と置いたメガネの認知証

思い込み強いるペットが黙り込む

不用意な老後惚けずにいられまい

腹割って話す診察室が好き

鳥取市 副井 ゆたか

通販が栄えて変わる繁華街

危機に向け徐々に強める近所の輪

さわやかさユーモア加え魅力増す

傾聴も練習次第腕上がる

句とテニス趣味からもう健やかさ

鳥取市 前田 楓 花

五人兄弟コピーのような顔並ぶ

好きだから生きた言葉でつき合おう

平成の上に令和のゴミ積もる

政治家を先生と呼ぶ鼻につく

狙われる英語に弱い高齢者

鳥取市 山下 凱 柳

後期高齢一〇〇歳迄の四コマ目

ボケと介護話題もちきり敬老会

高福祉背中合せの高負担

三途の川往復切符あるのかな

AIとかどうせ縁ない世界です

鳥取市 吉田 弘子

何歳を指す今どきの共白髪
避雷針の様な表札外されぬ
家族愛隣人愛に生かされる
包丁を持たぬ朝食増えてきた
スーパームもATMも保護者つき

鳥取市 両川 無限

愛冷めて相々傘を折り畳む
虹消えるまでに告げたいことがある
時雨の海船は本籍地へ向かう
お化粧がうまいと言われたくはない
風になる前は武骨な父でした

倉吉市 猪川 由美子

巻き添えにされて死んじゃ堪らない
メンテナンス小まめにせぬとツケが来る
物上げて喜ぶ顔は嬉しいわ
元号や西暦数え面倒だ
ど忘れをヒョン思い出しホツとする

倉吉市 岡崎 美知江

令和の令こだわり取れぬ戦中派
強いられた供述でした五十年
嫌な事ワハワハハと落しとく
書けば一行もごもご話続いてる
道草が好き想いが深く出来るから

倉吉市 田中 紀美恵

惚けてきたそれでも母は親ですよ
サロンにて七夕飾り童心に
お隣がちよつと気になる若夫婦
年いくつちよつと鯖よみ惚けておく
きっちり日記をつけて脳磨く

倉吉市 山中 康子

遠出の帰省客なくて安心だ
墓参り森のクラスが大歓迎
たたかい抜くか二十三ヶのくすり
利尿剤一ヶに何度いくトイレ
チャレンジ精神変わらぬ老いの意地

米子市 池田 美穂

おだやかな夫婦に残る活断層
「お大事に」言った主治医が計報欄
全身を耳にして聞く医者の方
医療費がじゃまする老後二千万
若いっていいなむき出しの二の腕

米子市 伊塚 美枝子

「ありがとう」言って言われる心地良さ
ローカルな田舎のバスに客は無く
雨の音聞いて二度寝の至福時
日焼けした肌は農家の金メダル
引きつけるアイスの文字と生ビール

米子市 後藤 宏之

冷蔵庫開けたら寿命ですの声
マスクと帽子で変装した気分
ああここが日本これからどうしよう

客船の名前はみんな女性の名
お祈りは自分のことで手一杯

米子市 後藤 美恵子

熱帯夜に耐えて朝顔笑つてる
雑草とのファイトマネーだビール飲む
老老の介護が近いベツト犬
山里が免許返納なお寂れ
地で行きますどうぞせお里が知れている

米子市 中原 章子

母の歳母がちらつく鏡みる
前後ろ間違えること度度に
意識して楽しい人の側に居る
あなたより上は体重だけである
わたくしの人生きつと晩成だ

米子市 成田 雨奇

妻の足ときどきほくの腹の上
やさしさに上から目線混じつてる
生まれ蠅止まればすぐに叩くのに
蝉が鳴く生きてそのまま死んでゆく
食べ跡でわかる西瓜の好き嫌い

米子市 野川 宣子

残された大事な余生整える
泳ぐより見せる水着に目が泳ぐ
匂に触れてイメージしてるお人柄
女子会で飲んで唄って腕上げる
親の作出来映え競う始業式

米子市 吉田 陽子

洗いざらしの白ばかり着る夏の陣
私似の土偶一体見て飽きず
遺作となつて見るヒマラヤの青い芥子
夏野菜スープことこと自愛かな
夜もまたカレーでいいと言う人と

鳥取県 門村 幸子

「軽やかに歩かれますね」褒められる
紆余曲折相撲人気は継続す
小さな庭小さな楽しみバラ開く
ときどきは黄の点滅になる体
なにごととも寿命寿命と達観す

鳥取県 竹信 照彦

台風の風はいらぬが雨が欲し
早朝の一時間鎮魂の時
救急車ボクの空虚を乗せて去る
空転する左脳右脳でカバーする
胸襟を開き度肝を抜かれない

鳥取県 山下節子

平凡な暮し元気な家族の和
ジェットコースターみんな叫んで乗っている
一人では出来ぬりハビリ介護の手
平成も令和も同じ飯の味
不器用な私ただただ手を握る

松江市 石橋芳山

尺玉が上がってミサイルの発射
反論の良し悪し髭を剃りながら
正論を述べる骨折したページ
脳ミソに重たく曇天が降りる
叫び声一升瓶に詰めてある

松江市 藤井寿代

自民庄勝茶漬けサラサラ生あくび
果てしないゴール小石を蹴りながら
責任はどう取りますかプラのゴミ
夏草に試されているド根性
晩酌はびびったり息の合う夫婦ふたり

松江市 松本知恵子

朝採れの野菜ジュースで出る元気
太陽が出る前済ます家事そうじ
清らかな雨が降りますヒロシマ忌
朝顔を摘む猛暑日がまだ続く
台風へ凄まじき盆大移動

松江市 松本文子

侍で生きてる男ではないが
令和で終りもう走らなくていいんだね
越後恋しや出雲の鎧着ていても
不自由の中で自由に生きている
啖呵切ったつもりが咳にむせている

出雲市 伊藤玲峰

人の道壊すな未来暗くなる
しんなりと森の匂いの手漉き和紙
遠花火老いも幼も弾ませて
床上げを祝う鯛やら鰻やら
孟蘭盆会どちらの墓も灯が点り

出雲市 岸桂子

切々と弔辞弱点には触れず
ナツメロに忘れた人の顔が浮く
少年の回り道には手を貸そう
ふる里に飢えを知ってる夏の雲
わたくしも席ゆずられる年になる

雲南市 菅田かつ子

生きてゆく気力をくれるボールペン
楽しくて杖をついつい置き忘れ
気が向けばちよつとぐらいは羽ばたける
おばあさんがフアイトフアイトと今日も出る
亀は亀兎は兎のスケジュール

島根県 伊藤 寿美

目の前をいつも走っている背中
向日葵が妬心を抱いた月見草
濡れ煎餅と喉飴を買う街はずれ
鳩時計隣の家で鳴っている
お寺からお知らせが来る十七忌

岡山市 大石 洋子

卓袱台のどこにいたのか無口な父
記憶から不都合こぼし生きてきた
迷わずに横半分にかけるスイカ
百年後帰ってこいと言われても
前髪をまっすぐ切って生きている

岡山市 工藤 千代子

途中下車ばかりしたがるリュックサック
守る気の無い約束もある夏の朝
もう何も流れてこない川ばかり
糊代が小さく自我が隠せない
夏休み終わると自由になれるのに

岡山市 前田 恵美子

白い服着れる若さを私にも
ノラネコを追ってお婆は強くなる
腹の虫食べ過ぎの癖あるらしい
お山から声があふれるテント村
ゴールには歩いて行こうゆっくりと

笠岡市 藤井 智史

心地良い目覚めだ君という夜明け
恋敗れ心にゲルニカを作る
引き抜けぬ根っこは私の生き方
婚活試験只今十浪中
甘えられない孤独な城に居る

岡山市 大杉 敏夫

白鷺のそろそろ歩む青田風
老農へ螺子巻く妻が居てくれる
夏空を見終えて足袋を履く日課
出稼ぎで知った飯場の飯の味
完走の準備しながらゴールまで

岡山県 高岡 茂子

生きている証に送るお中元
盆もどり母の手料理期待する
工事の音ピタリと消えて五時を知る
ゴキブリに「ごめん」と言ってゴキジェット
太陽のえくぼが皿のミニトマト

岡山県 田中 恵

大久野島のうさぎは過去を忘れない
同じ苗となりの稲はよく伸びる
無人駅むかえてくれる蝉しぐれ
ボランティア眠気が襲う美術館
ため息をつくたび水が欲しくなる

岡山県 藤澤 照代

お裾分け立派な方を他所にやる
母に似た節くれた手は形見かも
年月が葉になって癒される
寝ころべば星が降るよな我が村は
日本中セミの合唱コンクール

岡山県 山 縣 のぶ子

独り居も普通になった遠花火
テレビに夢中サンマが炭に化けている
友の愚痴またかと軽く聞き流す
楽しみは畑のトマトもいで食う
梅雨明けて敵は手強い草を引く

広島市 岸 本 清

心地よい余韻に浸る笑いヨガ
朝市の不揃い野菜食卓に
アナログの僕はネットに用はない
政界にご意見番が見当らぬ
献血の呼び声僕を通り越す

三原市 鴨 田 昭 紀

愛想が尽きたかトーストが焦げる
にんげんの群れに加わる縄のれん
昭和史に見る暗黒の一ページ
吹くことも吹かれることもない余生
愛という嵐が吹いた頃もある

松山市 宮 尾 みのり

笑われてなんぼ常識邪魔をする
テレビから目力という恐ろしさ
終活のネック田舎にある田畑
女だから出来る割り切り方もある
夕方のデパ地下憂さを捨ててくる

西予市 黒 田 茂 代

描き易い位置に柿の木立っている
柿の木の下に毎年落とし文
病葉を落とし老柿暑に耐える
冬肥りも夏痩せもなし元気です
スーツケースに用ない小さな旅ばかり

西予市 西 田 美 恵 子

間違ったルビをふられて病んでいる
低い声で叱られるから身にこたえ
遠雷よ私も叫びたいのです
ゼロからの挑戦僕のパスワード
マイナンバーこんなものです私って

土佐清水市 辻 内 次 根

壊れずに眼鏡布団の上で朝
正座して夏のはがきの薄い青
コンバイン雀一羽が飛び立った
ラッキョウの自分ひとりのいい匂い
缶ビール冷やし忘れて休肝日

縁結びした神様の無責任

唐津市 坂本峰朗

シニア向け講座女性に囲まれる

求められ待つてましたと取るマイク

にここの老いに邪念が多過ぎる

次の青になるまで待てと脚が言う

唐津市 山口高明

割腹の歴史もありし皇居前

国益に成らぬ巨頭の唾み合い

オーロラが見れる異国へ嫁がれる

じれったいおとこ星空ばかり褒め

鏝と思つた子等も当て成らず

熊本市 杉野羅天

梅雨晴れにまた三十度などと言う

露天湯に念仏地藏一人おり

焼肉屋豪傑笑いばかり聞く

バラ三輪トリコロルの夢となり

患者診る医者で良かった半世紀

札幌市 小沢淳

半眼の猫の緩さに癒される

飯の世だ大法螺吹いて寝たふりで

デッサンの頃は自由に描けた画布

筋道を通す男について行く

体育の秋へ背筋がなびかない
スカートを宥めてグルメ旅終える
神無月から減る年金の正味

塩竈市 木田比呂朗

消費税ゆるむ家計を引き締める

報復を正義にかえる手前みそ

男鹿市 伊藤のぶよし

待つていました爆ぜてこそ鳳仙花

家族再会一つにとかすハイチーズ

年金の枠であった愛と幸

頭陀袋一つで巡る独り旅

恐山冥途の旅の下見です

弘前市 稲見則彦

日除けにと植えたゴーヤの得意顔

知らぬ間にマツチが姿消しました

雪国の夏は短いなんて嘘

クラス会セピア色です君とボク

修正を余儀なくされるクラス会

弘前市 今愁女

ヤーヤドー火祭りねぶた勇ましく

猛暑なり主食そうめん冷や奴

辛いカレーこの身の火照り如何にせん

昭和生まれ朝寝もつたない言われ
三時には目覚め積んどく読むも良し

弘前市 高橋 洋子

千葉市 海老池 洋

転がせば益々肥えていく噂

明日より今日を大事にペダル漕ぐ

大木になるまで見たいこぼれ種

がたつく躰夢は暫しの雨宿り

老人グズスローテンポでこの先も

さいたま市 星 野 育子

灯籠流しをきれいと言えうか

締切ってもう当確という早さ

官邸で結婚会見の異例

ふるさとの噂が届く風便り

三年後汚染タンクは満杯です

上尾市 中 村 伸子

言い訳を考えている蝉時雨

ウインドチャイム玄関で鳴るおもてなし

辺鄙ではないが来ません選挙カー

スマイルは武器ではないがシンデレラ

触れないでくれる優しさ負け試合

朝霞市 前 田 洋子

カウントダウンへ弾みのつく五輪

大人のごと身の上話孫の友

昼寝したい孫の家政婦夏休み

雑踏の関西弁を追っている

まさかに遭うまさかを幾つ越してまた

間一髪ホルムズ海峡波高し

悪性ではないと主治医の重い口

己と己と己ハズキルーベで確かめる

冷奴崩して迷い深くなる

微笑んだ遺影見飽きることがない

東京都 まえで とよこ

花火二万発ふとよみがえる夜の空襲

はるかな戦後「くじらのたきたき」なつかしむ

遺された子らへとどいた鯨肉

フランスの村の小川が消えたとは

東京に「春の小川」の歌のこる

東京都 川 本 真理子

古いアルバム知っている一人か二人

尾を振っている霊もいて屋根の下

時々宇宙の謎に手を伸ばす

考えて無しですませることにする

伝えたい言葉をさがすロスタイム

八王子市 川 名 洋子

歳をとるこうゆう事かと思う日日

ビンの蓋開けられなくて歳を知る

子等とした線香花火孫とする

捜し物昨日も今日もふいにする

私小説書くには波が小さすぎ

横浜市 菊地政勝

呆けてるがカネ勘定は合っている

医者 留守の指示ぜんぶ守れぬことばかり

引越のたびに月下美人がドラマ終え

年寄りの証拠を見せたどっこいしょ

（前月分）鳥取市 両川無限

真実がこぼれて風が黙りこむ

里帰り亡父の居場所に見がら

ヨイトマケ涙こぼさぬ母だった

前向き姿勢は崩さない十指

天国の手前で麻酔から覚める

.....

九煙抄

(つづき)

弘前市 高森一呑

肩書きをやさしく消した母の愛

死水は岩木の水ときめてある

過疎の村守り続けた棚田です

耐えにたえ祭りで燃える津軽夏

東京都 高岡弥生

空気が読みどこで吐き出すこの気持ち

うちの子がこんなに努力するなんて

親と子の意地の張り合い気づかない

この夏は猛暑と台風お手持組み

横浜市 巖田かず枝

冬ソナの頃は仲良しだったのに

猛暑日は洗濯好きにもってこい

自国主義実私もそうなのよ

食料難虫を食べる日来るらしい

横浜市 加藤佳子

玉ねぎをそろりと剥けば母の風

玉ねぎの甘さが酔わすシンフォニー

芋煮会老人会は秋模様

旬の物食べて百歳まで生きる

神奈川県 小田幸子

万が一落ちこぼれてもここで待つ

責任がとれるのかしら人類は

母寝かせ私のゆりかご夜の風

亡き犬が教えたしつけ守る犬

（前月分）三田市 住吉美和子

紫陽花が占うように七変化

クラシックかけて昼寝の準備する

被災ゴミどれも大事な物でした

初めてのインド料理に舌鼓

（前月分）美作市 岡本余光

ぼんやりを自覚したいがやはり無理

熟れてきたブルーベリーは鳥にやる

身に付いた垢を落とすと木偶になる

急いでも急がなくてもモカを飲む

川柳塔の

川柳讃歌

⑩

上方芸能評論家 木津川 計

「若いね!」そつよ私は百歳に

秋元 てる

パンザイ! てるさんが百歳になられた。「九十歳 何がめでたい」と力むひともいるが、百歳は文句なしにめでたい。いまや数少ない大正世代だ。「軟弱」と明治世代に罵られながらも十五年戦争を担った損耗多き世代で、てるさんも軍国娘だった。「御国につくす女等おんならは輝く御代の山ざくら」とおだて煽ったのは誰だ。その時流を批判した長編『迷路』の作者野上弥生子も百歳まで瑞々しい文学に生きた。てるさん、川柳を詠みお元気で。

食べられる野草で減らします食費

有海 静枝

65歳以上の高齢者で働いている人は862万人(総務相の労働力調査、18年)だから高齢男性の三人に一人は働いている。高齢者世帯の平均所得は297万3千円だから現役所帯の644万7千円と比べると半分以下。当

然、生活は苦しく「食べられる野草」で静枝さんは食費を減らす。四年前、「食べさせられなくてごめんね」のメモを残し3歳児とマシオンで餓死した母親がいた。私は泣いた。飽食の時代に、どれほど辛く苦しかったか。

同じ空気吸って吐いてもこの格差

武本 碧

同じ空気を吸いながらも大金持ちと貧乏人になぜこれほどの差ができるのか。ユニクロの柳井正社長は毎年持ち株の配当金だけで97億円が入り、ソフトバンクの孫正義会長は101億円がころがりこむ(日刊ゲンダイ、8月15日)。そりゃあ苦勞も努力も人並み以上だったろう。認めはするが、この格差は大き過ぎる。資本主義のあまりな弊害である。碧さん、私たちは無能だったのです。苦勞も努力もしなかったのです。だから貧乏なのです。

妻以外話す人なし闘病す

細川 花門

花門さんが毎年勞せず100億円を手にする人なら病室にも自宅にも千客万来です。ですが、人はみな去っていったのです。なぜかは申しますまい。私は花門さんを思いやって啄木をくちずさむのです。「友がみなわれよりえらく見ゆる日よ花を買ひ来て妻としたしむ」。花門さん、奥さんがいてくださってよ

かったのです。「泣き悲しんでくれる妻子眷族があることよって人間は死ぬるのだ」と石川達三は申しました。奥さんへの感謝です。保育園の跡地に特養が出来た

鈴木 いさお

特養で私の母は息を引きとった。共働きだったから面倒を見れなかった。見舞に行く
と職員のだれもが「ありがとうございます」「ご苦勞様でございます」という。こちらが言うべき礼を先方に言われ、そのたびに恐縮した。温かく行き届いた特養なのが行れなかった。人生の終末は優しいところにつま
りたい。いさおさん、出来た特養に奉仕することです。その年になつたら「どうぞうちへお入りください」と優先的に入れてくれますよ。
ラストまで自分の足で歩きたい

若本 安代

日本子どもを守る会の会長だった評論家の羽仁説子は晩年、入った老人ホームで讀書したり執筆したりの日日だった。87年7月10日、午前中散歩したあと「疲れた。昼寝したい」と自室に入り、看護師が様子を見に行くとすでに心筋梗塞でこと切れていた。84歳だった。「ラストまで自分の足で歩」いた見事な生涯だった。安代さん、ポーツと生きてさえないなければそんな終末を迎えられるのです。

橘高薰風句抄

〔橘高薰風川柳句集〕平成十三年発刊

サルビアも思想魯迅の墓の道

上海の夜と思う夜の赤い酒

蘇州では蘇州の歩幅塔二つ

山容の変幻天地玄黄と

奇巖畳影かと思れば影の山

水牛に雨傘煙蓑の情あり

秋の月餅 春風点心店にありや

妻に買う小さい翡翠の色定め

飛ぶ鳥へ飛ばざる鳥へ初光

但馬牛美し百獣の王よりも

東京の娘の着くを待つ祝膳

祝膳孫の星座はままならぬ

幼な子も思いを遂げた顔はよし

番号に悲喜ある日なり風の中

観心寺

探梅に大楠公という地酒

新内は腸にしむ路郎の忌
七夕の赤い色紙へ釈路郎
毎日の中の一日誕生日

次女幸結婚

鏡照り照りて花嫁はわが娘

還暦や吉祥天と初詣

還暦の若水なれば若やいで

還暦は実年の花弓始

八十になったら恋をしてみよう

仏一体数知れぬ露の奥

凧の糸妹ついぞ持たされず

北 京

稲光天壇瞬時帽の影

懸空寺 二句

われここに残り魑魅魍魎となれば

歎喜天息をつくろう偽夫婦

虫が来て晩学の灯を和ませる

友だちがしみみ光る年となり

幕切れの破顔一笑は鬼だ

馬に乗る姿を今にあこがれる

自選集

小島蘭幸

襖あけるとまだ新盆の母はいる
蟬の大合唱母の法要はじまった
封印の恋をアルバムから剥がす
古いアルバム恋は天然色だった
妻はクーラー私は窓を開けて寝る

前 たもつ

螺子巻くと昭和一桁まだ動く
いい笑顔映る鏡を買ってくる
もともとは生死に順が無いのです
マッサージ師の壺にうっとり土踏まず
進化論自然の謎は解けますか

三宅保州

源平の戦い見たと言う古木
絞られて役立っている雑巾よ
精一杯の合図と思う不登校
押すだけで写るカメラが映らない
真っ直ぐな道に油断が待ち構え

福士慕情

きつちりと一年振りで来るねぶた
この夏も背中ざわめく笛・太鼓
ヤーヤドー夜空へ吼える三国志
綱を引く小若の足が眠くなる
送り絵にしのび込むのは秋の風

宮西弥生

毎日と向き合う米がある安堵
どっと秋どっこい旬をたべてます
続編のドラマ「時雨の記」に泣いている
夏を越す方程式を子に学ぶ
美しく生れ傷つく曲り角

村上玄也

梅雨あけて蝉が本気で鳴きだした
蝉の声暑さひときわ煽り立て
蝉が鳴く会話さえぎる程の音
暑さの所為にしたくはないがやる気失せ
仲間たちが逝って淋しい夏となる

森山盛桜

イクメンも企業戦士も世の流れ
狡猾に折られた鶴も混ぜてある
あの頃は良かった四十五回転
正論のつもりが減多打ちにあう
能弁を黙らせている秋の景

脱ぐ

脱皮したことがあります 一度だけ

恩人の力借りての事です

肩ばかり力んで固まりかけた頃

柔らかく脱げば視界も澄んでくる

死ぬ前にも一度脱皮したいもの

駆け抜けた歳月ゴールへは牛歩

八十路の試練猛暑日が続く

美味しいと言わせるかまど焚きごはん

ひとりの午後をうきうき着メロの魔法

八十路まだできぬ独りになる覚悟

故郷へ牡丹餅持つて母見舞う

健康を下さる母を奉る

わが命イロハニホヘト未だつぼみ

寸寸にされた命は糠漬けに

もう少し待つて下さい佛さま

背伸びして少し若さを取り戻す

偏頭痛まだ勉強が足りません

寝返りを打つたび明日が遠くなる

ご飯だよ慌てることもない独り

出がらしになるかも知れぬ熱帯夜

八木千代

山本希久子

板尾岳人

川上大輪

空の青忘れぬ暑さ敗戦日

老いてゆく未知なるものに茜さす

ああ米寿老眼鏡を子がかける

棘のある言葉を希釈出来る歳

義理というくびき達者のもとなしい

売れ残るガラスの馬に風立ちぬ

読みさしの本の行間虫集く

さて何処へ行く秋晴れのスニーカー

亡きひとの文読み直す秋灯下

こっそりと秋を盗みにゆく素足

幻想の世界に誘う蛍たち

約束は裏切りませぬ花時計

感性を磨こう胡椒振りかけて

何よりも強い味方は青空だ

絶妙なセーフ逆転劇を生む

診断書もつと野菜を食えと言ふ

転んだら折れる骨董品である

水虫の打たれ強さを学ばねば

ややこしい国とも喧嘩せぬように

ひっそりと町の外れに住んでいる

北野哲男

木本朱夏

斉藤 焔

新家完司

高瀬霜石

枯れ枝は枯れ枝なりにある役目
弱いとは聞いてはいたが早過ぎる
地団駄を踏んでることだろう極
勲章だろああの傷もその傷も
献杯の音頭やむなしほくも古希

竹治ちかし

生きるのが楽しくなつて来た余生
親不孝 父のレールは錆びたまま
荒れ狂う自然に人が試される
平凡も普通も良しと思う齡
地に染まりここ青山と知らされる

津守柳伸

糠床の機嫌水茄子にも都合
熱い茶が旨い至福の独り飯
蝉しぐれ生姜ピリリと心太
旅プラン亡姉の日記に導かれ
しあわせを肌で感じている湯舟

都倉求芽

蓮に滝思いの夏南無阿弥陀
孤独です風に雷横雨に
暮れかけの窓稲妻の贈りもの
西瓜ひと切れひと時の夏が来た
熱闘のテレビが暑い甲子園

西出楓楽

絵手紙が涼しい風を連れてくる
薄化粧誰のためでもないけれど
深夜便朝まで聴いたことがない
ため息とあくび交互にする無聊
聞く耳と忘れる脳を持つている

土橋螢

夏雲を飛ばし故郷過疎地帯
ひぐらしや別れる道は右左
三百の浴衣を揃え盆踊り
風鈴に音なし昼の客ひとり
鉄びんの湯を大切に梅雨ごもり

仁部四郎

十月や或る日表札かけました
十月やおさい銭持ち散歩道
十月や貯蓄の日あり御存知か
十月や来月から歳がふえ
十月や僕の細道まだ続く

第174回
大阪川柳の会

日時	10月4日(金) 午後1時開場・午後2時締切
会場	大阪市北区梅田 駅前第二ビル5階 第一研修室
宿題	大阪市立総合生涯学習センター (各題2句)
会費	△「ほのぼの」村上 水筆選 △「リズム」天根 夢草選 △「姉」妹 長浜 美籠選 △「位」置 森中恵美子選
欠席投句	1000円 (82円切手5枚同封) 10月3日到着分まで 会員に限る
会費募集	年会費千円 会報を年6回奇数月にお届けします。 〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4 706 本田 智彦 宛



森の集句

『よしきり』

早川清生

資本主義祈りが届く世ではない
 バブル期の札束誰がかくしたか
 あきらめた愛それぞれに唄がある
 やさしさは疑似餌だったが添いとげる
 喪服着た時ほめられたことがある
 軽傷ですんだはしかも初恋も
 線香は百円均一です姑さん
 愛よりも布団があたたかい余生
 妻にもう本気でいうは死後のこと
 医学書の目次ほど病みまだ老いず
 わが余生旅と病院 時々詩
 自分史の半分 診察券の束
 千円の本買い今日飲み会をパス
 天と地の間に弥勒と鬼がいる
 俺の辞世来世はもつとうまくやる

(平成22年10月14日 発行)

温故知新

小出智子川柳集『落の臺』から

昔一人の弟がいた鬼やんま
 花菖蒲男は強いほうがよい
 子を山へ送ってからの風の音
 秋だ秋だとなんべんも書いている
 一日を大切にする水を撒き
 ものの弾みで回るわたしの風ぐるま
 小説の終りのように死にたしと
 れんげ草祝うところがあればよい
 出会いから一人の傘が重くなる
 雑巾がいつも乾いているわたし
 真っ先に冬が来ている仁王門
 流されたとこで小さな花をつけ
 晩年のドラマ陽気な方がいい
 一冊のノートに風をはらませる
 石切さんの坂の長さは苦にならぬ
 お隣の猫なぐさめにきてくれる
 古いものが弱くて老母を哀します



川上大輪選

貝塚市 吉道 あかね

暑いなど言えぬ八月十五日
遊ぼうと水鉄砲が隣から

クーラーの中で女神も太り出す
若作りしてもやっぱり高齢者

口うるさく念を押すのも愛だろう
リビングにアッパツパーとステテコと

どの夏を思い出そうかラムネ玉
真夜中の星を探した祭りあと

いつの間に道に迷った裏通り
闇抜けて飛び乗ったのは観覧車

てっぺんで無口にさせた月明かり
冒険はあっけなかつた貼り薬

窓閉める全てを拒む音のして
弾んでる孫が来る日のお買物

縄のれん訛りまじりの輪が温い

笠岡市 小野 美那子

黒石市 北山 まみどり

構え過ぎ情けの深い鬼でした
その日まで走れ走れと風の押す
屋台骨支えた母のヨイトマケ

神戸市 米田 利恵子

赤い紐伸び縮みして幾山河
高い山越えるともっと高い崖
つかい棒前後左右に要る男

酷暑でもメリーゴーランドの真面目
鍵束を捨て軽くなる両の肩
今年もえらい早く来た誕生日

今治市 永井 松柏

連日の猛暑ガイアが病んでいる
煉獄に従容と咲け百日紅
蔓草も蕎麦屋の蕎麦もすぐ伸びる

虚も実も消化してきた共白髪
人間の値打ちを友達で量る
飲めないが酒の肴には目がない

三田市 稲角 優子

紫陽花の終りの一枝梅雨あける
華やかに生きて孤独も秘めている
拍手する少しの嫉妬含む手で

母のよう生きて急所は返し縫い
女坂ふしめ節目を知る鏡

軸足をずらして見えた青い空

門真市 坂本 星雨

わたくしを洗い流してゆく白雨
引きこもり蟬もようやく穴を出る
生きる覚悟を持つているかと蟬時雨

折り鶴の首は平和へ向けて折る
改札が呑んで吐き出す人の群れ
どん底で掴んだ温いぬくい糸

和歌山県 三枝 眞智子

キーを持つ妻には頭上がらない
花束をもらった日から病んでいる
かくし味ほどの嘘なら笑うだけ

肩書きがついて家の灯遠くなる
ふる里を持たぬ女の凄まじさ
きっかけがあれば人生また楽し

伊丹市 延寿庵 野鶴

立ち位置を変えると見える明日の彩
なに盗み食いのんやざくろの朱
消去法ひとつを消せばひとつふえ

剪定の松から見える息遣い

前向きに生きると風も背を押し

置き去りの案山子に止まるアキアカネ

豊中市 荒木 郁子

夏バテ防止ゴーヤジュースが出番待つ

ピヤガーデン女ばかりで気炎あげ

二人にはサポート役の月明かり

主人とは細く長くのお付き合

人生は二人三脚転倒も

バーゲンに出かける気力失せた足

広島市 松尾 信彦

物価高モヤシが救うわが暮らし

残量の分からぬ命ポジティブに

妻の手にエンターキーあり恙無し

ほどのどの苦言のあとの褒め効果

肩書が付いて荒れたる胃も口も

語らない語れば嵐遺産分け

寝屋川市 川本 信子

夕涼みしようにも酷暑30度

声だけはハキハキ返事電話口

ちよっとだけ羨ましいな夫婦連れ

今のうち書いておきたい明日の絵図

医者通い少し御洒落を試みる

アングルを変えて楽しむ智慧がつく

豊橋市 西郷 紀美代

わがままに手を焼く老いの反抗期
おもらしの始末で終えた観覧車

古民家が引き立てている蕎麦の味

反省は何色ですか見えて来ず

天気だと毎日だつて布団干す

名古屋市長 富田 末男

全力を出せばチャンスに生きてくる

疑問符が執着心にくれる

事実から見えてくるのは善と悪

言い方に責任持たぬ軽い人

本当の修行は日日の中にある

名古屋市 山本 三樹夫

増えてきた地球の軸を壊す国

青空の奥に平和がきつとある

転た寝の夢路に障る蝉時雨

人生に歩き疲れて湯に浸る

温暖化地球の軋む音がする

江南市 脇田 雅美

太陽に負けぬひまわり夏が好き

古傷の訳まで書いた診断書

山歩き楽しみあつた栗拾い

プライドをちよつとずらして楽にする

気にかかる忘れ上手も年の功

和歌山市 倉橋 悦子

暑さ負け集中力が流れだす

ふだん着の旅どの街も溶け込める

まだ平和溢れるほどの水を飲む

苦を楽に生きて火の章水の章

おしゃべりが歩くコースを変えさせる

和歌山市 佐藤 まき

ふるさどに思いを馳せる校歌聞く

運否転賦この浜風のいたずらも

展開が敵に味方にどきどきと

応援の子等も戦う炎天下

ほつとする給水タイム無事願う

和歌山市 定松 宏枝

サングラス掛けた夫はアルカポネ

何食べる何でもいいがつまらない

墓参り済ませすつきり心太

酷暑につき梅干三個ノルマです

仏壇の前で昼寝の帰省客

和歌山市 西川 千鶴

夏痩せを知らぬこの身が疎ましい

束の間の我が世の春よ妻の留守

伸びる芽を摘んでしまった誉め殺し

本番に弱く未だに前座です

やばいです閻魔と視線合いました

大阪市 石田孝純

初盆の欠けたピースに手を合わす

あれも夏北海道の二人旅

混浴で湯中りをした二十歳

持って逝くいつか木彫りのループタイ

儂いがこんなもんだと天の声

大阪市 降幡弘美

買い物も命がけだと知る酷暑

小学生ツメに色つく夏休み

顔よりもデカいわたあめほおぼる子

夏まつり目で好きな子を追っている

スマホ見て座席ゆずらぬ無関心

堺市 楠井輝子

しおらしくハイと言う妻要注意

句作りは飽きはしないが迷路なり

いやな事その日限りでケセラセラ

難儀やなあほめすぎた妻歯止めせな

見合いして選んだ夫残念賞

堺市 羽田野洋介

二度三度消した閉めたか指を差す

接待を重ねた結果これかいな

荒れ果てた心を癒す美味と美酒

猫舌でも熱かんの酒大丈夫

コンビニの雨宿りついムダ遣い

堺市 古川光雄

計算はちゃんと合ったが財布空

便秘薬悩み悩んで呑んで見る

握手などしたくないのに手を出され

時々悲劇になりそな物忘れ

ゴルフ中八十歳を忘れてる

池田市 上山堅坊

成長を続けるドローン世を変える

武器一切飛行禁止にしたい空

遠い耳派手な耳打ちしてくれる

男です幾度火の粉浴びたやら

今も背に流れる遠い郷の川

池田市 倉本一弥

リタイヤしようやく妻と午後のお茶

君とジルバワインに酔った誕生日

結婚指輪外す解放された気分

デュエットで君の声息ひとり占め

美女と野獣そのちぐはぐさほほえまし

河内長野市 原熊知津子

点滴は涙ほろほろ落ちてゆく

ステージⅣと笑う彼女に陽が和む

入院に泣く老母残してきたと言う

患者の嘆きすべて知ってる白い壁

天井を見つめて今日も微熱あり

吹田市 岩 口 のぞみ

寝屋川市 岡 本 勲

里帰り渋滞抜けたら夏休み
里帰り笑顔になさる土産なし

扇風機今年の夏は熱風機

夏空に京アニの夢生き続く

電気代この夏だけは気にしない

高槻市 三 谷 白 黒

孫達にテレビとられる夏休み

四股踏むも膝より高く上らない

我家では孫来る日だけ掃除する

人生の下る勾配きつくなる

何よりも夫婦旅行は忍耐だ

豊中市 貝 塚 正 子

二度見する電池切れてた腕時計

重い荷を下ろしたはずの肩がこる

お金では買えぬ酔ざめ水うまし

愛想笑い家でするなど禁じられ

存在感あるなあアボカド枇杷の種

豊中市 齋 藤 奈津子

休肝日猛暑のビール違反する

医者と言う僕の好物みんな毒

一匹の蚊に悩まされ夜が明ける

今の幸せ長いトンネル抜けたから

グルメなひと口も体も肥えてくる

虚栄心がねてる諭吉を呼びおこし
ときめきもさめてだまって茶碗出す
友人に会いたくなくて医者に行く
味よりも人気の文字についたら
縄ノレン秘めた野心がついホロリ

枚方市 谷 英 也

婆ちゃんがスマホ操る手は片手

川柳で脳みそ充たし生き生きと

見え見えの色香振りまき何を待つ

八十路すぎ優しい言葉欲しい夏

ピロリ菌可愛い名ですガン育て

八尾市 田 邊 浩 三

耳鳴りか妻は蝉だと言うけれど

ベランダから遠くの花火手にビール

台風がうなぎと花火踏み潰す

熱中症ビールはダメと女房言う

ラーメンのもやしが噛めぬ歯を恨む

神戸市 大 頭 としお

終戦忌モンペの亡母が切なくて

「下戸ですねん」饅頭怖い私です

ゴメンなさい小さな嘘をつきました

信じます心に花の咲くときを

誰だって明るい話好きなんだ

神戸市 玄 番 美恵子

こつこつと努力重ねて待つチャンス

べらべらと酒が口割る宴の席

決意した心が揺れる手術台

原爆の語り部若き風に継ぐ

命日に母の好物そばを打つ

神戸市 斎 藤 隆 浩

年金日今日のビールはドイツ産

痩せましょう肥満の医師に励まされ

反抗期じゃなく成長期ですって

免許返納次は楽楽シニアカー

猛暑の日今日は休めと蝉の声

神戸市 田 本 古 鈴

酒に酔うお酒に罪があるのです

星祭あの人に逢う夜がきた

道迷う人生の道人の道

公園の木々を揺さぶる蝉の声

死ぬ日まで続く私の負け戦

神戸市 松 倉 正 美

孫描いた春の似顔絵額の巾

女房の胸せ尻目に長電話

提供の出来る臓器は何も無い

死んでから貰える保険勧められ

徒でさえ少ない血液吸い取られ

伊丹市 岡 村 風 琴

踏んばった場所で花咲くこぼれ種

針のない時計と旅のローカル線

みつをの詩私の五感ノックする

弾け飛びドラマを作る鳳仙花

安らぎの風が行き交う座禅堂

三田市 幸 田 厚 子

背伸びして無理は承知の好奇心

ロードシヨウ夫は結果言いたがる

平成を家族も増えて無事通過

泣き笑いマニュアルなしの二人船

厚化粧過去の私を消したくて

三田市 東 内 美 智 子

長女です親の欠点皆もらい

梅雨明けて待ってましたと猛暑の日

やみくもにスポーツドリンク飲んだって

ちよつと今聞きたれなくて笑つとこ

大浴場混ざり合つてる老春譜

三田市 中 山 昭 美

野菜高地味なもやしが胸を張る

待ったなし大器晩成時間切れ

水風呂に浸かりスイカが孫を待つ

口角を上げて鏡にVサイン

不便さも秘境アピール村おこし

宝塚市 岸田万彩

子どもみな妻の味方をする我が家
ひきこもり人手不足の世に増える
まだ少し跳びたい溝のあった足
返納は容易その後が難しい
オノマトベもつれる舌に活を入れ

丹波篠山市 河南利尚

八月は先祖接待忙しい
墓参りお元気でねと拝む孫
送り火へまた来てねと祈る孫
二回目があるかも知れぬ墓移転
良く生きても良く死ぬことの難しさ

丹波篠山市 藤井美智子

冷房に慣れて来ました高齢も
手づくりのトマトの赤に癒される
無理のない明日の暮らしへ歩を合わす
それぞれの立場で今日も花咲かそ
もう少し強くていいか肝っ玉

丹波篠山市 横溝安子

年金は財布の中を走り抜け
お迎えのママ友話はずんでる
ゆっくりと歩いています老い二人
湯豆腐でちよつと一杯熱燗で
みそ汁は煮干しのダシで豆腐入り

奈良市 尾畑なを江

人間は働く様に生まれてる
なんとまあどこもテレビは同じこと
後悔もいっぱいあるがそんなもの
うな井を二食に分けて噛みしめる
たいくつな土曜日風呂で三時間

山口市 中前幸子

雨垂れのリズムが狂う雷鳴よ
黒い画集の中で濁流牙を剥く
饒舌な秋の波打ち際が好き
沸点にまだ届かない無題の絵
青葉ゆらゆら終わった恋のレクイエム

鳥取市 山野すみれ

甘えても飛べない鳥は飛べぬまま
願い事しておきながら無賽銭
鬼の面外して見せるえびす顔
焦点のズレた言葉の頼り無さ
助け舟しよつちゅう出して嫌われる

倉吉市 堀かずこ

木の葉舞う私は少し老いました
ミスひとつ天を仰いで戒める
心配だ名さえ忘れる年になる
足腰の弱さに危険ひそんでる
星あかり心の闇を照らしてよ

倉吉市 若松 由紀子

髪カットしたのに誰も気が付かぬ
強烈な香水に負け席移る

大きい方お安い方へ目が泳ぐ
遠くてもポイントの付くスパーへ
からまつた糸解けぬま孤独です

境港市 藤原久直

夕焼けを袋に詰めて飾りたい
ほどほどのマナーを守る余生です
年金日キャッシュカードも機嫌よし
砂時計落ちる速さが気に入らず
ネジ巻くと明治の音で鳴る時計

米子市 川本美津子

仕草にもこだわりを持つ頑固者
短い生命知っているのか蟬時雨
朝顔の開花数える猛暑の日
猛暑日は猫も金魚に嫉妬する
散歩道八頭身の影を行く

米子市 妹能令位子

目だけ出すアラブの衣装買わなくちゃ
この船はまだまだ西へ向かわせぬ
予定からはずしてばかりこれからも
意に添わぬ膝や腰やら頭まで
義兄さんの墓マンションへお引越し

米子市 戸田真理子

あの時のジャンケンポンが分岐点
おしゃべりを止めれば病気かと聞かれ
孫婦省冷える間のない冷蔵庫
腹八分検査結果は裏切らぬ
逆風が強い私を育て上げ

鳥取県 下田茂登子

猛暑には勝てる見込みのない八十路
血糖値上がる覚悟で飲むジュース
庭の雑草老婆の手には重すぎる
戦後には使い捨てなど見えなんだ
飲んでいる飲んでいないと腹が立つ

鳥取県 橋本整

目を閉じて知らぬふりする老いの知恵
百寿まで詠み続けたい五七五
幸せは金ではないと独り言
沢山の命犠牲に得た平和
懸命に生きると老いも楽しいよ

松江市 中筋弘充

食べ残し許せぬ戦後生きたから
五百円玉拾うときには周り見て
頑なに性善説で父と母
幽霊に出て来て欲しいこの暑さ
美人の湯個人差ありと知っている

松江市 山根邦代

比べない自分に出来る事で良い
エアコンに汗吸い取られ干物なり
朝一の空気が入れ替えおおいしさよ
この暑さふる里恋し川の水
目覚めよし食は旨いし日々楽し

雲南市 永見安子

ふしくれの指に指輪が光りすぎ
挨拶のごとく便座にどっこいしよ
人事でない検診を先延ばし
菜園の一人舞台上に大欠伸
来た道は指が知ってるこぶだらけ

益田市 篠原紋次郎

極楽と地獄どちらが近いやら
仏さまかすかに視える八十路坂
君の名は真知子でしたねお婆さん
君の名はと聞いた春樹もお爺さん
福耳をしているけれど嫁が無い

安来市 原德利

年金の胸算用で買う鰻
純情な恋を知らない養殖魚
馬糞紙と言わなくなつたボール紙
片頭痛片方だけに流れる血
ラブソング聴かせたバラが永く咲く

広島市 田桑恵子

子供代表平和を誓う声強し
灯籠の川面にゆらぐ祈りの灯
どこ見ても世界の地図に光がない
この猛暑怠惰な暮らしまあいいか
採れすぎのきゅうりのレシビみな試す

府中市 岸田武

となりとは国も苦勞をしています
それにしても暑いお経を聴きながら
歎異抄八十にしてまだ解けぬ
黙禱の足踏んばって原爆忌
天道虫一枚きりのワンピース

松山市 郷田みや

答えようとするとするシャボン玉すぐ割れる
砂山を動かすやめに要る器
何気なく相槌うつてから小雨
こだわるとフォントの違い見えてくる
切り札を握つたままで正座する

大洲市 花岡順子

何気ない言葉ネットを騒がせる
躓いた石を拾つてからの運
リハビリのページは生きていく痛み
変わらないことを自慢にする田舎
真つ新ののれんをくぐる開店日

阿南市 小畑 定弘

のんびりと生きる余生の微調整
句読点どこで打とうか後期です
B面に日の目を当てる定年後
空白のページに恋を眠らせる
食うことは即ち老いが生きること

宮崎市 黒木 栄子

また明日二度と聞けない友の声
赤いシャツちらつと見える隠れんぼ
院内の呼ぶ名さえぎる私語の山
ひよつとこの法被したたる滝の汗
言われてもぐつと堪える腹の虫

沖縄県 宮 すみれ

衣替え庭もいっぱい花が咲く
聞き上手今日も左右に首を振る
お年頃時計の針が気にかかる
一粒の雨に私をとじこめる
公園は知恵が集まるいこいの場

佐賀県 真島 久美子

八つ目の海は私の中にある
握る手があるから握る熱帯夜
背を向けた瞬間突風になった
塩辛い街だ質屋の看板だ
信じたい顔を首から上に乗せ

青森県 香田 龍馬

心臓よすこし休憩しませんが
だしぬけに好きと言われて水ごくり
欠点を隠さぬあなただから好き
全没をあすのカンフル剤にする
わだかまり水に流したはずなのに

栃木県 廣瀬 良磨

曇天にでてる坊主苦笑い
夏休み部屋から出ない子供たち
向日葵に夏の生き方聞いてみる
炎天下女神に見えるかき氷
暑い夏まるごと包みゴミに出す

富士見市 中島 通則

様々な人生集う趣味の会
探し物で歩数を稼ぐ万歩計
看板のドタバタ劇をわろてんか
母百寿遠い記憶と遊んでる
ジム通いゆるんだ箍を締め直す

横浜市 長島 亜希子

出口調査正直な人多いらし
勝負した時だけ「民意」声高に
投票してないのに札状いつも来る
降れば上がれ晴れば降れと勝手言い
夏休み主婦にとつては繁忙期

静岡市 渡辺芳子

何も彼も焼けて終戦十六歳
今もまだB29の音耳の中
今生きる幸せ告げる亡き友に
日本富士山こんな長生きありがとう

豊橋市 小松くみ子

外気には勝てず静かに眼鏡拭く
水滴も冷酒の旨さひきたてる
クーラーの水滴ポトリ作句帳
ダンゴ虫仰向けのままひからびて

和歌山市 北原昭枝

虫干しの中で見つけた昭和の美
エプロンが穏やかな日をつつみ込む
朝夕の祈り十指にある深さ
厄落し高野まいりの赤とんぼ

和歌山市 鍋嶋澄子

たたく雨ドラマいいとこかき消して
梅雨晴れにお出かけ虫がさわぎたて
ペットボトル水のみほして空の青
やわらかなさし絵手紙に鎮座させ

和歌山市 福島一雄

夏盛り慰霊の鐘の音空し
ご近所へ御糖分けする茄子胡瓜
庭に咲くお花で飾る墓参り
息を吐くおちつく香り仏間から

和歌山市 まつもとともこ

場の空気読んでひとこと言いたがる
シャンプーの香りで嫉妬消している
顔文字の顔のまんまのキミがいる
上巻の途中で迷う本の森

岩出市 村中悦男

退院の何と我が家の広いこと
冗談に本音を入れて気付かせる
消しゴムは筆圧の後消しかねる
息子らが外へ出るなという猛暑

和歌山県 森下よりこ

好きだからより熱心になる仕事
ゆうべ降った雨がうれしい庭の花
今はもう自分のおやつ買うだけに
テレビから腰痛体操みな試す

京都市 北野クニオ

朝型の夫夜型の妻うまくゆく
朝夕の神社参りが身の薬
温暖化亜熱帯だな日本国
世界中自国主義化で纏まらぬ

大阪市 柴本ばっは

夕焼けにほっとしている鬼瓦
キャンプファイヤー消えて九月も駆け足で
秋の絵になりきりました曼珠沙華
今しがた天より竜田姫お越し

大阪市 中村峰子

ボケ防止あれもこれもと試みる
どれか効くたくさんサブリ飲んでます
グレーヘア誰でも似合うはずがない
シミシワにこだわりすぎるコマーシャル

大阪市 前川善之

核兵器持てば平和が来る誤解
タイガース貧打で悩む俺打とか
人生も花火の様に燃え尽きる
練習の努力は嘘を付きはせぬ

大阪市 松田聰

台風があばれぬことを祈るのみ
日韓の関係悪化どこへ行く
安倍さんは議席減らしていばつてる
文在寅あげたこぶしをおろせない

大阪市 宮本千恵子

初盆に義母の好物ずいき炊く
苦瓜の苦さを好む年になり
電気代ケチつてられぬこの酷暑
アブリ使えず年相応の顔写る

大阪市 横山里子

名を撫でる大伯父眠る原爆碑
夢追って捨てた裏町石畳
ふり仮名が浸潤してる球児の名
夏休み遊び仕舞の地藏盆

泉大津市 磯野不二夫

天国に面白味ってあるのかな
明かり消すこの暗闇の涼しさよ
腹八分死ぬとき悔いが残るだろ
微笑みに拒絶もあると気づいてネ

泉大津市 助川和美

せがまれてグリム童話を読む昼寝
水鉄砲子らは元気な夏休み
真夏にも弁当二個の夜勤の子
年一度利息で旅行した昭和

河内長野市 穂口正子

もう五年たてば化粧は止めにする
目覚ましが鳴ってる今朝も生きている
米と北あかんべしつっつハグをする
浮かぶ笑顔川柳愛でたお聖さん

河内長野市 渡邊修

被爆者を逆撫でしてる核兵器
今月も九種のクスリ数合わせぬ
大病後も断酒出来ない意気地なし
置き場所を変えると二人物さがし

豊中市 木藤こみつ

私の今を刻んでいる時計
「ここは私」とおばちゃんレジでよくもめる
涼しい顔で着ているように着る和服
ゆるんだ体に炭酸水がしみてくる

寢屋川市 坂本 ミヨノ

日傘小町若きうぬほれ今杖で
何か決め弁当にしてアイス買う
口紅付け夏祭酔う腰ものび
ゆたゆたの扇風機ゆれ昭和音

羽曳野市 磯本 洋一

高校野球応援のため本日休業
踊り場がオアシスとなり一服す
定年後攻める者なく嬬やかに
サブリ飲み長生きすると酒煙草

八尾市 前田 紀雄

日照不足茄子も胡瓜も臍曲る
私のポケットマネー闇営業
回覧板僕でも出来る渡すだけ
アスリート五輪目指して正念場

大阪府 奥野 健一郎

気を抜けば自分の顔にすぐ戻る
トップの座就けば冒険怖くなる
絡むしか登って行けぬ弱い蔓
すんなりと出るアドリブはらしくない

大阪府 高木 道子

人の輪も背中も丸い同窓会
人情が俯している里の朝
石橋の小さきにすがる蛇の殻
大西日に観音様も猫背ぎみ

神戸市 奥田 宗光

今だから言いますわたし宇宙人
深入りの予感約束してしまふ
金槌と息が合わずに曲がる釘
深深と謝罪誠意が見えぬ故

神戸市 興水 弘

我が変化写真と鏡ウソでしよう
傘寿越え心の鏡透かし見る
後期高齢グチもところろい味に
人生の滓少しは濾して逝くつもり

神戸市 近藤 勝正

太陽が雲を蹴散らす暑い午後
うらめしくお陽様あおぐこの猛暑
熱帯夜邪険にされる掛け布団
暑いのが好きな蝉まで身を隠す

神戸市 山根 弘華

消さないで君が灯した平和の火
一瞬のしがらみほぐす茶の時間
もしかしてあのうれしさは夢の中
福の神私の前を素通りか

尼崎市 清水 久美子

舌鼓打って瘦せたい気が失せる
ゼロひとつまさか見落とす床涼み
暑気中り身体の芯が歪んでる
台風にびびり地震に腰抜かす

伊丹市 平井 富夫

クラス会3度欠席生きてるか
御先祖が植えた茶の葉がおいしくて
痩せないと介護料金倍要るぞ
長生きし少なくなるわ貯えが

三田市 生田 えい子

ダイエット食妻はそれなり痩せる僕
茶飯事も父母の愚痴聞く娘の悩み
親の危機仲をとりもつ愛娘
夢ひとつ乗せてシャボンに空に舞う

三田市 住吉 美和子

百均のスタレ風鈴でも涼し
金魚にも氷ひとかけプレゼント
クーラーも働き過ぎとへそ曲げる
ご先祖を野菜の牛馬がお出迎え

三田市 辻 開子

神頼み足が運べて感謝する
今日もまた事なく過ごせ床につく
続く暑さ料金計算してられぬ
エアコンは猛暑続くも頑張ってる

三田市 中山 寅男

あのハート防弾チョッキ着てるのか
気の迷い検査結果が吹き飛ばす
忍び寄る口の縫れに足縫れ
大声援レジェントを生むエネルギー

三田市 馬場 貴美江

議員さん選挙の笑顔何だっけ
冥土から夫の土産が届かない
今日の日が明日につづくと風が吹く
変りなく過ぎゆく日々にとただ感謝

三田市 森 玲子

タッパが行ったり来たり母の味
口は元気気力体力下り坂
この暑さ水まき楽な雨よ降れ
つんでれの猫に癒され同年

宝塚市 太田 としお

ありがとう言える気持がありがたい
左手に武器右手に平和もて遊ぶ
正直だ思いがすぐに顔に出る
言うことと違いますのよ腹の中

丹波篠山市 澤 良子

疲労ため急な不調で我を知る
お互いの不足禁句のはずなのに
令和の陽余生新たに舵を取る
雑草の根性まねて生きていく

西宮市 高橋 千賀子

飲めぬけどわたし年中ビール腹
お昼寝の金魚おこして餌をやる
運試し初めて買った宝クジ
カーローン終わった頃はポロ車

みどりの風吹き込んで来る住み心地
三木市 山口 ヨシエ

そしてまた腕組みをして雲を追う
影を踏むひとりぼっちの意地と哀
それからをたゆまずに編む波の音

奈良市 加藤 江里子

盆供養今なら解る母のこと

言い忘れ一筆箋に認める

返信待つ時計の針のもどかしさ
菜園の青いトマトの熟れを待つ

生駒市 児 玉 規 雄

改選の度に増えてる新党派

戦争が死語となるのはいつの代か

想い出は脱脂粉乳コッペパン
今晚も悪夢見そうな熱帯夜

奈良県 室 田 行 久

欲しい物余分な物のない余裕
宝くじ当たった夢に運使う

別れると散々喚き元の鞘

九条に過剰反応右左

山口市 青 木 隆 子

猛暑日は二十四時間家の中

レベル3我が家の避難開始時

寝る時はリモコン側に並べ置き
耳遠い母に時々腹を立て

鳥取市 上 山 一 平

猛暑の日逆らわないで水を汲む
そよ風の恋路を邪魔の蝉時雨
高齢化マイナス思考湧くが如
雨乞いによいしょと集う傘踊り

鳥取市 大 前 安 子

途中下車後はゆっくり歩きましょう

遠回り歩幅はいつもマイペース
欲の字に振り回される歩数計
見詰め合い話せばなんのことでない

倉吉市 伊 藤 嘉 昭

育んだ育代の愛は子に孫に

しあわせは祐子の愛とこころ意気

さわやかな理沙のハートに詩ひびく
しあわせが初美六十路も来るように

倉吉市 大 羽 雄 大

海水浴序で水虫退治する

白星を取った粘りの徳俵

乾杯の泡消えてもつづく音頭
時々バランス見てる人の中

倉吉市 宮 田 風 露

羊数えても眠れぬ熱帯夜

脳味噌が茹だってるのか匂にならぬ

八十路の体力奪いに来る酷暑
クーラーの中で脳味噌休ませる

境港市 中井 虎尾

隼ははやぶさ集う駅と知る

景色撮るふりして美女をヌスミ撮り

老級会病気話の花が咲く

妻と俺ものわすれするポケレース

米子市 生田 和之

昼のパン飽きておにぎり買いに行ぐ

将来が未定の孫を自慢する

生き方はまあまあゲームはもつと下手

大勢の人と別れて八十路来る

鳥取県 西谷 悦子

土日休みが増えて車の少なさよ

洗濯物定位置戻す忙しさ

取れだしたら一度にドツとキュウリ茄子

雨降りになると喜ぶ雑草よ

鳥取県 橋谷 静江

野良仕事まだ出来るかと考える

旬の味食べたく野菜作りする

持ち味がだせないままに老いて行く

老いの愚痴黙って聞いてくれるポチ

松江市 相見 柳歩

横にいて優しささしずつくれる

縫うような恋をしました黒電話

棚上げにしていた問いに答えるか

三分の一は眠ってまた寝てる

出雲市 黒目 ひでお

きな臭い中東和平待ち望む

読書して明日の世界を考える

夢叶えん信じた道をまつしぐら

達観し自分を誉める喜寿の坂

瀬戸内市 宮宅 比佐恵

前向きに生きて仏に拾われる

オアシスで笑顔もらって老いている

やりくりしピタミン補給寄席通い

嫁連れて帰ってくると過疎さわぐ

美作市 岡本 余光

来た道をマークしている古い地図

錆びぬよう老いた手足に無理を言う

ど忘れの言葉ひとつに小半日

七回忌終えて老楽再起動

尾道市 小畑 宣之

白髪は黒の帽子がよく似合う

生き急ぐこともなからう蝸牛

自販機のジュースも冷える暇がない

大の字になれる幸せ夏の莫塵

竹原市 土井 輝恵

免許返納孫の涙が効きました

賽の目に任せば転ぶ良い方へ

大活躍息子が開けた家の鍵

この墓は願いを聴いてくれる姉

三次市 伊藤 寿子

残された日々と97歳を愛で
エッセーの載る新聞を待つポスト
蚊帳を吊る夏の思い出昭和恋う
寂聴さんの無欲が長寿の秘訣かも

今治市 渡邊 伊津志

目ざとくて口うるさくて耳遠い
川柳に生きる喜び引き寄せる
生きてゆく余生冷たい向かい風
するすると愚痴を飲み込む心太

高知市 三谷 松太郎

eメール文語体などけむたがれ
豆腐デス冷奴などブジョクです
長ばなしうしろ姿に尾ビレ見え
アブラゼミもしやお前も暑氣中り

福岡県 本田 さくら

「なつぞら」のドラマ呼んでるさあご飯
墓参り何と暑いかな先祖様
蚊ゴキブリ神はなぜナゼ創ったか
上の人大うそついて知らんぶり

唐津市 岩崎 實

残りもの先に食べてはまた残し
眠たさに負け延長戦勝ち知らず
食べ残しヨーカン蟻にしてやられ
握手するするにはするが物別れ

沖繩県 あら さくら

掛け上手うまく紡いだ夫婦橋
どつぷりと落語の世界泣き笑い
また一つ歳をもらってやる気出す
思い出もスマホの中に保存する

沖繩県 禰

モモト

臨月の母終戦にわたし産む
着物からスーツ仕立ては母形見
留守電に電話番号教えてる
二人だけ父は先生子は生徒

白河市 鈴木 たけし

冷蔵庫開けるとレシピ降ってくる
任せたといびつなボール投げて去り
梅雨寒になすもきゅうりもへそ曲がる
異常なしと言われ急に空くお腹

黒石市 千葉 風樹

改元へ曲りキューリは虹になる
クジ運がなぐさめられる虹の空
ちちははの死んだ瓦礫がずっとある
独り居の松葉花火や屈み癖

五所川原市 むらの ひとり

ガガンボよお前も足を持って余す
時化の夜二人の耳は同波長
カナカナもなかなか鳴かぬ北田舎
深い訳ありそうですね彼岸花

(高森一呑さん、高岡弥生さん、巖田かず枝さん、加藤佳子さん、小田幸子さん、住吉美和子さん、岡本余光さんは39頁にあります)

英語 de Senryu⁹⁴

麻生路郎句集 『旅 人』

英訳 吉村 侑久代 Kim Horne

慰謝料の月賦と言うがおかしくて

it's odd to say

that palimony will be done

by installment payment

まちぼうけをさされてもまだ信じたし

he still believes her

even though

she stood him up

odd 奇妙な *palimony* 慰謝料 *installment payment* 月賦払い *still* まだ
believe 信じる *even though* ~だけれども *stood him up* 待ちぼうけをくわせた

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句⁹⁴ 英国俳句協会国際大会 (IHC)を成功に導いたイリヤナ・ストヤノヴァ (Iliyana Stoyanova)による女性俳句選集『シャクヤク』 *haiku anthology: PEONIES*の編集と出版。

今年の5月末に英国の *St Albans* で IHC が開催されたことは『川柳塔』(八月号)でも記しましたが、そこで女性の参加者を待っていたのが *PEONIES* とブルガリア出身の俳人、IHC 大会事務長イリヤナでした。大会参加者による大会作品集 *where silence becomes song* とは別に出版された *PEONIES* もまた実りある産物でした。世界の女性による俳句選集は珍しくはありませんが、24ヶ国から57人の女性による選集 *PEONIES* は、各作品が作者の母国語、英語、そしてブルガリア語の三か国語で構成されていて今までに例がありません。元アメリカ俳句協会会長のチャールズ・トランブル (Charles Trumbull) による序文の素晴らしい作品分析も *PEONIES* の特徴です。彼は各作品を「わび」「ノスタルジア」「影」「告知・禅的な景」「足跡」に分析し、講評しています。日本語は吉村の直訳を付けました。

dinner for one/ on the table/ last night's dishes (Debbi Antebi, UK)

(食卓に一人の夕食 昨夜の料理)

sunrise—/ the darkness looks for shelter/ in the inkpot (Ioana Dinescu, Romania)

(日の出 闇が隠れ場を探している インク壺の中に)

wet asphalt/ a crow's shadow/ slips underneath my feet (Kate Eroshina, Belarus)

(濡れたアスファルト 鴉の影が足元で 滑るように動く)

誹風柳多留一二篇研究 76

細井龍夫・伊吹和男
山田昭夫・石川道子
小栗清吾

清 博美

646 かんさしをふところにして木戸を出る

細井 芝居小屋では終演に際して頭取または扮装のままの座頭役者が「まず今日はこれきり」と切り口上を述べる。ところが、帰りに雑踏にまぎれて頭のを狙うひったくりがあった。その用心のため、女性たちはあらかじめ髪飾りの類をはずして懐中にしまつてから木戸へ向かうのだ。

先ッこんもいひきらぬのにどうろく

傍四 6

今日ハこれ切りかんさしをぬきな

天八 10 15

かんさしをとられてしうとそりや見やれ

明四 仁 7

清 賛。

647 しん水のらうをたすける下女が色

細井 平たく言うと「下女の情人が薪割りやら水汲みやら力仕事の手伝いをしている」というのを、「今遣ニ此力一助ニ汝薪水之郎」という漢文から援用して詠者が自分の教養の高さをひけらかしている。

薪水の勞をたすける下女が色

拾四 17

薪ン水イの勞をたすける馬鹿亭主

六八 18

小栗 賛。「ひけらかす」というほどでもないとは思ふが。

清 賛。

648 その気ざし有て羽織はもたせたり

細井「気ざし」は「吉原行きの兆し」。「持た

せたり」というからお供の者が居ることになる。おそらく葬式への途上だろう。式の後は大一座を組んで吉原へ精進落としに行くことになるだろうという気配(前兆)があるので、供の者に羽織を持たせてお出かけ。供の無い者は類句のように各自持参。

羽おり所持したかごわりく行キ

安八義 5

ぬかる物かへと袖から羽織なり

傍四 5

かくあらんとそんじ羽折持参也

一四 3

山田 賛。雨譚註「喪礼の供」。

清 賛。

649 さい日に御用きんくもので出る

細井 正月と七月の十六日は閻魔様の縁日であるが、丁稚小僧たちにとっては待ち兼ねた年二日だけの休日である。その日には主家から頂いた小遣い銭を握りしめて、お与えのピンピンの新しい着物姿で遊びに飛び出して行くのだ。

斎日に御用大しやおこなわれ

一二 33

山門へ上るまいぞと式百やり

七 30

半分ハしきせで拜むゑんま堂

初 24

小栗 賛。「きんきんもの」は「髪や身なりを当世仕立てにすること」(「江戸語の辞典」)

〔本句引用〕で、着物のみならず、目一杯おめかしして気取って出掛ける様子。
清 賛。これまた「欣欣者」の説明は礎稿の責任。

650 百のかしそれ覚てか日まちの夜

細井 毎月特に正五九月の三、十三、十七、廿三、廿七の五日には潔斎して徹夜で日の出を待つという習俗があったが、眠気さまじにいろいろ遊芸をしたり、果ては小博奕もやったらしい。其処で「先立って貸した百文は忘れないうね」と返金を迫っている人。浄瑠璃「冥途の飛脚」の「それ覚てかいつの事。彼の初雪の朝込に。寝衣ながらに送られし。大門口の薄雪も。……」からの文句取。
上るりの跡トて日まちはかゝ出る

日待の夜紙を敷いたハ姫のせに 安八礼10
へのろんにそれ覚へてか月見の夜 二39

清 賛。

安八梅4

651 はんゑきが首はおさきにつかわれる

細井 燕の太子丹は秦の始皇帝を殺害しよう

と荆軻と秦舞陽の二人の刺客を秦へ送り込んだ。その際、手土産として、秦の將軍だった樊於期の首と返還すべき土地の図面とを持たせたりしたが、結局はその謀略は失敗に終わった。その「手土産」にしたのを「おさき」に使った、と言ったもの。

首トゑづしらあん顔で持て出る 安二礼3
名曲ではんゑきハ首と棒にふり 五二13
はんゑきが首をだいなし棒にふり 一五26
小栗 賛。「お先に使う」は「だしに使う。手段として利用する」(江)。使用例として、真先キのいなり御先キにつかわれる

清 賛。

安六松2

652 田楽へすいつけに来る夕すゝみ

細井 夕涼みをしていて煙草が吸いたくなつたので、ちよつと厚かましいけれど、田楽屋へ火を借りに。豆腐田楽を注文すればいいのに。神田鎌倉河岸の豊島屋も考えられるが、夕涼みだから、隅田川畔にある真崎稻荷境内の田楽屋のこととした方がよさそうだ。

小栗 「夕すずみ」の句は圧倒的に家の近所。「夕すずみ」のために真崎稻荷まで遠征する

とは考えにくい。もちろん、夕すゝみなんの気もなく土手へ来る

七12

という句もあるから、遠出が皆無とはいわいが、家の近所、あるいは、せいぜい近所の盛り場では、いけないだろうか。からりと夕涼みに出て煙草が吸いたくなつたときに、火の気のある店に入るのは自然なことで、田楽屋でも団子屋でもその辺の店が利用されるのである。

だんご見せ吸イ付に来る夕すゝみ

見利寛五天1

清 同右。

653 おてらさまはハむごいと湯ゆでいひ

細井 僧徒、寺院の多い地区にある銭湯では一般人と僧侶とが一緒に入浴することになる。坊さんが立ち上がって頭からザーツと湯を浴びたりすると、側でしゃがんで洗っている一般人の鬚にまでかかつてしまうので、「お寺様、そりゃひどいですよ」ということにな

る。
せん湯て何か気のある水をあび 明元仁5
清 立ち上がる立ち上がらないは別として、坊主が湯を頭から浴びる迷惑か。

令和元年度 路郎賞



松山市

柳田 かおる
やなぎ た

広げすぎた羽をじょうずに畳めない
保護色の中で言いたいことをいう
コワレそくなわたし乾燥注意報
力むから肩がやさしく描けない
ソプラノになった吹っ切れたのですね

路郎賞の一報をいただき、驚きで舞い上がっています。今でも信じられません。自然体で平凡な句を取り上げていただき、ありがとうございます。大好きな川柳、今後とも指導よろしくお願いたします。諸先生、選考委員の皆様方に心より感謝申し上げます。

柳 歴

平成二十八年 川柳塔誌友

平成二十九年 川柳塔賞受賞

平成二十九年 川柳塔同人

路郎賞準優秀作第一席

大阪市 平井 美智子

懸命に歩く斜めになりながら

矢印が消えたあたりで昼にする

神さまのエールか肩に鳩の糞

裏おもてどちらが出てても諦めぬ

耕してみようか愛が面白い

路郎賞準優秀作第二席

鳥取市 河川 無限

ふる里の頑固がなぜか心地よい

弱点に触れるとダンゴ虫になる

折れた矢が山積みだった父の書架

水山の崩れる音を聞くカルテ

押さないでまだまだ未練あるこの世

令和元年度 川柳塔賞



松山市

郷田みや

川柳塔賞準優秀作第一席

岡山県 藤澤照代

虫のいい話は眼鏡拭いて聞く
母の手にかかると弾む糸玉
百歳まで使う鍋よく磨き上げ
糸口を掴んだ朝のはずむ靴
ふるさとのさかな銀色うみのいろ

川柳塔賞準優秀作第二席

横浜市 川島良子

常温に戻すと喋りだす本音
忘れないことは忘れぬ記憶力
考えてみますはNOのサインだな
あの時に迷った答 糸を引く
「たられば」の話 女子会盛り上がる

炭酸で割ってスッキリさせましょう
オリオン座いい日だったな帰り道
約束をしたことがないこぼれ種
菜の花は分かっています風の色
今日の気分 うす紫のスニーカー

授賞のご一報をいただき、驚いております。
一年間続けて投句できた事へのご褒美でしょう
か。毎月八句を、いつもギリギリになって、ポ
ストイン。飾らず、素直に自分を表現できてい
たような気がします。
選者の皆さまに、そして、励ましてくれた柳
友に、感謝の気持ちでいっぱいです。
どうもありがとうございました。

柳歴

平成 十七年 愛媛県社会保健センター
柳柳教室 受講
平成 十八年 川柳まつやま吟社 受講
平成二十八年 川柳塔誌友

令和元年 路郎賞得点表 (応募総数116名)

1位 = 5点 2位 = 4点 3位 = 3点 4位 = 2点 5位 = 1点
(表の数字は得点)

作家 選者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
小島 蘭幸		1	3						4	5		2			
新家 完司		3		4					1	5				2	
三浦 強一					3				4		2			1	5
金子美千代			2						5		1			3	4
柿花 和夫	3				2				5		4				1
伊達 郁夫			1		2				4	5				3	
片山かずお			1	4						3			5		2
籠島 恵子	5						3			2	4			1	
堀 正和		4						5				3	1	2	
山田 葉子				2					5	3				4	1
森山 盛桜	1				5				2		4		3		
松本 文子	1					3			5		4			2	
川崎ひかり	3				2	1								4	5
計	13	8	7	10	14	4	3	5	35	23	19	5	9	22	18
	辻 内 次 根	丹 下 凱 夫	細 川 花 門	水 野 黒 兔	藤 井 則 彦	小 河 柳 女	藤 井 寿 代	井 丸 昌 紀	柳 田 か お る	平 井 美 智 子	糀 谷 和 郎	中 村 伸 子	平 田 実 男	両 川 無 限	村 上 直 樹

令和元年 川柳塔賞得点表 (応募総数55名)

1位 = 5点 2位 = 4点 3位 = 3点 4位 = 2点 5位 = 1点

(表の数字は得点)

選者 \ 作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
小島 蘭幸			3		2			1		4		5			
新家 完司			4	1				3				5	2		
三浦 強一					3		1	4	5			2			
金子美千代					5		4	1			2	3			
柿花 和夫			4		1			5					3		2
伊達 郁夫		1	2		3			5					4		
片山かずお	4		2			3						1			5
籠島 恵子			3		2				4		1	5			
堀 正和		2			4	3					5				1
山田 葉子			2					4	1	3			5		
森山 盛桜	5	1								2	3			4	
松本 文子		3			2				4	1			5		
川崎ひかり			2		3			4	1			5			
計	9	7	22	1	23	8	5	26	16	6	15	14	29	6	8
	中筋弘光	三谷松太郎	清水久美子	山端なつみ	川島良子	齋藤奈津子	中島通則	藤澤照代	花岡順子	原熊知津子	小畑定弘	青木隆子	郷田みや	副井ゆたか	太田省三

令和元年度 愛染帖賞

受賞作品

岡山市 丹下凱夫

気に入りのステテコ穿いて引きこもり
世間から見ればオイラは紛い者
飲んで寝るだけのことならまだできる
心掛けしだいのできるゴミ拾い
百にでもなれば終活考える

評 丹下凱夫：自嘲に嫌味がないのは、自らを客観的に見ている視線が冷静であり自己分析が正確なため。「紛い者」はいささか言い過ぎの感はあるが、誰しも似たような想いはある。川本真理子：「老骨に沁みる」「何らかの欠乏」など、自らの身体と心に対する想いを皮肉っぽく述べていておもしろい。岸田 武：「日記には書けない事」「ほんとうの事しか言わぬ」など、哲学的な深い想いを優しい言葉で述べていて見事。池田美穂：「ベンだけで」には多くの人が「同感」だろう。「君が代の練習も」の「も」が効いていて愉快。（新家完司・記）



丹下 凱夫

嘩然、呆然としながらも、無茶苦茶に喜んでいる私です。
蘭幸先生、完司先生、朱夏先生に感謝、ありがとうございます。
います。道博君に感謝、ありがとうございます。
これからも、自分が存在する句を追いつづける決意です。
よろしく願いたします。

準賞作品

東京都 川本真理子

老骨に沁みる平年並みの冬
何らかの欠乏 チョコが止らない
お互いに謝るべきを一つずつ

府中市 岸田武

日記には書けない事は忘れられない
ほんとうの事しか言わぬ人がいる
なまんだぶ唱えていけばいいと言う

米子市 池田美穂

ベンだけで私を見せる難しさ
君が代の練習もいる選手たち
IPSもGPSも役に立つ

柳歴

- 平成15年 矢掛川柳会 入会
- 平成24年 山陽新聞カルチャープラザ
川柳（新家完司）教室 入会
- 平成25年5月 川柳塔社 誌友
- 平成27年12月 川柳塔社 同人
- 平成25年7月 弘前川柳社「林檎」 誌友
- 平成30年1月 弘前川柳社「林檎」 同人

賞 様 檯 令和元年度

受賞作品

松江市 藤井 寿代

鮮やかな私の彩で立ち上がる

評 毎月700余りの力作と格闘、いい勉強になりました。どの作品も趣味の域を超えて、人生前向きに生きる姿を詠むその姿勢に感動しました。特に受賞作品、準賞作品にそれを見ました。候補作品は身近な仲間の実体験と重なり嬉しく推薦しました。

共選について富美子さんのアドバイスと先人の「選者の心得」を範にして、やっと終えた一年間でした。ありがとうございました。(川端 一步)

評 あつという間の一年であったが選者にとっても充実した日々であった。

作品の質の高さ、共選の面白さを読者と共に十分楽しませて頂いた。受賞作、候補作共に句の向こうに一度や二度の挫折には負けぬ作者の人生が鮮やかに見えた。今後共なお一層のご活躍を期待したい。(山岡富美子)



藤井 寿代

理事長さんからの一報で、私は顔をピンタされたような衝撃を受けました。駆け出しの頃のようなワクワクドキドキ感がなくなり、全国誌上大会を拝見する度に、皆様のすばらしい句に圧倒されるばかりでした。改めて真面目にせよ。もつと川柳は楽しいものなんだよ。と喝を入れられたような気がしません。選者の先生方に改めてお礼申しあげます。

準賞作品

岡山市 丹下 凱夫

あの世まで歩く大きく手を振って

土佐清水市 辻内 次根

大浪小波人に復元力がある

候補作品

米子市 竹村 紀の治

飛ばされた土地でたんぽぽ城を建て

和歌山市 武本 碧り

不揃いの中で普通が光ってる

柳 歴

平成二十三年 川柳塔誌友
平成二十六年 川柳塔同人
平成二十三年度 各地柳壇賞受賞

令和元年度 一 路 賞

受賞作品

和歌山市 武本 碧
たけもと みどり

湯通しをするとこだわり溶けていく

評 本賞の碧さんの句、暮しのいろいろな場面における各人各様の「こだわり」への対処法を湯通しという比喻で、見事に表現されていて秀逸である。

準賞の康子さんの句、近頃、人情味の薄くなった世間を筆ほど愛を…とズバリご指摘。

同じく準賞の静枝さんの句、ゆつたりとして気持ち良い作品。

評 本賞の碧さんの句、人生経験を積めば積む程、どなたでも自身の「こだわり」が多少はある筈。けれども時には偶には見直しましょうと言う気にもさせられる作品です。準賞の康子さんの句、見つけも十七音の響きも素敵。準賞の静枝さんの句、発想から飛翔ということばに作者のお元気な姿も想像しています。

(久保田千代)

準賞作品

筆ほど愛を下さい生きるため

モットーを外し発想から飛翔

候補作品

一年生みんな大きい返事です

大あくび宇宙の虫が目覚ます

山やまなか中 康やすこ子
 有ありうみ海 静しずえ枝

稲いなみ見 則のりむね彦
 酒さか井 健けんじ二



武本 碧

和歌山城のすぐ近くに住んで居ります。大阪まで電車で一時間という便利な所ですが、周辺は木々の緑に恵まれライトアップされたお城は見事です。思いがけず一路賞受賞のお知らせを受け、酷暑にバテ気味の背筋がピンと伸びました。今後共よろしくご指導賜ります様よろしくお願ひ申し上げます。

柳 歴
 平成 五年 和歌山三幸川柳会入会
 平成 八年 川柳塔 誌友
 平成 十四年 川柳塔 同人
 平成二十七年 一路賞準賞
 平成二十八年 一路賞準賞

令和元年度 各地柳壇賞

受賞作品

寝屋川市 伊達 郁夫

作り笑い君も寂しい人なんだ

評 社交辞令の愛想笑いを冷ややかに見つめ、単に相手に同情するのではなく自身に投影しているのだ。「君も」がそのことを顕している。人間社会にもまれてきた作者ならではの句想である。準賞のページが日誌とすれば、この空白は何を意味するか、考え込む作者の姿。次のやさしさは愛である。愛をなくした私は枯れるしかなくその苦しむ課程の表現が巧み。

評 複雑な人間の内面をよく見抜いておられます。いつもここにこにこ明るい人の孤独を巧みに詠まれました。

準賞一句目、文字に表せないほどの深い思いのある白いページ。二句目、忙しさのせいでしょうか、人への気配りを忘れ、潤いを失ってゆく自分。いずれも心情のよくわかる句です。

(山本希久子)



伊達 郁夫

川柳の門を叩いて、十五年。私にとって川柳人生の節目の年です。そんな時、素晴らしい賞をいただきうれしく思っています。

これからは、折り返しの川柳人生と認識して、のんびりと川柳と付き合っていくつもりです。川柳に巡り会えた幸せに心から感謝しています。

準賞作品

文字よりも重たい空白のページ
やさしさを忘れ乾いてゆく私

鴨田 昭紀
倉益 一瑤

候補作品

平凡の非凡に気付く日向ぼこ
告白をしてから薔薇は色褪せる
無添加の愛を注いで気づかれず
新しい波だびょーんと飛んでやる

山野 寿之
山岡富美子
吉村久仁雄
池田 純子

柳 歴

平成 十七年 城北川柳会 入会
平成 十八年 川柳塔社 同人
平成二十三年 路郎賞準賞

受賞者の皆さまおめでとう

小 島 蘭 幸

令和元年度の六賞を受賞される皆様は、心からお喜び申し上げます。

酷暑の中、今年も8月12日に、川柳塔社事務所で第一次選考を行いました。第一次選考委員五名が、それぞれ、路郎賞、川柳塔賞の応募作品の中から佳句をチェック、その作品の中から佳句のチェックの多い順に私が最終の十五名を選んで第二次選考の皆さまにお願いしました。

路郎賞の柳田かおるさんは、松山をはじめ四国の大会で常に佳句を発表されています。準賞のお二人は、指導者としても活躍をされています。

川柳塔賞の郷田みやさんは、柳田かおるさんと共に四国の大会で常に佳句を発表されています。準賞のお二人は、川柳塔誌上で常に佳句を発表されていて、今後同人としての活躍が期待されます。

愛染帖賞の丹下凱夫さん、檸檬賞の藤井寿代さん、一路賞の武本碧さん、各地柳壇賞の伊達郁夫さん、おめでとうございます。

今回の六賞も女性の活躍が顕著でした。特に松山のお二人は共に切磋琢磨されていて素晴らしいと思いました。

受賞の皆さまおめでとう。

二賞選考経緯

西 出 楓 楽

台風10号が近づいて来たせいか、湿気を含んだ風が強くなってきた8月12日、午前10時に令和元年二賞の選考が始まった。

委員は蘭幸主幹、完司理事長、大輪副主幹、朱夏副理事長、私・楓楽相談役の5名。はじめに送られてきた1人1人の応募用紙を名前の欄は隠し、じっくり検討し5句とも受賞に相応しいと思われるものを欄外に、イニシャルをつけ5名で順番に回す。

その時思うのだが、この賞は句の良いことはもちろん、自選の選句眼も大いに問われる。例えば、5句のうち4句まで優れているのに、1句が力量不足のことが往々にして見受けられ残念に思う。同人・誌友の皆さんには、普段から多くの秀句に接し、作句力はいうまでもなく選句眼も培ってほしいと切に願う。

こうして選ばれた推薦者の多い順から、蘭幸主幹によって再チェックの上、15名に絞り込まれ一次選は終了。

二次選は、蘭幸主幹、完司理事長のほか全国4ブロック11名の選者によって行われ、今年も川柳塔社として誇れる二賞を発表することが出来た。

二賞候補者在住地

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
路郎賞	土佐清水市	岡山市	神戸市	豊中市	豊中市	鈴鹿市	松江市	大阪市	松山市	大阪市	明石市	上尾市	宇部市	鳥取市	河内長野市
川柳塔賞	松江市	高知市	尼崎市	加西市	横浜市	豊中市	富士見市	岡山市	大洲市	河内長野市	阿南市	山口市	松山市	鳥取市	池田市



蝶と蜂と蛍

子どもの頃に覚えた学校唱歌は生涯忘れないものです。「ちようちよ ちようちよ 葉の葉にとまれ」や「トぶんぶんぶん はちがとぶ」や「トぼたるのやどは 川ばたやなぎ」など、歌い出しの数行はすぐに出てきます。

直進の力の欠けているちようちよ
てふてふと飛んでいるのが蝶である
遙かから君も来たのか揚羽蝶

肩に蝶今日は良いことありそつだ
余生だと思っていない蝶が舞う

庭に来るシングルライフらしい蝶
喪の傘に付かず離れず蝶一羽

畦道に喪服纏った秋の蝶

トンボや蜂の飛び方はスイスイとスムーズですが、蝶々はひらひらふらふらと何やら頼りない感じがします。それを「直進の力が欠けている」と分析したのも、旧仮名遣いの「てふてふ」の形で飛んでいると見たのも面白い川柳眼です。

蝶々で真つ先に浮かぶのが紋白蝶ですが、日本には約24種類もいるとのこと。中にはまるで喪服を纏ったような真つ黒なものもいて、さまざまな想いを抱かせてくれます。

ガラス戸の向こうで蜂が恋してる

金持と見て蜜蜂が寄ってくる

みつばちが大忙しのいい日和

簪を付けて蜜蜂飛んで来た

上山ヒサヲ

田沢 恒坊

小谷 小雪

長谷川健一

木村 徑子

池田 文子

上村さな恵

竹尾 久恵

畑中 節子

坂倉 広美

森下よりこ

尾畑なを江

墓そうじ無精を蜂に叱られる
蜜蜂の稼ぎをパンに塗っている
働き蜂刺したい奴が多すぎる
降参しても許してくれん雀蜂
岡田 史郎
津村志華子
森田 律子
田中 重忠

蜂にも蟻と同じように「働き蜂」と「女王蜂」がいて、それぞれ役割を担っています。私たちが見かけるのは働き蜂で、やはり蟻と同じように「猛烈な蜂」と「普通の蜂」と「怠け蜂」がいるとのこと。飛び回る蜂と歩き回る蟻が似たような法則で生きているとは思議なことです。

蜂蜜の甘さはサトウキビや甜菜から造った砂糖とは全く違います。その上品な味は蜂がせっせと集めた花蜜からのもの。蜜を採取した代りの砂糖水など、蜂は「けしからん！」と思っているでしょう。刺されるのはそれが原因かも？

幸せな蛍はリズムよく光る
都倉 求芽

蛍飛ぶ兄の戦死を聞いた道
金近 愛子

賑やかに舞つても淋しげなホタル
細田 裕花

乱れ飛ぶ蛍に頼む村おこし
藤井 正雄

蛍見て小さな胸に灯が点る
眞山 博充

熱帯夜月もホタルも眠れない
吉川ひとし

誰でしょう 蛍が肩を離れない
時枝 京子

死に場所を探して飛んでいる蛍
高田まさし

蛍が光る間隔は種類によって異なりますが、ゲンジボタルでは一分間に25〜30回。それがリズムカルなのは「幸せな蛍」と言う作者。人間の生活リズムも同じかもしれません。幼虫の餌になるカワニナも蛍そのものも養殖販売されていますが、生まれ育つ清流は大切に残したいものです。

愛染帖

新家 完司選

(投句264名)

札幌市 三浦 強一
食い足りぬ飲み足りませんまだ米寿

(評) 長寿の条件もいろいろあるが、定刻になるとグーと鳴る胃袋もその一つ。この調子でギネスの長寿記録にチャレンジしよう！

桜井市 安土 理恵
愛された頃思ひ出す恥ずかしさ

(評) 理性より動物的本能で動いていたあの頃。もう半世紀以上も昔のことだが、思い出すと恥ずかしい。愛した方も照れくさい。

尼崎市 山田 耕治
住み難くなつたと蚊まで言いに来る

(評) 卵を産む水溜まりが減ったことに加え、35℃を超す猛暑は蚊も活動し難い。珍しく「ブーン」と言ってきたのは愚痴らしい。

奈良市 大久保眞澄
大きな声だ無作法でいい人で

(評) 声の大きい人は明るくて開放的でいい人。ばかりならいいのだが、稀に相手の言うことを聞かず自己主張オンリーの人がいる。

香芝市 大内 朝子
こめかみをぎゅつと押ししたら動く脳

(評) こめかみは目の疲れに効くツボ。軽く揉むとスッキリする。「ぎゅつ！」と押したら脳が動く、かどうかは個人差があるかも…。

八尾市 前田 紀雄
南海トラフが先か寿命が先か

(評) 今後30年以内に南海トラフ地震が発生する率は80%とのこと。できるなら、私があの世へ行ってからに願いたいものである。

佐賀県 真島久美子
大人だとそろそろ自覚しなくては

(評) 高齢になつても所作や言葉に「子どもっぽさ」が残っている人は好ましい。無理に自覚しなくても「ありのままに」がベスト。

米子市 中原 章子
ETCバーが上がつてホツとする

(評) 高速で突っ込む事故防止のためにバーの動きは遅く設定している。おかげで、いつも「開くのか？」とギリギリまでヒヤヒヤ。

神戸市 敏森 廣光
身の丈を少し伸ばして生きている

(評) 地位や収入の「丈」は掴めるが、自分の能力となると解らない。だが、「丈」以上に頑張っているとそれが実力になつてくる。

神戸市 大頭としお
二千万貯めてポツクリ逝きはつた

(評) 金融庁の「老後の暮らしには公的年金

以外に二千万必要」という発表。せつせと貯めても、遣わずポツクリでは残念無念。

高槻市 松岡 篤
無口だが暑いですねえなら三言える

三田市 福田 好文
暑いあつい言うても暑いもう言わん

和歌山市 磯部 義雄
太陽へ文句ひとこと言う猛暑

沖繩県 禱 モモト
亡き父の匏で削るかき氷

八王子市 川名 洋子
冷房のない店がいいかき氷

岡山市 大石 洋子
カップ入り細切れスイカ食べる夏

豊中市 上出 修
猛暑日に窓のすだれも熱中症

箕面市 中山 春代
此の上はピキニのパジャマ熱帯夜

弘前市 稲見 則彦
室外機君も辛から熱帯夜

堺市 遠山 唯教
蝉しぐれ平和の礎なでやる

大阪府 坂 裕之
夏風邪に布団かぶつて汗をかく

豊屋川市 富山ルイ子
この世の暮らし終わりにしたいこの暑さ

大阪府 谷口 義
Tシャツを順番に着て夏終わる

大阪市 津守 柳伸
凍らせたボトル3本バス旅行

川西市 山口 不動
緑陰や先に来ている犬の友

鳥取市 永原 昌鼓
熱中症怖いが電気代も怖い

河内長野市 中島 一彌
水風呂に浸かり猛暑を凌いでる

鳥取市 田中 天翔
くたびれたトドが二匹の夏の居間

岡山市 丹下 凱夫
小用に立つことだけの体たらく
エアコンに頼って三毛と居間暮らし

香芝市 山下 純子
隠しても恋のフェロモン溢れ出す
妻の座に座ぶとん5枚重ねてる

米子市 吉田 陽子
ユーチューブ頼りに襖張り替える
身ぎれいにしておく歳がとしだから

宝塚市 太田としお
忘れたことも忘れだしたら要注意
老人にも夢がありますポックリ死

大阪市 平井美智子
スキップもできず自転車にも乗れず
着メロの音から湯気が出る酷暑

松江市 石橋 芳山
出不精になったダルマになつている
皮膚呼吸全開ゴキブリを狙う

松江市 中筋 弘充
住職が張り切っている初の盆

東大阪市 北村 賢子
別別の時も紡いで共白髪

土佐清水市 辻内 次根
色付きに下着を替えてよく乾く

鳥取県 門村 幸子
一日中正座保てたのは昔

三田市 大西 重男
杖ついてアいらブユは言い辛い

橿原市 居谷真理子
馬たちにオッズを教えないように
神様に詫げるバイキングの後で

藤井寺市 高田美代子
ガラスの靴履いてた頃もあったんよ
お風呂場の鏡が痩せなさいと言う

倉吉市 岡崎美知江
補聴器をつけて笑いの仲間入り
家系図がピリオドになる気がしたず

横浜市 菊地 政勝
いい骨と言われるように魚食う
せせらぎの飛び石まえに足すくむ

三田市 上田ひとみ
根気とか努力とかには縁がなく
一番に蚊が狙うのはこの私

鳥取市 奥田 由美
鳥取道クラッシュ事故の前走る
待たなくてもきつと来るよね増税日

池田市 太田 省三
南海も西鉄もいた野球帽

大阪市 江島谷勝弘
勝つても最後まで観ぬタイガース

安来市 原 徳利
ハイエナのしつこさ欲しいタイガース

鳥取県 斉尾くにこ
高齢者自分のことと思えない

黒石市 北山まみどり
美しく老いる自由に生き延びる

沖繩県 あらさくら
これからは日々記念日にする老後

松山市 栗田 忠士
ほうれい線もいいな百寿の笑いじわ

松山市 柳田かおる
口角を上げてほうれい線を消す

神戸市 上田 和宏
生命線に今はどこかか聞いている

塩竈市 木田比呂朗
変わりなしカルテさつさとスクロール

河内長野市 山岡富美子
冷奴付け合わせには凝っている

奈良市 山本 昌代
青紫蘇のメリハリが良く冷奴

沖繩県 宮 すみれ
マンネリにバブリカカす夏の味

神戸市 山口 光久
生活を曝け出してるゴミ袋

米子市 池田 美穂
カラカラの脳からやつと一旬出す

河内長野市 梶原 弘光
淀んでた句会令和のニューカマー

鳥取県 山下 節子
川柳もりハビリになる辞書を引く

東京都 川本真理子
十七文字に嘘をついた日の後味

堺港市 藤原 久直
没ばかりまだまだだとハガキ出す

笠岡市 藤井 智史
全没の呪いを呼名にて祓う

三田市 多田 雅尚
五割にも満たぬ選挙で民意とは

千葉市 海老池 洋
投票率五割切っても民主主義

大阪市 石田 孝純
四捨五入弱者を捨てる民主主義

堺市 坂上 淳司
総理挨拶のマイクが拾うデモの声

岡山県 高岡 茂子
マンボ・ジルバ踊った足に今湿布

唐津市 仁部 四郎
年毎に残高が減る空元氣

河内長野市 原熊知津子
炭酸の抜けた相手で間がもたぬ

鳥取県 橋本 整
年金が出たからウナギ楽しもう

奈良県 安福 和夫
これも愛今日もアッシー特売日

岡山県 藤澤 照代
べたんこの座布団だされ寛げた

鳥取市 山野すみれ
雑草の緑が好きで生えたまま

三原市 鴨田 昭紀
お独りになって生き生きたマダム

箕面市 広島 巴子
受診待ち今日の我慢を使い切る

高槻市 片山かずお
増えたのは整形外科とデイハウス

大阪市 小野 雅美
スマホケース千円札を振じ込んで

富田林市 山野 寿之
一人つていいな二人はもつといい

豊橋市 西郷紀美代
理由付けしないと出来ぬスクワット

堺市 奥 時雄
仕事適当交際費不適當

鳥取市 前田 楓花
あと少しのところでスカート閉まらない

弘前市 福士 慕情
鉢植えの松と宇宙の話する

海南市 堂上 泰女
老夫婦労わるように富貴蘭

岡山県 山縣のぶ子
桔梗一輪今日の対話を弾ませる

大阪府 米澤 椒子
複数の荷物になると置き忘れ

西子市 黒田 茂代
復唱をしとく眼鏡を置いたとこ

大阪市 樋口 眞
老人もメガネ補聴器金が要る

岡山県 田中 恵
ばあちゃんの好みに熟れるプチトマト

米子市 伊塚美枝子
西瓜ドロボウ昔カラスで今タヌキ

朝霞市 前田 洋子
預かって持て余してるカプト虫

今治市 渡邊伊津志
しょうもない人と許している微笑

西宮市 緒方美津子
奥は見ぬチェックの甘い冷蔵庫

大阪市 柴本ばつは
ぼちぼちと燻るものが脳にきた

鳥取市 岸本 宏章
ほどほどにしてと長湯を論される

長岡京市 山田 葉子
外国語ばかり飛び交う京のバス

神戸市 富永 恭子
夫婦仲あぶり出されるバスの旅

唐津市 山口 高明
橋架けて鳥は施錠のいる暮らし

豊中市 松尾美智代
お元氣ですか ちあきなおみの歌を聴く

句会あと友と掲げる生ビール
羽曳野市 中川ひろ介

後期にもヨイショしてくる夜の街
高槻市 初代 正彦

ピアノパー客総員のフルバンド
熊本市 杉野 羅天

下戸だけど誘いいそいそ夏の宴
奈良市 辻内げんえい

うだる夏酒はぬるめで鱧に梅
三田市 尾崎 一子

亡き父に吞ませたかった大吟醸
富士見市 中島 通則

枡酒のこぼれた酒も代のうち
男鹿市 伊藤のおよし

いわしフライ一枚あれば良いつまみ
江南市 脇田 雅美

ちよつとだけ嬉しい時はビール飲む
米子市 成田 雨奇

発泡酒コマーシャルほど旨くない
大阪市 宇都満知子

願望と現実隔つ濁り酒
美作市 岡本 余光

体よりサイフが止めるもう一杯
寝屋川市 岡本 勲

飲み友の疎遠暑さの所為にする
鳥取市 上山 一平

朝方の冷気に目覚め酔いさめる
河内長野市 黒岩 靖博

酒税から見れば可愛い消費税
尼崎市 清水久美子

消費税値上げ切手よおまえもか
貝塚市 石田ひろ子

脳トレは孫の宿題程が良い
鳥取市 谷口回春子

花の巴里 彼もできずに3ヶ月
豊中市 木藤こみつ

くじけずにこれからをゆく自分流
三木市 山口ヨシエ

雨の間の薄日のような妻笑顔
宝塚市 丸山 孔一

赤ちゃんのお肌目指している食事
藤井寺市 太田扶美代

騒乱罪たかがゴキブリ一匹で
河内長野市 村上 直樹

円満の鍵は忍耐鈍感力
河内長野市 大島ともこ

目と耳を治し4K買う準備
京都市 榎本 宏子

発車ベル止むなと願う三十歩
橋本市 石田 隆彦

靴の中小石がツボをおしまくり
豊橋市 小松くみ子

アキアカネですと鷹の爪もらう
堺市 加島 由一

加齢臭振り撒きまっすくに生きる
門真市 坂本 星雨

朝刊も夕刊も先ずテレビ欄
大阪市 藤田 武人

休刊日忘れ朝刊取りに出る
三田市 辻 開子

二千万に少し足りないけど平気
羽曳野市 徳山みつこ

扇風機体重計みな爪先でON
京都市 都倉 求芽

日系僧侶のダジャレも混じる法話聴く
岩国市 上村 夢香

樹木葬いずれ肥料になるのかな
尼崎市 永田 紀恵

新しい家族は気位高い猫
京都市 清水 英旺

カラオケでときどき余白埋めている
和歌山市 松原 寿子

キャッシュレス只で買物した気分
豊中市 齋藤奈津子

基準をどこに置いて個性と言うのやら
岩出市 村中 悦男

ドッキリするニュースに耳が馴れてくる
岸和田市 雪本 珠子

毒舌がうれしい夫の回復期
大阪市 田中ゆみ子

背中かく時に便利な夫の手
大洲市 花岡 順子

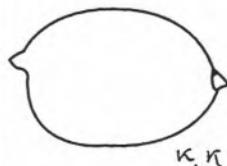
子と交わす指きりげんまん聞く野地蔵
黒石市 千葉 風樹

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)

(投句 339名)



「袋」 水野 黒兎選

箸袋師は産みたての一句記す
 セリ落す袋で手揉み跳ねる鯛
 お袋という温かい日本語
 おふくろの味に男は煮崩れる
 気もゆるみかんにん袋大欠伸
 レジ袋君には何の罪もない
 自惚れを詰めた袋がバンクする
 パンパンの堪忍袋破れそう
 繕った堪忍袋撫でている
 うまい話乗って出口のない袋
 笑い袋につられて笑う仁王さま
 胃袋にまだ別腹のある至福
 菌周ボケツト袋の中の嫌な奴
 年金が小さくさせるのし袋

出雲市 伊藤 玲峰
 鳥取市 上山 一平
 千葉市 海老池 洋
 高槻市 原 洋志
 雲南市 永見 安子
 奈良市 大久保真澄
 鳥取市 夏目 一粹
 大阪市 中村 峰子
 大阪市 小野 雅美
 三田市 尾崎 一子
 和歌山市 三枝真智子
 大山市 金子美千代
 熊本市 杉野 羅天
 和歌山市 堀 富美子

「袋」 鴨谷 瑠美子選

箸袋師は産みたての一句記す
 いさぎよく甲子園去る砂袋
 しあわせの音だけ入れる福袋
 足袋を佩く母は和装の花を抱く
 気遣いも気さくに受けるずだ袋
 薬袋を忘れて旅の三日間
 お袋に「さん」まで付けて照れ隠し
 詰め放題袋のパンはべっしゅんこ
 お土産は袋の中で出番待ち
 行列の先頭寝袋で徹夜
 レジ袋で鯨を殺す地球人
 ごみ袋一人住まいは軽すぎる
 目立たない袋に入れる宝物
 仰向いて底の粉まで袋菓子

出雲市 伊藤 玲峰
 八尾市 宮西 弥生
 箕面市 酒井 紀華
 長野県 丸山 健三
 高槻市 初代 正彦
 岡山市 丹下 凱夫
 三田市 多田 雅尚
 倉吉市 宮田 風露
 大阪市 坂 裕之
 河内長野市 中島 一彌
 堺市 坂上 淳司
 八幡市 今井万紗子
 黒石市 北山まみどり
 大阪府 米澤 俣子

私を全部詰め込む頭陀袋	三木市	山口ヨシエ
愚痴詰めた袋を粗大ゴミに出す	大阪市	古今堂蕉子
3円のレジ袋にも消費税	東大阪市	佐々木満作
ズダ袋提げて明日の夢を買う	鳥取市	前田 楓花
嘘っぽい罫を仕掛けた袋とじ	松山市	栗田 忠士
ゴミ袋カラスが見たら福袋	尼崎市	永田 紀恵
欲望の袋の底が抜けている	鳥取市	倉益 一瑤
終活へ袋詰めする恋その他	今治市	永井 松柏
ママチャリのサドルに着せるレジ袋	米子市	竹村紀の治
言い過ぎて胸に重たい砂袋	西州市	西田美恵子
頭陀袋下げてワイルドぶってみる	奈良市	安福 和夫
羊水で育つ命にある神秘	香芝市	大内 朝子
ふくらんだりユックもしもを詰めている	神戸市	富永 恭子
ゴミ袋両手に今日の事はじめ	神戸市	近藤 勝正
デジタルの袋の中の鼠です	枚方市	丹後屋 肇
人生の悲喜こもごもにのし袋	さいたま市	星野 育子
堪忍袋時々ガスを抜いておく	大阪市	平賀 国和
風船になりたかったとポリ袋	高槻市	島田千鶴子
種袋命の音を確かめる	大阪市	田中ゆみ子
外交は袋小路の四面楚歌	札幌市	小沢 淳
胃袋を大切に生き今白寿	神戸市	能勢 利子
それぞれに等身大のマイバッグ	西宮市	亀岡 哲子

意志弱く開けたら最後袋菓子	大阪市	高杉 力
腹は立てない堪忍袋がある	米子市	後藤 宏之
袋にはカードで膨らんだ財布	堺市	奥 時雄
米袋五キロ入りならまだ持てる	鳥取市	岸本 宏章
歳かなあ袋は小さく軽い物	鳥取市	岸本 孝子
繁盛亭笑い袋を空にする	寝屋川市	伊達 郁夫
袋から取り出すまではわからない	羽曳野市	三好 専平
胃袋にずしんと響く妻の愚痴	富田林市	山野 寿之
レジ袋今や地球の無法者	河内長野市	梶原 弘光
環境の保護から消えるポリ袋	堺市	遠山 唯教
生きてやる非常袋に水と夢	西宮市	緒方美津子
下さるなら頂く袋持っている	八尾市	宮崎シマ子
亡妻の字で朝顔とある種袋	堺市	加島 由一
お袋の顔はますますお月さま	奈良県	中堀 優
胃袋が欲しがらる酒だ拒めない	羽曳野市	吉村久仁雄
袋小路そこが僕らの宇宙基地	弘前市	稲見 則彦
レジ袋お断わりしてエコ参加	香芝市	山下 純子
釣柄の武器は鉛ちゃんポチ袋	河内長野市	村上 直樹
お袋と呼んでくれたは婚養子	京都市	樹本 宏子
ばあちゃんの袋思わぬ物も入れ	日高市	根岸 方子
レジ袋なけりゃ環境良くなるの	奈良市	宇賀 史郎
今月は出番があつたのし袋	寝屋川市	平松かすみ

袋からたまに取り出す速い夢

東京都 川本真理子

夢の欠片閉じ込めてある天袋

尼崎市 藤井 宏造

お袋のにおいも添えて芋届く

寝屋川市 岡本 勲

御袋の味をつないでいく女系

横浜市 加藤 佳子

知恵袋チャックが錆びて開かない

唐津市 坂本 蜂朗

善悪の過去を集めて袋綴じ

富田林市 山野 寿之

五欲まだ重たい古希の頭陀袋

羽曳野市 中川ひろ介

袋帯早や胎動を抱いている

島根県 伊藤 寿美

子の胃袋を満たすことのみ母の汗

門真市 坂本 星雨

袋とじにしたいページもある日記

堺市 澤井 敏治

取り出せるのか袋小路に在るデブリ

堺市 坂上 淳司

レジ袋今や地球の無法者

河内長野市 梶原 弘光

清濁を吞んで布袋の太鼓腹

南あわじ市 萩原 狸月

豹柄の武器は鉛ちゃんポチ袋

河内長野市 村上 直樹

塗りつぶしするか袋とじにするか

倉吉市 牧野 芳光

専門書より確かな祖母の知恵袋

尼崎市 清水久美子

我慢詰めた袋一気に発火する

奈良県 渡辺 富子

正論が袋叩きにあう会議

堺市 村上 玄也

潮風も袋に詰めた一夜干し

奈良県 長谷川 崇明

袋菓子ポリポリ食べている孤独

貝塚市 吉道あかね

まっ白い袋に入れておく明日

大阪市 平井美智子

生も死もいっぱい詰めて頭陀袋

大阪市 内田志津子

詰め込んだ記憶袋の破裂音

富田林市 中村 恵

万能の袋フロシキ至上主義
繕った堪忍袋撫でている

堺市 澤井 敏治

このところ肩身の狭いポリ袋

大阪市 小野 雅美

マイバッグ地球のエコにまず一步

西子市 黒田 茂代

辛い過去袋に詰めてかける紐

和歌山市 上田 紀子

笑い袋ときどきネタを入れ替える

枚方市 藤村 亜成

のし袋前列にある御盆玉

札幌市 三浦 強一

袋からはみ出してきたおせつかい

八尾市 山根 妙子

言い過ぎて胸に重たい砂袋

神戸市 富永 恭子

夢の欠片閉じ込めてある天袋

西子市 西田美恵子

塗りつぶしするか袋とじにするか

尼崎市 藤井 宏造

祝儀より計ののし袋多くなり

倉吉市 牧野 芳光

非常袋出番ないよう祈ってる

大阪市 榎本 舞夢

見せる様を持つシャネルの紙袋

豊中市 齋藤奈津子

紙バッグ老舗の文字があたたかい

大山市 関本かつ子

手さげ袋女は過去を持ち歩く

和歌山市 松原 寿子

ポケットへ入れると泣きじゃくるこぶし

桜井市 安土 理恵

まっ白い袋に入れておく明日

黒石市 千葉 風樹

お盆玉を差し出す美しい袋

大阪市 平井美智子

袋帯早や胎動を抱いている

藤井寺市 高田美代子

パツと目を引き寄せている紙袋

島根県 伊藤 寿美

ポリ袋世界中から叩かれる

奈良市 山本 昌代

愚痴詰めた袋を粗大ゴミに出す

神戸市 山口 光久

大阪市 古今堂 蕉子

喜怒哀楽詰めた暮らしの知恵袋
 エコバッグ持って日傘を差す紳士
 袋帯きりり五山に灯が燃える
 堪忍袋にはミシン目が入っている
 地下足袋の臭い忘れぬ母の爪
 袋小路そこが僕らの宇宙基地
 断捨離で残った袋には懺悔
 むぎゅむぎゅと育てた子等は袋出る
 袋とじ開くと澄んだ秋の空
 悠悠自適のつもり袋のねずみかも
 今日一日女演じた足袋を脱ぐ
 白足袋が夏を蹴ってる阿波踊
 のし袋緩く世間と結んでる
 幸不幸包んで行き来闘斗袋
 胃袋を掴む相手がまだいない
 胃袋を掴めと母は書き遣す
 胃袋を天日干しする二日酔い
 手さげ袋女は過去を持ち歩く

秀句

羽曳野市 藤原 大子
 大阪市 宇都満知子
 大阪市 津守 柳伸
 鳥取県 斉尾くにこ
 男鹿市 伊藤のぶよし
 弘前市 稲見 則彦
 堺市 柿花 和夫
 鳥取市 大前 安子
 安来市 原 徳利
 和歌山市 武本 碧
 高槻市 富田 保子
 箕面市 中山 春代
 大阪市 原田すみ子
 出雲市 竹治ちかし
 和歌山市 定松 宏枝
 明石市 糶谷 和郎
 和歌山市 西川 千鶴
 桜井市 安土 理恵
 広島市 松尾 信彦
 真屋川市 川本 信子
 羽曳野市 徳山みつこ

ブランドの袋しゃらつと男持ち
 エコバッグ持って日傘を差す紳士
 顔出しただけで歓声カンガル
 堪忍の袋は予備も持っていく
 スランブだ袋小路の五七五
 時々は笑い袋の紐を解く
 大切な書類を袋とじにする
 買い物のお供はいつもマイバッグ
 金額は太い目に書く闘斗袋
 祝金勿体振った内袋
 プライドも顔も袋に入れられる
 詰め込んだ記憶袋の破裂音
 知恵袋チャックが錆びて開かない
 正論が袋叩きにあう会議
 虐待の子の胃袋に何も無い
 欲望を詰める袋に底がない
 我慢詰めた袋一気に発火する
 ビバークの寝袋うれし星の下

秀句

松山市 宮尾みのり
 大阪市 宇都満知子
 河内長野市 大島ともこ
 土佐清水市 辻内 次根
 大阪市 江島谷勝弘
 和歌山市 定松 宏枝
 鳥取市 土橋 螢
 高槻市 片山かずお
 豊中市 藤井 則彦
 豊橋市 西郷紀美代
 松江市 石橋 芳山
 富田林市 中村 恵
 唐津市 坂本 蜂朗
 堺市 村上 玄也
 鳥取県 斉尾くにこ
 千葉市 海老池 洋
 奈良県 渡辺 富子
 大阪市 柴本ばつは
 羽曳野市 徳山みつこ
 大阪市 谷口 義
 奈良市 米田 恭昌

「ぐるぐる」

(投句 210名)

吉村 久仁雄 選



ばれぬよう嘘をぐるぐる巻きにする
 老春にぐるぐるネジを巻き直す
 見てるだけ五千歩かせぐ百貨店
 思い出を回転させる嫁いだ娘
 幸不幸ぐるぐる順にやって来る
 回覧板廻し出会った星月夜
 酔っ払い同じ話が回りだす
 地球儀ぐるぐる戦渦の地を想う
 エンジンを止めてスリルの渦潮船
 巡る四季良くも悪くも最早喜寿
 同じところぐるぐる眠れない嫉妬
 デパ地下をぐるぐる避暑と味散步
 デパ地下を妻の従者も巡らされ
 腹の減る会議はどうとうめぐりする
 よくもまあ倦きずに回るお月さま
 2歳児がぐるぐる描く母の顔
 花丸をもらい跳ねてるランドセル
 日替りでヒーロー変わる孫五歳
 人間の時間ぐるぐる巻きにされ
 妹の服は私の服である

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-------|-----|-------|-------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|
| 三原市 | 鴨田 昭紀 | 八幡市 | 今井万紗子 | 河内長野市 | 穂口 正子 | 大阪市 | 柴本ばっは | 鳥取市 | 大前 安子 | 海南市 | 堂上 泰女 | 鳥取市 | 岸本 宏章 | 池田市 | 上山 堅坊 | 羽曳野市 | 中川ひろ介 | 三田市 | 尾崎 一子 | 大洲市 | 花岡 順子 | 池田市 | 奥園 敏昭 | 神戸市 | 上田 和弘 | 明石市 | 桃谷 和郎 | 丹波篠山市 | 長谷川善輔 | 豊橋市 | 西郷紀美代 | 岡山市 | 藤澤 照代 | 大阪市 | 原田すみ子 | 鳥取市 | 夏目 一粋 | 三田市 | 上田ひとみ |
|-----|-------|-----|-------|-------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|

心配が夜の天井かけ巡る
 回遊魚寿司になっても回ってる
 気絶するほど回りたい観覧車
 残り人生どう巡りそれとも良い
 遠回りしても真実掴みたい
 納豆に朝の空気を混ぜている
 生きていくぐるぐる波紋描きながら
 椅子取りゲームいつも遅れをとっている
 回転木馬外の世界を知らぬまま
 コーチャアの腕も折れよとサヨナラ打
 台風と同じつむじも左巻き
 ふる里を持たぬわたしは回遊魚

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|-----|------|--------------|-----|-------|----------------|-----|-------|----------------|------|------|----------------|-----|-------|----------------|-----|-------|---|-----------------|-----|-------|---|-------------|-----|-------|---|-----------------|------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-------|-------|-----|-------|-----|-------|-------|-------|----|------|----|-------|-----|-------|
| 観覧車一回転で済まぬ恋 | 三田市 | 村田 博 | せめてもは環状線の一人旅 | 海南市 | 小谷 小雪 | 逢えた日は三重丸を書いて寝る | 橿原市 | 居谷真理子 | 長かったところどころで空廻り | 四條畷市 | 吉岡 修 | ぐるぐる主婦の時計は二十五時 | 長野県 | 丸山 健三 | ぐるぐる干支は加速をして巡る | 豊中市 | 水野 黒兎 | 地 | 輪廻転生しても軍手として生きる | 黒石市 | 千葉 風樹 | 天 | 一心に命乞いする百度石 | 香芝市 | 大内 朝子 | 軸 | ラーメンか寿司か生き方定まらず | 藤井寺市 | 太田扶美代 | 池田市 | 太田 省三 | 尼崎市 | 清水久美子 | 米子市 | 伊塚美枝子 | 宝塚市 | 太田としお | 土佐清水市 | 辻内 次根 | 奈良県 | 渡辺 富子 | 犬山市 | 金子美千代 | 河内長野市 | 原熊知津子 | 堺市 | 奥 時雄 | 堺市 | 坂上 淳司 | 西予市 | 黒田 茂代 |
|-------------|-----|------|--------------|-----|-------|----------------|-----|-------|----------------|------|------|----------------|-----|-------|----------------|-----|-------|---|-----------------|-----|-------|---|-------------|-----|-------|---|-----------------|------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-------|-------|-----|-------|-----|-------|-------|-------|----|------|----|-------|-----|-------|

「料理」

富永恭子選

(投句 209名)



手料理でええと言うたら冷や奴
 ス克蘭ブルエッグになった目玉焼き
 盛り付ける料理一役買う器
 我儘な夫をさらり料理する
 ご褒美に今夜は好きな栗御飯
 美味しいと一言添える娘の料理
 豪快な男料理の匙加減
 おもてなし日本料理も出番待つ
 ミシユランに知られたくない美味い店
 湯豆腐にしつとり癒える南禅寺
 デパ地下で晩のメニューを決めてくる
 料理本積んでお昼はお素麵
 ハーブ料理に昭和の男一歩引く
 手料理が得意と聞いたはずだけど
 手打ちそば昔変らぬお品書き
 夏風邪の妻に黙って粥を煮る
 料理番組ほくにも出来る気にさせる
 雑炊をふうふう冷ます暑氣払い
 夏バテにギョウザ作って子等をまつ
 精進料理供え迎える亡父と亡母

堺市 澤井 敏治
 大阪市 高杉 力
 出雲市 竹治ちかし
 大阪府 米澤 俣子
 西予市 黒田 茂代
 寝屋川市 富山ルイ子
 富田林市 山野 寿之
 橋本市 石田 隆彦
 神戸市 松倉 正美
 池田市 上山 堅坊
 鳥取市 岸本 孝子
 藤井寺市 太田扶美代
 河内長野市 原熊知津子
 神戸市 近藤 勝正
 札幌市 小沢 淳
 八王子市 川名 洋子
 札幌市 三浦 強一
 生駒市 飛永ふりこ
 和歌山市 北原 昭枝
 豊中市 松尾美智代

わたくしは煮ても焼いても食えませんが
 カツカレー覚え单身婦任する
 組板に出番がないと拗ねられる
 アテに凝り一人手作りする酒豪
 ピチピチのヤリイカ捌き地酒酌む
 白魚の指ではんなり料理され
 いただきますこちそうさまが聞きたくて
 薄味の料理抜がる長寿国
 津軽冬鰯一匹を捌く妻
 ぐつぐつもとろも煮る祖母の味
 やり練りの料理へ母の腕が冴え
 解禁の鮎待ちわびる台所

佳句

地産地消拘る里のレストラン
 ブツ切りの男と旨い酒を飲む
 うわさ話上手に料理して配る
 今日のがだぐだ軽く炒めて塩コシヨウ
 輪になった笑顔が旨いバーベキュー

人

愛込めて手間ひまかけて焦げました 丹波篠山市 澤 良子
 二人居のメニュー昭和を出たがらぬ 箕面市 中山 春代
 胃袋を掴んでからのいろはには 河内長野市 森田 旅人
 軸

煮て焼いて和えてバランスとる和食

鳥取市 田中 天翔
 唐津市 仁部 四郎
 大阪市 小野 雅美
 羽曳野市 吉村久仁雄
 河内長野市 木見谷孝代
 和歌山市 武本 碧
 神戸市 能勢 利子
 大阪府 寺井 弘子
 大阪府 稲見 則彦
 明石市 糀谷 和郎
 横浜市 菊地 政勝
 防府市 坂本 加代

大阪市 内田志津子
 橿原市 居谷真理子
 奈良県 渡辺 富子
 東京都 川本真理子
 大阪市 石田 孝純

初しぎ教室

題一知恵

居谷 真理子

「悪知恵」「知恵袋」「知恵の輪」が多く詠み込まれました。頓知、英和、機知、理知、世間知…。「知恵」には似た意味を持つ言葉が多くあります。類語辞典などを活用して、言葉の幅を広げていくのもいいですね。

(原は原句 参は参考句)

原 悪知恵もほどほどにする婆の知恵 一 平
悪知恵と知恵、二つ重ねた面白さはありませんが「婆」が気になります。ばば、ばあ、どう読んでも響きが強くて扱いにくい言葉です。
参 悪知恵も加減ほどよいおばあちゃん
原 犯罪の悪い知恵出る馬鹿な人 ミヨノ
参 犯罪に知恵をしぼっている愚か
原 知恵がつき上手にエサをねだる猫 厚 江
参 ねだり方上手になった猫の知恵

原 あの知恵とこの知恵あわせまだ足らん 千代
面白いですね、更にひねりたくまりました。
参 良い知恵と悪知恵足してまだ足らん
原 入れ知恵をする者がいて纏まらず 正 美
参 入れ知恵をされたか話蒸し返す
原 知恵絞りに来た結果はゴミ箱へ 洋 一
何に知恵を絞ったか知りたいです。
参 知恵絞りに来た提案ゴミ箱へ
参 ゴミになる一句へ知恵をふりしぼる
原 ない知恵を絞り出しては身を守る 峰 子
参 ない知恵を絞り出しては越えてきた
原 悪知恵は曲げて曲がつてもものになる 和 之
もっ少し強くしましょうか。

原 子育てに知恵と笑顔の愛も足し(譯)良子
「愛も足し」まで言うとかどいんです。
参 子育ての知恵を包んでいる笑顔
原 代々の知恵あつてこそ農作業 隆 子
参 代々の知恵に教わる農作業
原 知恵絞る二日後に来る筋肉痛 (貝)正 子
脳の筋肉?ならばなんとも面白い。
参 知恵絞る脳に二日後筋肉痛
あるいは
参 筋肉痛いつ何したか考える
原 貸し下されになったあなたに借りた知恵(貝)正 子
貸被下(かしくだされ)。「貸し下され」は貸しっぱなし、「借り下され」は借りっぱなし。
以上辞書を引いて知りました。

参 ひん曲けても一度曲げて悪知恵に
原 知恵袋あつたらほしい今すぐに ゆ き
参 行き暮れた私にほしい知恵袋
原 もう傘寿知恵より欲しい記憶力 佳 子
きちんと出来上がった句ですが。
参 こうなれば知恵より欲しい記憶力
原 ずれて来た自慢の知恵も小出しなる えい子
下五、小出しになってきた、ということでしょうが。句意が変わるかもしれません。
参 小出しする自慢の知恵もずれてきた
参 あなたには貸し下されになった知恵
原 僕の知恵遊びの中で産まれ出る 久 直
参 たつぷりと遊べは知恵も湧いて出る
原 知恵袋スベアが欲しい老いの脳(飯)澄 子
参 知恵袋どこへやったか老いの脳
原 外交は押したり引いて知恵比べ 三樹夫
着眼は独自、もうひとひねり
参 外交は押し引く呆ける知恵比べ
原 IQと知恵者は別と子に説いた 一 弥

参 I Q と知恵は別だと子に教え

原 知恵の輪に脳の衰え指摘され

参 知恵の輪に脳の衰え笑われる

原 5 歳児が少し覚えた悪い知恵

下五が一番印象に残ります。「悪い知恵」

は後味が良くないです。

参 もう五歳ちよつぱりずるいこともでき

原 知恵をだせ天候異変世界的

その通りですが、川柳らしく。

参 早く知恵出さねば地球ゆである

原 イライラをためて筋道取り違う

参 イライラが邪魔をしている知恵の道

原 知恵の輪を解いていくよう思春期ね

参 思春期という知恵の輪を解いていく

参 思春期という難しい知恵の輪だ

原 バーゲンという知恵の輪にひっかかる

「知恵の輪」と使わなくても。

参 バーゲンという作戦にまた負ける

原 悪知恵はセンスいるから僕は無理

愉快な句です、笑いました。

参 悪知恵のセンスがなくて僕は無事

整

「幼な児」の「な」は慣用的な送り仮名で
す。「幼児」「幼子」で「おさなご」と読みま
す。この句の格調を生かして。

参 幼児にもう生まれ出た玉の知恵

原 読書して無い知恵少し補つて

参 読書して私に知恵を一つ足す

原 知恵袋売つて下さい高くて

参 有り金をはたいても買う知恵袋

原 老いて今育てた子らに借りる知恵

参 老いて今素直に子らに借りる知恵

原 智恵袋未だに続く菓子銘菓

参 知恵に知恵積んで統いていく老舗

原 受験前文殊菩薩にごまをする

知恵の題で文殊菩薩ですか。なかなか知恵

を絞りましたね。緊迫感を加えて。

参 受験前文殊菩薩にすがりつく

原 人の知恵あざ笑うよな天変地異

下六はできるだけ避けましょう。

参 天変地異人間の知恵あざ笑う

原 産声と挽歌の道に知恵袋

独特の着眼と表現です。

原 知恵出せと言われ溜息先に出て
参 知恵出せと言われ溜息先に出る
参 知恵は出ぬ溜息ならばなんぼでも
原 雨の日は乾物使用お惣菜
生活の中から生まれる句、いいですね。

参 雨の日は乾物探す台所
参 雨の日のために乾物買つてある
原 ババの知恵よりもスマホが頼られる
参 ばあちゃんの知恵よりスマホさんの知恵
参 おばあちゃんスマホに訊くわ黙つてて

「佳句」

スマホには太刀打ちできぬ浅い知恵

浅知恵でいいんだどうせ多数決

知恵袋ちびりちびりと出し惜しみ

知恵の輪で前頭葉をゆさぶつて

知恵袋義母から私そして嫁

確実に解ける知恵の輪選ぶカン

だまつて今無い知恵をしぼるとこ

「今月の推せん句」

知恵の輪に少しは使う力づく

そつえば知恵熱出した記憶ない

二三回頭たたいて練る秘策

岩口のぞみ

近藤 勝正

伴 よしお

光雄

紀美代

亜希子

里子

みちを

川柳塔鑑賞

同人吟 村上直樹

—9月号から

生きてやる死ぬ死ぬ詐欺と言われても

細川花門

その意気！私達も見習いたいものです。
病魔に負けず、老いにも負けず！

不死鳥の如く頑張りぬいてください。

祝われてほんとに百寿と確信す

秋元 てる

見事に百歳！本当におめでとう様です。

しかも作句できる若さ…後輩一同益々の
ご長寿ご健吟を祈ります。

明日よりは一日若い今日を生く

富永 恭子

人生で一番若い今日を大切に懸命に！
その様に考えて一日を無駄にしない様若
さを満喫したいですね。

医者を出すクスリを止めてから元気

早川 遡行

診察券とクスリの数との自慢は止めて
前向きに健康寿命を伸ばしたいもの作者
の意気軒高が見えるようす。

だとしても老いには老いの絵が画ける

福井 菜摘

老いて益々…亀の甲より年の功…前向
きに生きる作者の姿勢こそ大切。さぞや心
豊かな日々でしょう。お見事です。

車との決別老いはまた楽し

坂上 淳司

私も免許返上の身です。寂しさと不便こ
れを乗り越える事で新しい生活。新しい楽
しみが産まれます。躊躇せず勇気を出して
下さい。

私もまた支柱頼りに生きている

木見谷 孝代

菜園の胡瓜も茄子も人間も…弱い。誰か
の支えにこそ感謝の毎日ですね。

間引き菜をしつつ思うよ運不運

長谷川 崇明

運不運は紙一重。「人間万事塞翁が馬」
運良く生き抜いた私達は強運の持ち主折
角の強運をしつかり生かしましょう。

だからって人の所為にはしなさんな

古今堂 蕉子

人間はとかく勝手なもの、他人に責任を
転嫁しがちです。よく考えてみれば…胸に
手を置いてみたいですね。

舞い終えるまでへなへなになるまいぞ

西口 いわゑ

まずは心そして肉休。命尽きるまで元
氣。作者の心意気到大拍手！しかしその為
にお互いそれなりの努力が必要です。

曇りのち晴れ今日をリセットする夕陽

柳田 かおる

いろいろ苦労したけれど…明日こそに
期待して美酒に酔いゆったりと眠る。人生
すべからかく有りたいたいものです。

聖子逝き水府路郎を偲ぶ雨

米田 恭昌

川柳を愛し川柳を大作で世に披露した
田辺聖子さんが逝去された。川柳界の理解
者であり恩人である。再読は―道頓堀の雨
に別れて以来なり―だ。

やれ打つなDVですと妻が言う

丸山 孔一

世はまさにDV万能時代。蚊も殺すなど
は行き過ぎではないかとの問題提起か。

古代への鍵穴みたい古墳群

奥 時雄

世界文化遺産指定おめでとうございます。鍵穴から古代が生き返ってくるでしょう。大いなる賑わい期待の地元も燃えています。

五月から万葉集を日に一首

加島 由一

令和になって万葉集が売り切れるとか、日本人としてこの機会に古文化に親しむ特に子供達に読ませたいですね。

ひらがなの便りほのぼの連れてくる

中村 恵

もうこんなに字が書ける…成長の速さお孫さんの手紙に思わずニコリ…老夫婦の幸せが伝わります。

疲れたと言わぬルンバを褒めてやる

米澤 淑子

Aーよ豪雨なんかならないか

藤原 大子

昭和人間には想像も出来ない便利な時代。自動運転も目前。これでは人間の仕事が無くなる。シンギュラリティ二〇三五説が囁かれています。一方異常気象の退治には無力。台風も荒れるに任せる…科学はど

うなっついていくのでしょうか…。

絶え間ない火種ヒトとは国家とは

山岡 富美子

令和来て決意新たに原爆忌

三浦 強一

科学はどんどん進む。人間は何千年前から相変わらず殺し合いの繰り返し。進歩なし。動物の性なんかねえ。

戦争は…原爆は…日本人だからこそ断固として反対の声、信念を繋ぎたいもの。戦争の悲しさを知っている者の務めです。

ライバルが私だなんてありがどう

西田 美恵子

憧れを持って見つめられている貴女。目標にされ改めて自分自身への誇り、自負生きる責任の重さも感じますね…。

明日担う子等へ未来の鍵渡す

平尾 菜美

どんな鍵を渡すのか…子供達の幸せを願わない親はいません。孫や玄孫はどんな暮らしをするのでしょうか…幸せたれ!

まだ歩こい事待っておりそうだ

吉岡 修

そうです。いついつまでも希望を持って歩き続けましょう…また新しい希望も生まれるに違いありません。額を上げて…

励まして叱って誉める子守歌

田賀 八千代

育児について哀しいニュースに接します。愛が籠っていけば時に厳しい訓えも子は理解する筈。親の責任その重さを思います。在るがまま深入りせずに素で居たい

自分らしく、自分なりに生きて行くこと

足立 つな子

自分らしく、自分なりに生きて行くこと。大切さ難しさ…逃げでなく飽く迄前向き。しっかりと勇気をもって生きたいものです。

川柳に嵌まり今では溺れている

山下 節子

羨ましい…溺れている貴女に憧れを感じます。どうぞいつ迄もどっぷりと川柳に浸かり生涯の友たらんことを…

その笑顔のまま真ん中に立ちなさい

居谷 真理子

笑顔、笑顔、笑顔こそ宝石。真ん中に立つて笑顔のまま前に前に…一歩また一歩。しっかりとゆっくり…。

腐葉土になって悟りの命抱く

伊達 郁夫

悟りは土に還って初めてと言うのか作者。煩惱は尽きないまま命を終える運命はお互い様ですね。

水煙抄鑑賞

—9月号から

上田 ひとみ

病む友の便りを風よ知らないか

稲角 優子

心配しているのです。本当は側へ行つて、あなたを力づけたいのです。風よ、私の代わりになっておくれ。

責任を背負うと強い足になる

花岡 順子

やっかいな事、しんどい事からは、誰も逃げたい。でもあなたの力強い足は、いつでも味方です。

わき道に逸れてドラマが面白い

中前 幸子

筋書き通りはつまらない。ならば、いつそハラハラ、ドキドキを楽しんで。

湿っぽい話は避ける老夫婦

上山 堅坊

ともかくも、今日一日を楽しく過ごすことが大事。しっかりと食べてよく眠る。

気休めに飲んだサプリが効いてきた

斎藤 隆浩

サプリの広告、すごいですね。何かいいものがありましたか。教えて欲しいです。でも、あなた自身が変わったのかも知れませんよ。

元気でず震える文字で来た賀状

中山 昭美

その文字を見ただけで、涙が止まりません。思わず賀状を抱きしめています。

夏の陽がおつかれさまと暮れて行く

北原 昭枝

近年の夏の厳しさは、心身共に堪えますね。無事に暑い日を過ごした安堵感も。

一つずつ納得しながら老いてゆく

宮宅 比佐恵

昨年と比べてみても仕方ない。平等に一年ずつ年齢を重ねてゆくのだから。それもこれも全部愛しい私。

カプセルホテルの中身として眠る

月波 与生

寝ごこちは如何ですか。まだ利用したことはないのですが、宇宙船のようでもあり、薔玉のようでもあり、はたまた母の胎内のようでもあり。

白髪寄せ幼なじみの悪だくみ

小田 幸子

何だか楽しそう。私もその仲間に入れてほしいです。ヒソヒソ、ウシツシ。

何時だって出番を待っているレモン

森 廣子

声かけてね。スタンバイしています。結構、いい味出しますよ。乞う期待。

ピーマンもわたしも夏に生き返る

米田 利恵子

パワーのあふれた前向きな貴女。夏うまれかしら。これからも貴女らしく。

信用をしてくれるよ君はナスの花

近藤 勝正

薄紫のかわいい茄子の花。下向きに咲くとか。子を思う親の気持も感じとられて、優しい作者の視線です。

傘寿でも一番美人と言われたい

横溝 安子

だっていくつになっても、ほめられたい、キレイでいたい。皆さん、宜しく。

ぼんぼんと漁船行き交う夜の底

山口 ヨシエ

旅先で、ふと目をさますと漁船らしき音が。一枚の絵のような深い時間で。

めぐり逢い 細川花門

君と僕とのめぐり逢い 人と人とのめぐり逢い
見えざる糸に結ばれて 必ず きつと めぐり逢う

四年前の三田さくら祭が川柳とのめぐり逢いであった。六月
興味本位で川柳さんだの「めだかの学校」に入会。

当日、川上富湖さんの「愛というとてもほこした葉」の
一句に衝撃を受け、ほくの「川柳の旅」が始まった。

北野哲男氏の「楽しくなければ趣味じゃない」のひとつに共
感。のびのびとした会の雰囲気がとても良かった。

堀正和氏は初心者へのほくの良き川柳の先達であった。

八月に川柳塔の誌友。翌年五月本社句会に初参加。十二月に
同人。多くの柳人と知故を得た。五年目を迎え、さてこれから
頑張るぞと決意した矢先、今年の六月「末期癌」の宣告。

死ぬことは寂しいけれど怖くない 花門

蘭幸は言葉少なに聴いてくれ

恵美子より朱夏よりの文目が潤む

新家完司からお大事にお大事に

楓楽の便り人情ありにけり

大輪の文にはつらい過去がある

花道に招いて呉れたのは真理子

激励の鈴木いさおの手が温い

(六月の選者席にて)

(句集を拝受、感謝)

(大山瀧句集を拝受)

(行間に見るお人柄)

(夫婦句集 二重奏)

(選者に指名、感謝)

(豆秋の講演に拍手)

川柳塔 万歳！
川柳の絆はとてもすばらしい 花門

令和元年度(第31回)

川柳塔碑合祀祭実施要領

本年度川柳塔碑合祀祭を下記の通り行いますので、ご参列賜
りますようご案内申し上げます。

合祀祭日 令和元年11月8日(金) 雨天でも行います。

集合場所 南海電車 難波駅 3階北改札前

集合時間 午前9時30分(川柳塔の茶色の旗をあげておきます。)

乗車時間 特急「高野」午前10時発に乗車します。

事前申込者には割引周遊券特急券を購入しておきます。

会費 4,900円(往復乗車券および往きの特急券、昼食費)

帰路の特急券は各自でご購入願います。

合祀祭会場 〒648-1041 和歌山県伊都郡高野町高野山17

高野山霊園内 川柳塔碑前(奥の院下車、徒歩5分)

大霊園事務所 ☎0736-56-2966

到着後すぐに法要を営みます。

(午後12時30分より約30分の予定)

合祀予定者 (敬称略) (逝去された同人で高野山基金に参加されている方)

松村里江、田中みね、竹口清信、鶴田遠野、松山芳生、

津守なぎさ、升成好、島田誠一、酒井真由

(9名様)

『麻生路郎読本』余滴 (54)

路郎の「川柳人協会」②

栗原道夫

成に向けて準備していた。そのような関東の川柳人からすると、路郎の「川柳人協会」が突然設立されたというニュースには、困惑し驚嘆するしかなかったのだろう。「京濱川柳吟社聯盟」は、この年の11月3日に発会した。

陣居は、最後に次のように述べている。

図があるのではないかと危惧したのだろう。陣居の文章に対し、路郎は「川柳雑誌」(昭和11年9月15日発行)の「川柳協会の❖頁」で、次のように述べている。

(前々號(七月號)で川柳人協會創立の

路郎の「川柳人協会」の名譽會員に岸本水府の名がないことに、「きやり」(昭和11年9月1日発行)の「川柳萬歳の唱和へ」で遺憾の意を表明した品川陣居だが、陣居自身、路郎の「川柳人協会」に全面的に賛意を表していたわけではない。「川柳萬歳の唱和へ」からの引用である。

「三味線草」の「川柳人協会」設立の記事を引用した陣居は、次のように述べている。

(これが眼を見張らずにゐられようかである。正直言へば「京濱川柳吟社聯盟」も何もあつたもんぢやないといふ気がする一方、麻生氏の快刀亂麻を斷つ底の(筆者註——「その」の誤りか?)お腕前に只々驚嘆するのみであつた)。

当時、関東では「京濱川柳吟社聯盟」結

ブロックは流石に麻生氏の詮衡だけあつて地方別的にみてもよく行き亘つてゐるが、「柳壇の嗜宿坂井(筆者註——「阪井」の誤り)久良伎翁はじめ斯會(筆者註——「斯界」の誤り)の明星達」といふレヴェルを僕らが認識するに當つて、複雑な事情もあらうが、僕らは麻生路郎氏のフアツシズムの匂ひを嗅ぐことはないだらうか。現日本柳界の統制がフアツシズムを必要とするかどうか——といふ問題は論議されて然る可きだと僕は思ふのである。／京濱川柳吟社聯盟結成近きの日に當つて大阪に於けるこの川柳人協會の創立へ敬意を表するために、僕らは心から「川柳萬歳」の唱和をしたいものである)。

路郎が自ら理事長を務める「川柳人協会」に、川柳界を独裁的に支配しようとする意の將來を祝福するに足るものがあつた。なにかんづく「きやり」誌上には論陣の雄、品川陣居氏が堂々三頁にわたつて理解と同情に富める健筆をふるはれ、川柳人協會の創立に敬意を表し、心からなる「川柳萬歳」の唱和をされてゐるに至つては感激の外はない。／川柳人協會は眞に川柳を愛する人々によつて除々的(筆者註——「徐々的」の誤り)に築城的に形成することを期してゐるのであるから、如何なるデマにも驚かないし、怖れもしない。少々のデマ位では齒の立たぬところに協會の強味がある。協會の敵は川柳の敵、このスローガンで押して行くことを誓ふ。／従つて川柳人協會は協會の事業に理解なき人々に強ひて賛同を需むるものではない。徐ろに説いて靜に賛同を俟つばかりである)。

陣居は、「きやり」（昭和11年10月1日発行）の「明るくなつた川柳壇を見よ」で、さらに次のように述べている。

◇川柳人協會と麻生氏の立場

前回「時評」に對し、大阪「川柳雜誌」麻生路郎氏から左の如きお端書を頂いた。

きやり誌上の玉稿、眞に理解ある筆として感謝致して居ります。川雜九月に書かんとする事にも觸れてあるので、次號御一讀の榮をたまはりたいと存じてゐます。

不逞にも多少機微に觸れた内容であつたにも拘はらず、同氏が釋然として「感謝」して下さつたことは、まことによろこばしい、固より虚心坦懐である小生として、この御過褒に感銘する他ないのである。

川柳人協會に對する我々關東側の認識が、川雜八月十五日號を披見することに依つて多少修正された感じがある。それは、吾々が餘りに川柳人協會といふ名稱の美しさに眩惑されてゐたといふことである。といふことは麻生氏が同誌に發表された「川柳職業人宣言」の一文が、麻生氏の生地を餘りに率直に表明してゐるからである。曰く

私はいよく川柳で飯を食ふことにし

た。イヤ喰べさせて貰うことにした。

×

と云つたところで、今のところ、すぐそれが實現するものとは思つてゐない。今日の米代が直ちに私の川柳から生れるとすればそれは奇蹟に近い。

しかし、世のなかのことは能はざるに非ず、爲さざるなりである。非職業人としての私の苦闘はあまり長かつた。

×

私は萬難を排して「川柳雜誌」の個人經營を應諾し、茲に斷然職業川柳人として起つに到つたのである。しかも前述の如くこれによつて口に糊することはあまりに薄いのであるから、例へ職業川柳人を標榜するとも其の完成を遠ぐるまでは著述業者としての麻生路郎をもお忘れなく御後援を仰ぎたいのである。

由是觀之、麻生路郎氏を理事長とする川柳人協會は、是を極言すれば麻生氏の川柳的錦の御旗である。欣持（筆者註——「矜持」の誤り）であるとする昨日までの吾々は少し考へ過ぎた嫌ひがあるといへるのである。僕一己として何か麻生氏のフアツシズムを感じたことも僕の獨り相撲で

あつたわけである。最大なもの、完全なものへの吾々の杞憂と希望とが、とかく神經質に吾々をしたがるのである。吾々は——少くとも僕一己だけでは聊か安堵に似た感じを覺えたのも事實である。「さういふお考へなれば、まことに結構です、出来るだけの御助力は惜みません、御健闘を祈ります」と釋然として申上げられるものである。要するに神經衰弱の杞憂をもつた吾々の側の敗北である。麻生氏の童心的英雄主義といふべきもの、前に、吾吾は莞爾として手をさしのべるばかりである。そして僕は悦んで川柳人協會員となつたのである。茲でこの誌面を籍りて、關東川柳人諸賢にも欣然參加せられんことを望んで熄まない。

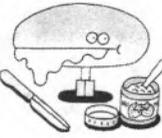
「川柳職業人宣言」を読んだ陣居は、「川柳雜誌」をより充実させ、川柳界の發展のために身を捧げようという路郎の熱情を感じ取つたのだらう。その路郎が設立した「川柳人協會」だから、それは、川柳界を支配しようとするものではなくて、川柳界を發展させたいという純粹な思いから設立されたものだとして理解した。それで、「麻生氏の童心的英雄主義」という言葉を使つたのだらう。

（次回に続く）



〔投句188名〕

《稲光りあんな処に人がゐる》これは明治時代の先人の一句ですが、稲光りを見るたびにこの句を思い出します。



この夏の暑さも凄まじく、ゲリラ豪雨に落雷と、列島は自然の猛威に晒されていて、今時は悠長なことと言ってはおれないのも確かですが、こんな時代だからこそ、先人のおおらかさに和むことも多くあると思えてなりません。では、ナビを…。

美面市 中山 春代
いかがです粗食コースのバイキング

(評) いくら飽食の時代が続いたとはいえ、このバイキングはどうでしょうか。ダイエットにはいかも知れませんが。

河内長野市 中山 一彌
暑いと口が裂けても言いません

(評) こんなにストリートに言われてし

まうとこちらの方が黙るしかなさそう。それにしても暑い、あつーい。

東京都 川本真理子
バランスを考えていては凡人

(評) 周囲をおもんばかっついてはダメです。天才は我が道を突っ走り、結構周りに迷惑を掛けたりします。

米子市 吉田 陽子
サンプルのように上手くは扱えない

(評) 日本の食品サンプルの素晴らしさは言うまでもありません。食品だけでなく、何でも自分でやればホント難しい。

西宮市 西口いわゑ
正直に今を表現してみよう

(評) 歳を重ねると様々なものに絡まれて、正直なんて言葉から遠のいてしまった感がありますが、その今を表すとはステキ。

吹田市 山本希久子
平和っていいな八月ティタイム

(評) ゆったりとお茶が飲めるのも平和であつてこそ。八月という鎮魂の中にあるれば一層その有り難みが身に沁みます。

堺市 澤井 敏治
妻の留守きようはサバ缶独り占め

(評) いつもは二人で分け合つて食べておられるのですね。それにしてもサバ缶の人気すごいです。

和歌山市 武本 碧
婉然と笑い外堀埋めている

(評) コワイけど、女の見事な囲い込み

作戦かな。この余裕なら失敗無さそうだが、埋められる方はご用心。

大阪府 小野 雅美
黙認の私も君と同じ罪

(評) 反論せず黙っているのは同意したということ。後になって泣き言を並べても通用いたしませんぞ。

和歌山市 土屋起世子
あまい甘い話の側にあるナイフ

(評) おっと、危ないですねえ。自分だけは大丈夫なんて過信していると、側のナイフに気付かないなんてことも。

河内長野市 山岡富美子
外観にこだわる父の力瘤

鳥取県 斉尾くにこ
手づくりの一点ものの私です

高槻市 片山かずお
まず食べて夏の暑さに立ち向かう

熊本市 杉野 羅天
青春はまず何事もたっぷりと

大阪府 米澤 椒子
器より大きいものを入れたがる

沖繩県 宮 すみれ
こう見えてフットワークは忍者並み

豊中市 水野 黒兎
太つてもいいやフレンチフルコース

大阪市 磯島福貴子
九回裏サヨナラ負けはいただけぬ

松山市 柳田かおる
若者よもつと緑を食べなさい

三原市 鴨田 昭紀
昭和つ子賞味期限は気にしない

池田市 太田 省三
手を抜いたオープンサンドよくこぼれ

大阪府 藤田 武人
人間がにんげんになり泥を吐く

松山市 宮尾みのり
イライラの原因野菜不足だナ

尼崎市 清水久美子
お取り寄せにも当て嵌まるマルとパツ

米子市 八木 千代
やがて秋ママは巨漢になりました

大阪市 平賀 国和
米文化麦の文化に押され気味

八王子市 川名 洋子
絵に描いた餅にしちゃった二十万

三田市 福田 好文
お茶冷めてまだ本題が言い出せぬ

大阪市 田中ゆみ子
蜂蜜は優しいナイフ知っている

千葉県 海老池 洋
野鳩らに餌を与えて叱られる

神戸市 上田 和宏
暑いのがアンパンマンもサブリ取る

奈良市 山本 昌代
イチゴジャム出番ですよと声かかる

佐賀県 真島久美子
本当は肉食系の女なの

大阪市 高杉 力

三田市 北野 哲男
宇宙船飛行士だつて夢を見る

大阪市 石橋 直子
暑いので食欲ないのアイスなら

河内長野市 木見谷孝代
絵筆とる朝は毎日新しい

大阪市 柴本ばつは
お行儀よく食べなきゃ嫁にいけないよ

西宮市 高橋千賀子
夕焼けに明日に弾ける音がする

大阪市 寺井 弘子
終活に捨てるに惜しい物ばかり

箕面市 広島 巴子
皆笑顔子供食堂増やしたい

神戸市 山崎 武彦
コッペパンひとつを分けた焼け跡派

門真市 坂本 星雨
貧困を知らずに欲が加速する

樺原市 居谷真理子
ちっけな誇りもジャムにされちゃう

松江市 石橋 芳山
ハニートラップなんじゃもんじゃが咲いている

朝霞市 前田 洋子
ありがたく期限切れ食む非常食

大阪市 平井美智子
密封の瓶で発酵する残暑

五所川原市 むらのひとり
望みがね落ちていくのよ秋の道

松山市 栗田 忠士
はみ出して天下御免の舵を切る

大阪市 宇都満知子
シェーピングクリーム垂れておとつと

高槻市 初代 正彦
てんこ盛り私まだまだまだ食べ盛り

黒石市 北山まみどり
好き嫌いでないので迷う選択肢

四條畷市 吉岡 修
もつと生きて食べたことないもの食べる

鳥取市 永原 昌鼓
一キロの体重落とすこの苦労

生駒市 飛永ふりこ
癖になる恋のピークのこの甘さ

笠岡市 藤井 智史
生き方は自由だ好きな物挟む

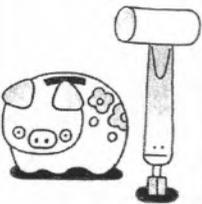
鳥取市 夏目 一粋
この欲は手強い欲だあきらめぬ

三田市 堀 正和
朝ドラが終るとパンが焼き上がる

豊中市 藤井 則彦
食べる話しているうちはまだ呆けぬ

鳥取市 田中 天翔
一度だけごはん出来たと呼ばれた

12月号発表
(10月15日締切)



(平本 霧石人 画)
柳箆に2句

本社 九月句会

◇九月六日(金)午後一時
アウイーナ大 阪

真夏のような残暑の六日、九月句会は百一十七名(内投句者七名)の参加で開催された。句会に先立ち、過日亡くなられた同人、古田太虚さん(竹原市)、中原みさ子さん(鳥取市)のお二人に黙祷を捧げた。

今月のお話は宇賀史郎さん。題は「大嘗祭と新嘗」。新天皇が即位され、元号も令和となつた今年、十月に「即位の礼」、十一月には、稲の実りを神に感謝し、喜びを共有する「新嘗祭」が、神器の継承と共に即位の儀式として「大嘗祭」の名で斎行される。さてそれは、どこでどのようにして行われるのか。肅々と準備されているに違いないが、実の所私達は何も知らない。その歴史を辿り、秘儀である「大嘗祭祭儀」を、見てきたように話したい。ただ、改めて興味をかきたてられた貴重な時間であった。(眞澄)

月間賞は木本朱夏さん(和歌山市)
(司会)眞理子・志津子 (協取)智史・勝弘
(受付)美智代・恵 (懸垂幕墨書)耕治
(清記)憲彦・勝弘

席題「問う」

松岡 篤選

問われる前に美味いと妻へおべんちゃら
大地震まず問う妻と子の安否
妻の問う昔の罪に苦笑い
カミさんに職務尋問朝帰り
問いかけてきのうのおかず出てこない
二千万どうするつもり妻が問う
参加するしない問うてる御葬式
再生紙の過去を問わない無垢な白
問われても難しい事知らん振り
拷問のような暑さに耐えている
今もまだ私の席はありますか
しつかりと生きているかと問う遺影
芋づるを炊いて平和を自問する
食べてすぐメシはまだかとおじさん
問いかけて笑顔忘れず逝きました
生き字引何尋ねてもすぐ返事
問われたらボケる力がついてきた
シャツの紅妻は夫を問いたです
問いかけても馬耳東風の反抗期
検査日の前に飲むかと問われても
秋に問うどないなるんよタイガース
愚問だがとグサリ核心突いてくる
台風に備えいいかとまた問われ
あの人に歳聞いたのが失敗に

村上 直樹
中堀 優
丹後屋 肇
内藤 憲彦
飛水ふりこ
藤井 宏造
榎本 舞夢
水野 黒兎
楠井 輝子
田中ゆみ子
平井美智子
小野 雅美
緒方美津子
大久保眞澄
能勢 良子
柴本ばっは
加川 靖鬼
阿部 俊八
米澤 俣子
村田 博
緒方美津子
安福 和夫
初代 正彦
坂 裕之

何取りに来たんですかと問う二階
暑中見舞い離れた友へ安否問う
志どこにありますが議員さん
児相って一体何をやる所
問答無用どうも近頃流行か
習慣病のチェック山程問診票
孫に問われ答えられないカタカナ語
あんただれと問う母とまたわらべ歌
問わんといて喜寿になつても知らんこと
歳問えば「オホホ」「オホホ」と卒寿です
オスプレイよく落ちるのに何故買うか
マダムにはサイズ体重問うなかれ
金のこと問えば全く惚けてない

上山 堅坊
藤原 大子
奥澤洋次郎
磯島福貴子
福田 正彦
坂上 淳司
宮崎シマ子
柿花 和夫
米田利恵子
北野 哲男
川端 一步
内田志津子
前 たもつ

住

妻に問うやっぱり返り討ちにあう
心体に問いかけ決める今日の家事
質問に核心外す長い舌
孫娘の腹に耳当て聴く鼓動
肝臓は元気ですかと問うお酒
人
こう問うぞこう答えると茶番劇

小島 蘭幸
矢倉 五月
北野 哲男
坂上 淳司
村田 博
萩原 狸月

地
まつすくな目がぐんぐん問うて来る
天
遭難の一番に問う人の無事

上田ひとみ
石田ひろ子

軸

問われたら良い句抜いたと胸を張る

兼題「野菜」 上田 和宏 選

スパーでこに澄ましける京野菜 清水 英旺
 地場野菜にこにこ並ぶ道の駅 米田 恭昌
 スイカ割り酷暑の夏を真つ二つ 内藤 憲彦
 キヤベツザクザクついでに愚痴も切り刻む 今井万紗子
 ほうれん草ポパイを真似た昭和の子 中川ひろ介
 私の美白支えてくれるへちま水 きとこうこみつ
 キヤベツでも二度漬け禁止串カツ屋 藤井 宏造
 野菜食べ子に肉回す亡母でした 松岡 篤
 スーパーで虫も食わない野菜買う 木嶋 盛隆
 一年中旬だトマトも私も 柿花 和夫
 ブロッコリーとこが旨いか分らない 新家 完司
 花作り野菜にしると言われても 山田 葉子
 猪との戦に暮れる野菜畑 奥澤洋次郎
 消費税アップへ胸を張るモヤシ 木本 朱夏
 青汁で野菜たっぷりこくこくと 飛永ふりこ
 ゴーヤには日除けスタミナ二刀流 大浦 初音
 長生きをしてねと野菜盛り上げる 山田 耕治
 酷暑にも耐えたゴーヤの面構え 初代 正彦
 ポツコリを野菜サラダですつきりに 坂 裕之
 直先野菜性善説を信じてる 西出 楓葉
 ゴーヤの苦味かみしめて来た沖繩忌 荒川 鈍甲
 太い大根なぜか安心してしまふ 大久保眞澄
 サラダ山盛りなんてさ一粒で足りる 小島 蘭幸
 菜食で癌細胞が消えている 清水久美子
 ほうれん草食べてポパイの力瘤 中島 一彌

買う方が安い自家菜園の野菜
 キッチンでカイワレダイコンを作る
 芋蔓を食べて玉音聞きました
 ピーマンが嫌いなままで古希になる
 脳が空っぽピーマンになった
 野菜から見れば人間みな盗人
 八一五芋蔓思ひ出す酷暑
 人参が嫌いでも有る協調性
 貝割れよ君は大根めざすべき
 朝掘りと言わんばかりに土を付け
 菌はないが大きなトマトかぶりつく
 挽きたての命頂く茄子胡瓜

宮崎シマ子
 片山かずお
 和氣 慶一
 平井美智子
 米澤 俣子
 村田 博
 宇賀 史郎
 穂口 正子
 穂口 正子
 中岡千代美
 今井万紗子
 山野 寿之
 木本 朱夏
 安土 理恵
 伊達 郁夫
 新家 完司
 宇都満知子
 山岡富美子
 渡辺 富子
 福田 正彦

兼題「祭り」 今井万紗子 選

千年の都祭りが天こ盛り
 祭太鼓消えて久しい過疎の村
 故郷捨て二人で踊る風の盆
 豊作をありがとさんと秋まつり
 秋祭り笛吹く君の焼けた顔
 だんじりの出番無くなる里の秋
 酒のアテ提げて目当ての祭り酒
 帰らんね祭りの帰省促され
 一枚の葉書が連れてくる祭り
 だんじりの迫力に酔う街の辻
 鈴虫の音色鮮やか秋祭り
 笛太鼓が先ず騒ぎ出す泉州路
 盆掃省家族まとめる祭り寿司
 優しくなれたその日の僕を祭りたい
 祭り太鼓いざ打ち込まん男意気
 毎日がお祭り三世帯の夕餉
 じいちゃんも宿題係夏祭り
 僕の葬儀祭り気分ですつてくれ
 売り言葉買つて祭りが始まった
 ひとときはタイムマシンの風の盆
 祭りの夜やつと見つけた赤い糸
 火の息を吐いて男の祭りずき
 祝い事妻の得意な祭り寿司
 ご機嫌な神に火祭り水祭り
 能登まつり町の数だけ立つキリコ

清水 英旺
 米田 恭昌
 和氣 慶一
 片山かずお
 山下 純子
 能勢 利子
 加川 靖鬼
 古今堂蕉子
 平井美智子
 丹後屋 肇
 飛永ふりこ
 坂上 淳司
 松尾美智代
 藤村 亜成
 中島 一彌
 石田ひろ子
 澤井 敏治
 川端 一步
 米田利恵子
 酒井 紀華
 上出 修
 米澤 俣子
 長谷川崇明
 古今堂蕉子
 中島 一彌

住き人との祭りは遠き風の盆

また来ると息子が発った祭りの夜

孫達の浴衣縫い上げ明日祭り

悪友が来ると祭りになる夕餉

童心にかえる夜のリンゴ館

お祭りが消えて淋しい町に居る

祭りのあといつもの暮し待っている

だんじり祭りに三日を駆けぬける

威勢よい血気盛んなみこしギヤル

びーひやららテープを回す里祭り

風に乗る河内音頭のなびく宵

祭り好き一年をかけ準備する

住

火祭りに男の野性突き抜ける

引く子なく鎮座だんじり蔵の中

少子化に地藏まつりの灯が消えて

大往生派手に花火を打ち上げる

帰ろかな祭りばやしが耳底に

人

縁日に昭和の空気吸いに行く

突き抜けて女神輿は宙を飛ぶ

地

天

笛太鼓案山子も踊る村祭り

軸

浴衣着てちよっとおすまし夏祭り

荒川 鈍甲

山田 耕治

矢倉 五月

新家 完司

大内 朝子

指宿千枝子

山田 葉子

中川ひろ介

楠井 輝子

江島谷勝弘

山根 妙子

大浦 初音

山田 葉子

横山 里子

内田志津子

前 たもつ

齋藤さくら

吉村久仁雄

森田 旅人

山崎 武彦

山崎 武彦

山崎 武彦

兼題「ぼとん」

藤井 則彦 選

藪椿ぼとんと散つて季を知らず

古井戸に投げ入れた石の深い音

雨漏の音が奏でる相聞歌

白みどり黄あるらし目葉をポトン

とつくりの底をたたいて受ける猪口

待ちわびた返事ポトンと来るポスト

まっ白いドレスにミートソースぼとん

自販機の下に逃げ込むワンコイン

改憲へぼとんと疑問符が落ちる

点滴の一滴ずつにあるエール

雨だれにシヨパンのピアノ曲想う

センターへぼとんと落ちてお立ち台

安産型ですの赤ちゃんがぼとん

蠟燭の最後の足掻き炎落つ

黄昏れた蛇口ポトンと清い音

ばあちゃんぼとんぼとんのお手洗い

線香花火ぼとんと落ちて風は秋

ぼとんぼとん証人台に新証拠

プライドがぼとんと落ちた紙おむつ

精いつぱい咲いてぼとんと夏椿

ミサイルのぼとんに狂喜キタのドン

追伸にぼとんと本音書き込まれ

助言ぼとん腑に落ちて再起動

耳傾ける水琴窟のぼとん

大杉 敏夫

清水 英旺

福田 好文

荻野 浩子

大久保真澄

大内 朝子

木本 朱夏

中島 一彌

出口セツ子

渡辺 富子

村上 玄也

山田 耕治

上野多恵子

油谷 克己

初代 正彦

きとつこみつ

山野 寿之

前 たもつ

齋藤さくら

山野 寿之

清水久美子

鴨谷瑠美子

富永 恭子

木嶋 盛隆

箸ぼとんそろそろやって来た認知

木漏れ日にぼとんと落ちた柿一つ

核廃絶出来ぬ日本国ポトン

居酒屋でポトンと落す今日の鬱

鍾乳洞ぼとんぼとんと時刻む

たなごころにぼとんと落ちてきたチャンス

涙飲み込んで水琴窟にきたる

故郷のトイレぼとんという音色

ぼとんから始まり岩を砕く水

年金をぼとんぼとんと給わつた

真夜中にぼとんとどんぐり落ちて秋

二千万貯めても利息ポトンのポ

八日目の蟬はぼとんと地にかえる

住

古井戸に投げた小石のひとりごと

ガン告知に涙の跡がある日記

おばあちゃんの匙一滴でいい味に

愚痴ぼとん叱りもせず聞く大地

金盞雨漏りの音響かせる

ポトンと落ちた久方振りの子の便り

雨粒がぼとん私の罪を責め

点滴のぼとんはいのち繋ぐ音

貴婦人もぼとんと落す角砂糖

川端 一步

黒岩 靖博

古今堂蕉子

上山 盛坊

木嶋 盛隆

山本希久子

居谷真理子

坂上 淳司

大浦 初音

中村 恵

田中ゆみ子

初代 正彦

大内 朝子

中島 一彌

能勢 利子

川端 一步

小野 雅美

福田 正彦

今井万紗子

小野 雅美

鈴木いさお

兼題「残る」

石田 隆彦 選

日照の中余命を思う蟬しぐれ
 秋日傘残暑きびしくまだ主役
 爪痕を受け継ぎ令和原爆忘
 卒業後誰も残らぬ過疎の村
 足跡は修正液でごまかせぬ
 結局は食わずに捨てる残りのも
 残り物だけで済ました母の膳
 初恋の残り香抱いていた昭和
 残り火を燃えたぎらせたのは彼女
 居残って一円探す会計課
 残すものないのに書いた遺言書
 どうせなら余生笑顔で過ごそうよ
 精一杯生きた足跡子に残す
 あなたの愛の残りで生きるキリギリス
 フードロス命が捨ててあるのです
 少子化で侘しく残る無縁墓
 残高と寿命誰にも解けないわ
 先生の記憶に残るのはやんちゃ
 残業組みが会社の底を支えてる
 ご先祖の温みが残る千枚田
 バッテリー残量0の恋でした
 愛だけが最後に残る宝物
 またあした余韻が残るいい言葉
 残すのは笑顔の写真葬儀代

山本希久子
 山根 妙子
 中島 一彌
 阿部 俊八
 山岡富美子
 横山 里子
 伊達 郁夫
 佐々木満作
 黒岩 靖博
 水野 黒鬼
 長谷川崇明
 安福 和夫
 藤原 大子
 荒川 鈍甲
 栃尾 奏子
 坂上 淳司
 山根 妙子
 松岡 篤
 加川 靖鬼
 前 たもつ
 藤井 智史
 木嶋 盛隆
 川端 一步
 穂口 正子

石鹸の残り香すれ違ふ少女
 闘争心いまだに残る隅の底
 欲がまだ残ってるからボケられぬ
 残業で増税分を稼ぎます
 悔い一つ残らぬなんて嘘つばち
 冷蔵庫いつの残りか忘れてる
 妻の土産に宴会の残り物
 よう笑うたこの世に残す物はなし
 まだ少し口惜しき残る多数決
 君の心に僕が残ればそれでいい
 幸せの数だけ残る笑い皺
 まだ残る未来はときめきのサプリー
 今もなお小指に残る悔い数多

住

萩野 浩子
 村田 博
 内藤 憲彦
 清水久美子
 飛水ふりこ
 齋藤さくら
 清水久美子
 今井万紗子
 能勢 良子
 吉村久仁雄
 中村 恵
 大内 朝子
 小野 雅美
 柴本ばつは
 石田ひろ子
 三宅 保州
 森田 旅人
 中村 恵
 福田 正彦
 渡辺 富子
 木嶋 盛隆

兼題「手段」

小島 蘭幸 選

てっぺんを狙う手段は選ばない
 百までは生きてやるぞとロン組む
 間違いが教えてくれた別の道
 最後には美女に涙と言うてだて
 次の花咲かす手段として散ろう
 雑学で会話を盛り上げています
 豊作にたまたまはない彼岸花
 老いてなお手放しがたい免許証
 増税を睨み2食主義にする
 取りあえずお断りするレジ袋
 整形をしても心は変わらない
 その昔ハンカチ落とす手もあった
 スーパー白兎でひらめいた手段
 非正規に未来を語る術が無い
 婚活のパワーツールとなる句集
 手段は任せます欲しいのは結果
 ケ・セラ・セラこれも立派な手段です
 雷鳴に便乗をしてプロポーズ
 親四人まず介護士の資格取る
 生きる手段すずらんの毒バラの棘
 何かいい手段はないか檻の中
 シナリオはいくつも書いてあるのです
 おまじないアスピリンよりよく効いた
 腹割っていくしか手段ないのです

清水 英旺
 山崎 武彦
 山岡富美子
 和気 慶一
 矢倉 五月
 立藏 信子
 中川ひろ介
 平賀 国和
 清水久美子
 奥澤洋次郎
 松岡 篤
 片山かずお
 太田扶美代
 阿部 俊八
 藤井 智史
 中島 一彌
 西出 楓楽
 澤井 敏治
 石田ひろ子
 田中ゆみ子
 鈴木いさお
 上田ひとみ
 森田 旅人
 山田 耕治

ジャンケンで會長決めるとは無体甘えてみるか生きる手段と割り切つて無欲という相手に為す術もなく医者も薬も止めて治つた気の病いまとまらぬ意見はホツチキスで止めるだんまりを決めこむ妻に歯が立たぬ喜こばす手段は百般に渡る

道はみな違えどたどり着く花野前髪を切つてあなたと向き合おう呆けず百寿生きる手だての趣味を持つ奥の手が昼寝をしているようだはした金捨てにとき時ラスベガス入れ歯杖補聴器なんとでもなるさ

知恵が出ぬときは海辺をウォーキング静かに逝くための手段はあるのかな四面楚歌万策つきてまず昼寝ローカル線で秋を迎えに行くところ亡き母へ手紙を届けたいのです

手段えらばぬ男は少し魅力的

納豆と豆腐で白寿まで粘る

折るしか手だてがないのです

猪突猛進とつくに古希は過ぎました

村田 博
今井万紗子
楠井 輝子
藤井 則彦
藤村 亜成
西出 楓楽
中村 恵
松尾美智代
小野 雅美
山本希久子
古今堂蕉子
山崎 武彦
居谷真理子

新家 完司
榎本 舞夢
北野 哲男
木本 朱夏
平井美智子

大浦 初音
新家 完司
木本 朱夏

天
地
人
軸

燦 燦 会 句

志 孝 垣 板 読む句会を八月

早い者勝ちだとネコが動かない 島田 握夢

その家の中で一番暖かい場所と涼しい場所を知っている

あの時にもっと事情を聞いてたら 米澤 椒子

深刻な状況ほど笑顔で話したがるもの、見逃した事を悔いる

怪我よりも皿の心配してる妻 齋藤さくら

指なんぞ縫うたら治る。伊万里は縫えんのだ!

待つ人に表情がある雨の駅 森口 美羽

二本の傘を持って得意そうな子供、途方に暮れる独身者

Uターン知らない街になつている 田中ゆみ子

懐かしい故郷なのだが訛を忘れた人達は所詮異邦人なのだ

再検査しますと医者 of 無表情 森松まつお

医療器械の空き時間を埋めただけが患者側は不安が募る

君が代を歌う束の間の愛国者 木本 朱夏

日本語を話せないチャンピオンというのもどうしたものか

胸に住む鬼も気弱になりました 川端 六点

口より先に手が出た時代も・・・今は昔となりました

立ち位置が変わると新しい視界 荻野 浩子

竹馬の少年が見付けた鳥の巣。緑の下には蟻地獄もあった

眉間には春をとまらせないものだ 居谷真理子

観世音菩薩の額には不変のやさしさと春の温かさが漂う

にんげんはもつと賢い筈なのに 新家 完司

動物たちは同じ種は殺さないのに、人間は人間を殺す

優勝の国旗国歌が押し上げる 萩原 狸月

この国にこの歌が有りこの旗がある。感動のひとつ

おとせのついで

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。
編集部

南大阪川柳会

松岡

篤報

終活でやつと悟った欲の数
梅雨が来て無理やと悟る傘と杖
しやあないな免許返納しようかな
悟られぬよう振舞い狙う親の金
父の機嫌悟れと母のテレバシー
人の振り見つめて悟ることばかり
悟らずに生きてるうちが花だった
悟らずに迷い迷って逝きそうだ
百歳になると悟れるのでしょうか
自分は自分この世のことはケセラセラ
屋根瓦落ちて追い討ち俄か雨
トランプの厳しさいずれ日本にも
厳しい顔やつとゆるんだデスマスク
荒れる子の心見えずに持て余す
子が荒れる思いあまって悲劇起き
荒れる日も四季に恵まれ誇る明日

郁夫 和雄 勝弘 弘子 志華子 柳伸 実 峰子 東風 国和 柳右子 博 昌紀 ひさ乃 ルイ子 弘委智

恋しいなあ我家の僕の指定席
癌手術まるで刑場行く気持
点滴のしずく命の重さ知る
金欠病面会謝絶入院中
入院の妻から家事の指示が来る
たんぼの綿毛のような旅したし
二千万ふわりふわりと飛んで来ぬ
ここからはふわりと生きてゆく余生
宇宙遊泳を楽しむたんぼの綿毛
居眠り上手ふわりふわりと老いていく

川柳塔みちのく(青森) 稲見

則彦

小石だと侮らないでつまずくよ
アジサイが平成の雨懐かしむ
強気だがたまには引いて様子みる
とびきりの寅さん笑顔石アート
魂が見えてくるまで石磨く
雨上がりコロンクの香る乙女達
庭の隅漬物石が拗ねている
個人差があつて約束できぬサブリ
雨音が音符に変わる子守唄
来年も又と約束同期会
じゃんけんほんジイジはいつもグウを出す
公約の小指の傷が化膿する
二枚舌空約束の選挙戦
弱い人我慢強いとおだてられ
踏み越えてみれば小さな石だった

久美子 ひとし 冬道 風来坊 友二 則彦 美鈴 慕情 初枝 黙人 隆樹 一呑 孝子 柳子

見掛けの強さ心の弱さなら男
強面のおつさんと行くあんみつ屋
指切りの父の小指は太かった
出稼ぎの父待つている子のみやげ
定石もいいがたまには破天荒
語りましよう草に木に空今の時
春の雪もつと降れ桜よ遅く咲け
和解する握手読めない腹の内
病院のはしごで暮れる冬ひと日
毎日を笑って過ごすバラの顔
春らんまん濛に落ちそな酔っぱらい
五・七・五上手にひねるのも匠
水掛け論とどの詰まりは紙一重
セラチンの少年溶かす妖怪バアバ
転ばずに帰る師走にまず感謝

川柳塔打吹(鳥取) 斉尾くにこ

斉尾くにこ

糖尿病が災いだった妻失明
災害は約束のない出きごとで
体内のどこかに非常ベルがある
隣国が鋭利な刃物で切つて来る
災いをスルーしている呑気者
きつちりと過ぎりゃ何か生きづらい
終活はきつちり出来て迎えまつ
餌を貰うきつちりと燕の子
全商品きつちり百円うれしいな
きつちりとしたかった母の躰糸

重忠 重恵 重利 節人 義人 美清 玲坊 悦子 美知江

きつちりと老後の貯金二十万

人相を見てきつちりと吠える犬

ラッピングした心など欲しくない

タワールから見るマツチ箱蟻の列

タワールから民の暮らしを見て欲しい

何時かきつとタワールマンション最上階

無給医が白い巨塔でもがいてる

鳥の目で東京見下ろすスカイツリー

欲望が積み上げていくタワールビル

あなどるなアルパカ唾の武器がある

吐いた唾そのまま自己に跳ね返る

はやぶさの快拳固唾を飲んで見る

生唾をゴクリと飲んで袋トジ

管理職社員いじめは天に唾

アメリカと中国ツバの飛ばし合い

たつぷりの唾で毒舌はいておる

京都タワールをバンジージャンプして琵琶湖

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

久々に娘とランチ胸躍る

紫陽花の額に彩り真の花

添い寝の子はとくに起きている昼寝

あほかいなまだ昼でっせお父ちゃん

見る方もこのんびり見てる昼の月

昼行灯忠臣蔵を思い出す

夜勤明け夫静かに眠らせる

東京五輪昼の競技は要注意

滋

石花菜

美ツ千

久芽代

たけ代

三津子

泰山

龍枝

芳光

宣子

富隆

公恵

紀の治

照彦

完司

紀美恵

くにこ

鎮魂を込めて千羽の鶴を折る

小指立て話す大人に怪訝な子

産声に指十本揃う幸せ

指切りの指はすっかり認知症

薬指リングが語る幾星霜

マスターが指の無い手で請求書

親友の指は威厳に満ちている

審判の指は威厳に満ちている

戦中戦後支えた父のごつい指

5カラット自信に満ちた薬指

指先の恋のほとり眠らせぬ

観覧車一番上でびびってる

検診結果医師が微妙に口ごもる

ガンコです利かん坊ですビビリです

無差別に放火殺人びびってる

ゴキブリ一匹家族みんなびびる

釣果ゼロのビクにヒアリが入ってた

同じ嘘でも美人だったら許される

阪神が負けると血圧が上がる

門前にダックスフンドの置き土産

商店街ベルを鳴らして自転車で

席とってふんぞり返るサングラス

この頃はアゴで私を使いよる

川柳塔唐津(佐賀)

仁部

四郎報

満作

郁子

たかこ

蕉子

大輔

行兵衛

久仁雄

隆昭

いさお

志津子

ふりこ

芳香

五月

勝弘

舞夢

里子

久美子

雅美

克己

ゆみ子

満知子

重信

まつお

蜂實

朗

辻内次根選

呼吸するようにあなたと生きてる

旅人の顔で岬に立ち尽くす

拜啓で始まる父の長い文

きゅつりをたべますかっぱになつたらね

白紙から作品になる一画目

これからを洗めのお茶で思案中

リハビリへ一歩一歩の杖の音

どの毒にしようか今日の隠し味

凪いでいる心に遠い波の音

夏の日ブランコ風が乗っている

佳句地十選

(9月号から)

米澤 倅子選

打ち返す波に情性を叩かれる

ぎくしゃくの端をシヨークで裏返す

愛だけはレンタルでない披露宴

言い勝つて長い沈黙には負ける

はて何に効くのだったかこの薬

おもちゃ箱夢を育む小宇宙

行き場のないごだわりをまた飼っている

煌いていよう小さな花でよい

手の平を返され薄いてくる不信

かこ

当代

万紗子

武人

敦子

重忠

彰

恵子

あかり

幹子

ふりこ

北哲

黒兎

正和

寿之

あきこ

優子

まつお

潔癖も過ぎると皆が煩がり
激励のつもりと聞いた母の愚痴
高明 四郎

和歌山三幸川柳会 西川 千鶴報

もしそれが真実ならば許せない
木造の校舎に残る傘の跡
雨の日は雨の絵ばかりみて独り
念入りにもしかをチェックする鏡
横文字のカルテへもしがつき纏う
本当は雨に怒っている蛙
異次元へ吸い込んでゆく大落暉
絶対に開いてならぬ核の傘
立ち読みを覗む本屋で雨宿り
梅仕事終えて一雨骨休み
忘れぬよう一寸高価な傘を買う
失敗を通り雨だと切り替える
被災地へもしあの日が消せるなら
マリンバが奏でるような里の雨
付けっ放し大きく見ると国の損
大きな樹大きな山を見て育つ
もし妻が夜逃げをしたらどうしよう
コンビニの無駄を買ってる俄雨
笑ったら鏡に笑い返された
富士山に座り太平洋を釣る
豊めない傘に未練が糸を引く
まんじゅうもダイヤもでかい方が好き
もしをつけ人生ゲームはまりこむ
准一 一雄 昭枝 八重子 美枝子 かず子 純子 保州 起世子 当代 まき 敏照 幹子 俣子 宏枝 菜摘 義雄 ひろ子 智三 日出男 富香 和子 康則

夢一杯はみ出た花は風化する
空海の大ききと思う高野山
抜かりなく晴雨兼用です私
大きいなあ空に時どき叱られる
気の小さい男大きな靴を履く
ワイパー全開免許返納考える
遮断機が上がったような雨上がり
もし翼あれば行きたい場所がある
雨の日は妻に寄り添い愚痴を聞く
大声で叱るかわりに抱きしめる
降り急ぐ雨にノルマを急かされる
口下手を九官鳥に擲擻される
弘子 彦弘 知香 ダン吉 みつ江 明子 あき子 珠子 明宏 よしこ 悦男 千鶴
はびきの市民川柳会(大阪)中川ひろ介報

風鈴を少し揺るがせ風が笑む
善行照らす太陽の道しるべ
照る日きた世界に誇る古墳群
風鈴の音に微睡む昼下がり
村は過疎風鈴の音母ひとり
風鈴の駅涼風のおもてなし
増税へじわじわ怒り込み上げる
風鈴へ風はやさしい顔になる
子を怒り一緒に涙若いママ
風鈴も鳴り続けるとやかましい
一隅を照らす男になれと父
あの人を想って今宵火照る指
京アニメ怒り心頭悲し
みつこ かこ 洋一 壽峰 ダン吉 欣之 いさお 久仁雄 大子 フジ 清 高鷲 かつ美
純朴な風鈴ころろ引かれます
風鈴に戦争時代思い出す
参道に願いを吊るす風鈴寺
エアコンはいらぬささやく風がある
風鈴が何時か何時かと梅雨明けを
反論が出来ぬ自分に腹が立つ
風鈴も軍靴の音に気付いたか
母親は逃げ道あけて怒ってる
梅雨寒がいきなり猛暑やりきれぬ
古代史が世界に照らす古墳群
アルバムの火照りは恋の回顧録
風鈴に癒され赤子よく眠る
一割になるのを待つて歯科治療
だれでも良かったとぬかす殺人鬼
ちづる ひろ介
竹原川柳会(広島) 古田 太虚報
スタートライン皆ライバルという景色
いつまでもライバルのいる人生を
褒められてライバルとなる口車
ライバルの答えに負けた日の孤独
ライバルは私弱音をおさえこむ
切磋琢磨ライバルという味方
母だけはわかる娘の空元氣
豪快に笑うはあちゃんまだ元氣
百歳の元氣を的に万歩計
小鯛をバリバリ噛んでいる米寿
レジ袋いつもバッグに二三枚
蘭 幸 宣 節 鬼 焼 淑子 比呂子 千代美 栄香 幸子 敬子 夢香

総理へほしい御意見番の知恵袋

また増えた葉袋の重いこと

お袋の笑顔もらいに寄る施設

十八才笑い袋はよく裂ける

堪忍袋閉じおふくろの褒め袋

胃袋がいつも萎んでいた戦後

足袋洗う大工の夫の指の跡

ダメということをするのが子どもかな

タコを釣ったと亡夫そっくりの義弟来る

夾竹桃折りは続く原爆忌

カレンダーに花まる娘の里帰り

ウチの子と蟬が元氣だ夏休み

おそらかなみだがざーっとふつてくる

四歳 ちか

川柳同友会みらい(鳥取)吉田 陽子報

行楽をテレビで済ます骨休め

夕焼けの明日を追う雲ミルク色

浮雲へ託し漂う物思い

AIにこころの叫び詠えまい

娘と住んで自由の中にある孤独

ストレスの叫びヘルベス現れる

健康な手足バランスよく動き

少子高齢死まで働く蟻になれ

あと少し経ったら慣れるかな令和

ゆつたりと眺めていたい反抗期

鬼でさえ我が子が可愛いものなのに

一 眸 しみどり れい子 和代 菜美 章子 千恵子 葵 健二郎 紫音 安子 初音 史子

身の程を知ったからには背伸びせぬ

補欠だが準備はいつも欠かさない

満月が誘い出すから酒が要る

母の日に母恋しくて手を合わす

さらさらと記憶こぼれる日が怖い

ふるさとをきっぱり捨てた妹よ

拷問のごとく目が覚め顔洗う

壊れぬようゆつくり母の肩たく

失言にコップの水が揺れている

アスファルト割つても雑草と言うか

岩美川柳会(鳥取) 山下 節子報

東照宮エースが競う日本の美

妻が買う私のみやげ宝くじ

エースだと言われ仮面が外せない

おみやげはどうふちくわと決めている

鈍感で風も空気も読めません

一万歩風もふんわりついて来る

少子化で縮んだ村の食い祭り

観客もエースも泣いた大船渡

風にさからい人になびて生きている

エースだから涙は勝った時流す

オリンピック記録縮めるアスリート

日韓の距離を縮める知恵を出せ

剣幕に縮みあがっておたおたし

エッチンのエースと一度呼ばれた

我が家のエース肥やしとなって花咲かせ

千代 天翔 凱柳 彰夫 振作 眞理子 雅女 敏子 幸安 菖子 美恵子 一瑤 弘六 重忠

国々のエース同志が化かし合い

みやげの老荷刺身のつまにありがたい

昼寝するこは我が家の風の道

京都塔の会

山田 葉子報

温かい心のタツチからやる気

今生きる恵みへ若い日の苦勞

ともだちに恵まれ豊かしい余生

よい知恵が浮かばぬ髪を切つてみる

今宵飲み会明日は胃カメラふとよぎる

小児病棟飛ばずに消えたいしゃぼん玉

年老いた母を見るたび痛む胸

紙おむつとてもせつない残り道

これからの花月は裏を読むだろう

京アニの無念が支援輪をひろげ

採めそうな事にはいつもノータツチ

嫁タツチ息子のことはあとたのむ

琴線に触れれば恋の灯がともる

熟れてます貴女のタツチしたところ

お元気で後ろを向いて杖の音

ホスピスの悪友笑顔涼しい目

銘板の文字追加して原爆忌

せつない歌歌うと元氣出る不思議

本当の言いたい事は言わぬ知恵

古都京都恵み施す仏達

無駄話できる夫婦の半世紀

好き過ぎて好きと言えない日を送る

かずお 美津子 元一 宏子 牛延 北舟 弘之 正彦 英旺 弘子 則彦 弘委智 多津子 保子 光久 公子 文代 福子 朝子 哲子 ふりこ

一平

蟹郎

節子

いさかきも水に流せる酒の妙 正

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

丑の日のウナギ買う列また伸びる まみ子
単身の腕を自慢の玉子焼き 三樹夫
よくもまあ続いた趣味にとりつかれ 美千代
病院も混み霊園も混んでいる 雅美
ひと回りしているうちに買いそびれ 廻行
日本を励ます洪野プロの笑み かつ子

富柳会(大阪) 関 よしみ報

先ず聴こう興奮冷める父の顔 きみ子
初春や先ずは御神酒で身を清め 純風
熱い暑い朝の挨拶蝉時雨 文重
熱血も猛烈も舞いバブル舞う 由夏
先ず一献差し出す泡の消えぬ間に 田鶴子
言訳を先ず考えてする浮気 壽峰
行間を伏せた本音でする勝負 高鷲
高齢者分別される二千万 一文
熱醒めた二人空気と水になる よりこ
原点の白紙に戻る笑い皺 和子
先ず一点甲子園児の汗光る 清
神様の分別待っているいのち ばかり
平熱であなたを想う夏の午後 かこ
白足袋の舞妓先ずはとチヨコを出し 晴美
響を響かす老いの無分別 恵
人の世をぶれずに生きる独楽の志 よしみ

分別がつかなくなった恋と愛 欣之
分別が同心円のまま迷路 寿之

ふうもん吟社(鳥取) 西川 無限報

仏にも鬼にもなれるコップ酒 美恵子
認知症予防のためにてごをする とも湖
スマホ見て夫が作る鯖みそ煮 紫陽
平成も令和も同じ飯の味 節子
抱き枕抱いて寝ている妻がいる 鐘馗
眼を閉じて海のお喋り聴く老後 白狐
トランプの言い値で無駄な兵器買う 毅
砲撃は訓練だけにしてほしい 宏章
見逃した穴からこぼれ出た秘密 みゆき
百までの夢を砕いてゆくカルテ 天翔
選挙後はあつという間にカメレオン 回春子
感動させたはやぶさIIの大手柄 房江
新しい私に出会う種を蒔く 幸子
極楽の蓮もギユウギユウ混んでいる 楓花
豊み方わからず噂はひろがる 善平
切り札を豊んだままで持っている 一粋
点線を豊み進めば君がいた 八千代
わたくしを豊むドラマがまだ出来ぬ 一瑤
万札を小さく豊みよろしくね 振作
あの仕草敵か味方かわからない 千代
後ろから舌をペロリと出す仕草 行男
舞う仕草変えてはならぬ麒麟獅子 義徳
三つ指の仕草すっかり令婦人 一平

平和への仕草にぎこちない握手 金祥
網を練る仕草に腰を入れさせる 蟹郎
同情をお先に通す松葉杖 孝二
同情をされても私靡かない 亨

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報

安っぽい同情なんて真つ平よ 凱柳
同情が恋に変化のリトマス紙 茶人
傷心の友と一緒に泣いてやる 早牛
同情はいらぬ本気でやって来い 昌鼓
貧乏神同情よりもあつち行け 勲章
お気の毒だけど私も金はない 眞理子
苦も楽もみな年輪として豊む 無限

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報

畑にも夏はナイターぜひ欲しい 好好
お盆にはナイター夜店ホテル狩り ゆたか
ナイターを見に来た蝶が相手する 照彦
テレビで見るナイター野次が届かない 宏章
鳥取に新幹線は夢の夢 孝子
血圧を測っているがなれあいだ 大鯰
老いこんでめつきり増えたしわ白髪 弘六
老後への扉を開ける始発駅 すみれ
人生の終着駅はもうすぐだ 重忠
日韓にめつきり疑問符が増えた 盛桜
幸福を伝え動脈脈を打つ 小鹿
汽車の窓心残りを窓に置き 草文
ナイターに慣れて昼行燈になる 茶子
利用した終着駅は屋上か 孔美子

採血にやさしい腕をさあどうぞ
くちばしを一杯あけて「金太郎」
血管も錆びたか冷えた足の先
廃車して酒量めつきり多くなり

弘子
蟹郎

夕焼けが置いて帰った片思い
のど自慢見て涙する日曜日
筋書きのないドラマ二人で演じ切る
とぐる巻き仏の前で座禅中

俊久
宏之
宣子
美穂

おだやかに母真つさらな命抱く
知事市長辞めてから云え身を切ると
少女像なげく表現の不自由
ゆっくりと御飯にお風呂ああ平和
核の傘なんぞで平和来るもんか
泥かぶる覚悟ネクタイ裏に秘め

高鷲
太郎
鮎子
直子

ナイターの時間忘れて寝てしまふ
腰まげてめつきり亡母と同じ型
おこりんぼ血管までも固くなる
血管が浮き出ています大胆に

かおる
和子
英子
京

お誘いは財布のぞいてまたこんど
面倒を棚上げ逆走高齢者
節度なく時間忘れて我忘れ
家計簿は我が家の歴史知恵袋
暑すぎて今日も夕飯冷奴

正子
しゅう
園子
清乃
和代
悦夫

八月ははだしのゲンを読みかえす
反核の火を絶やすまじこの国に
糖尿教科書通り孫の言う
日韓に未だ残っている火種
来た道の想いにつける足の裏
優勝の裏に努力の走り込み
一瞬に賭ける花火師の矜持
暑くても平和がええなかき水
缶ビール遺影と話すゆっくりと

弘子
一步
一志
紀子
信二
堅坊
善之
ひろ子

わかり合いそれでもバカね言わずもがな
被害なく令和元年梅雨終る
四季の花活けて小部屋の棚飾る
怪獣の介護明るい友に合う
年金を貯金にまわす友は喜寿
なげくより字が書けるだけありがたい
毎日の笑顔返事に励まされ

美智子
ゆたか
久直
恵子
令位子
美草
菜々
美緒
瑞枝
治代

夏の夕あぶら蝉鳴く賑やかに
N国党放送法になぐり込み
菓子折にワイン供える亡父の盆
陰口を我が胸にとめ地に落とす
匿名のネット炎上空騒ぎ
取り立てて用も無いのに胸騒ぎ
二次会は騒がしい顔ばかり来る
騒ぐなよトカゲの尻尾切っただけ

久美子
修
一彌
弘光
五月
克三

八月の空は平和を叫んでる
野党連合確かな一歩次の二歩
傲慢な人類やがて亡ぶだろう
ローンクも今年限りの暮終い
裏取らず冤罪生んだ初動ミス
小学生平和の誓い唱和して
隣国同士もつと仲良く出来ないか
四十路でも産みます国のためならば

小惠美子
穂夫
万作
鈍甲
喜代志
里子
愿
和

誰だった合言葉なる電話口
もう一杯揺れる気持ちと勝負する
踏ん張って気力明日へと繋いでる
ほくだつてお茶とお盆はおを付ける
中海が好きと言ひ張るコハクチョウ

汪
多美子
雨奇
千代

仕種からふたり一線越えたらし
おそらくと先入観で決めつける
非核化の裏でミサイル飛ばす国
ヒロシマとナガサキ焼いた悪魔の火

秀夫
敏子
壽峰
清

13項目夢は炎は政権へ
食べて寝て笑って拗ねてみて平和
戦争の火種ホルムズ波高し
韓国はお金めあてにうごいてる

九条男
みつ江
義泰
廣子

わたり合ひそれでもバカね言わずもがな
被害なく令和元年梅雨終る
四季の花活けて小部屋の棚飾る
怪獣の介護明るい友に合う
年金を貯金にまわす友は喜寿
なげくより字が書けるだけありがたい
毎日の笑顔返事に励まされ

美智子
ゆたか
久直
恵子
令位子
美草
菜々
美緒
瑞枝
治代

あかつき川柳会(大阪) 磯島福貴子報

秀夫
敏子
壽峰
清

13項目夢は炎は政権へ
食べて寝て笑って拗ねてみて平和
戦争の火種ホルムズ波高し
韓国はお金めあてにうごいてる

九条男
みつ江
義泰
廣子

わたり合ひそれでもバカね言わずもがな
被害なく令和元年梅雨終る
四季の花活けて小部屋の棚飾る
怪獣の介護明るい友に合う
年金を貯金にまわす友は喜寿
なげくより字が書けるだけありがたい
毎日の笑顔返事に励まされ

美智子
ゆたか
久直
恵子
令位子
美草
菜々
美緒
瑞枝
治代

あかつき川柳会(大阪) 磯島福貴子報

秀夫
敏子
壽峰
清

13項目夢は炎は政権へ
食べて寝て笑って拗ねてみて平和
戦争の火種ホルムズ波高し
韓国はお金めあてにうごいてる

九条男
みつ江
義泰
廣子

不自由展どこまで哭かす少女像
平和から遠のく音がする世界

多代美夫
紀雄

選手宣誓平和に感謝甲子園
恐らくはガンかも知れぬ思うまい

博美

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒兎報

黑板は学びの場にもいたずらも

桂子

蒲鉾の板で遊んだ母の側

守啓

まな板で裁き合つてる日と韓

堅坊

吉野杉の板でカマボコ格上げる

黒兎

法王の祈りの渡る五大陸

一弥

交差点渡りきれない歳になり

信男

敵機来る橋を渡つた炎える昼

一

だんだんと氷が溶けてゆく恐怖

純子

だんだんと少なくなつてゼロ金利

正子

鏡見るうちにだんだん笑い出す

則彦

出席者だんだん減つたクラス会

奈津子

まだ見えぬ暑さの峠かき水

春代

川柳塔さかい(大阪)

内藤 憲彦報

核ひとつつてば因々しくなれる

時雄

並ばず上座に座るお年寄り

廣子

お金出すのは嫌いもらうのは好き

舞夢

裏話聞かされてから同罪に

和夫

被害者見て死刑廃止と言えますか

憲彦

罪一つ消えた気がするボランテИА

輝子

戦禍のなか震える子には罪がない

唯教

禁煙中前でブカブカ罪作り
つかまるのは受子ハングレ姿なし

光雄
世紀子

罪悪感持たず居座るあの議員

敏清

八六八九忘れてならぬ重い罪

雅美

不意のハグ迷いをさらに深くする

玄也

深入りをし過ぎて退路見失う

一愿

烏賊墨のスパゲティ食う深い仲

五月

深読みが癖で胃薬手離せず

宏造

深いだろう母の涙の水溜り

志津子

切り取つた日記のあとの深い闇

富夫

深いのは愛では無くてただの欲

清

知るほどに深まるばかり妻の謎

(續)

記者会見頭深深ハイ終り

洋一

前途ある罪のない人殺されて

八千代

罪の意識持てば押せない核ボタン

ひろ子

罪もない若い命に花絶えず

妙子

アニメ社の夢を地獄に放火犯

憲

核ボタン罪の意識が無視される

雅明

朝帰りしどろもどろで正座する

素頓馬

世の中に無視ほど悲しい罪はない

扶美代

公約を守らぬ罪は問われ無い

さくら

ふところを崩れさせますいい女

勝弘

ふんばつて苦勞に耐えた芋食べて

みつこ

古い服苦にもならずにも今もグー

敬子

太つてるくらいは平気いい女

佳子

フオーマルは黒いドレスの一帳羅

倅子

フクシマの苦悩は今も癒せない

進

長 柳 会(大阪)

辻村 ヒ口報

子の悩み親もよくよ悩みだす

登美子

真面目だが頭痛の種は石頭

洋二

金もなく頼る人なく知恵もなく

旅人

縁切れる高速道路でできてから

靖博

初恋は虹の彼方に夢と消え

由夏

車椅子押ししてる父の丸い背

純風

現人神拝む祖父母植樹祭

和子

心地良い嘘でその場を切り抜ける

一男

ビー玉がわつと下車する園児バス

たけし

芸人がわいわい騒ぐ内輪採め

弘美

騒乱の戦後のり切り今がある

和代

喧騒の街へ孤独を捨てにゆく

隆彦

蟹が出てあの喧騒が止まりました

由子

風鈴の鳴る音聞いて昼寝する

千代

そよ風も熱風もあり老いの日々

正博

卵酒のめるぐらいの風邪を引く

ふみ

風のにり届くうれしい褒め言葉

ともこ

昔からここぞの時は風まかせ

三和子

胸の中悩みを流す風を待つ

正美

平和祈る声八月の風の中

幸子

ごめんねが喧嘩の風の向きを変え

おくみ

面倒な仕事は避けるゆとり世代

ゆき

面倒なこと明日へあすへと延ばす老い

孝

面倒を掛けずに逝きたいピンコロリ

隆明

兄姉が面倒見てる子沢山

ハスの花あれは亡夫の化身かも
もしかして妻は天国僕地獄
呆けたふり大法螺を吹く消夏法

千賀子
廣光
和宏

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

プロポーズ何度も蹴った人と添い
蹴って蹴って蹴って来た夢消える
飛ぶように大地を蹴った駿馬逝く
山をけり空蹴りできた逆上がり
蹴った話じわじわ未練忍び寄る
昇りつめ失言故の辞任劇

宣子
洋次郎
盛夫
武彦
浩司
正彦
光彦
健彦
真桜子
哲子
ひとみ
初正彦
いわゑ

風評に耐えてひとりのせつない日
ほんものの恋だ切なさ身にしみる
マネキンが着ている服にあるクビレ
戦中戦後母の苦難を想うとき
空の青探ることなど何もない
ふにやふにやと答え本音探らせぬ
君のこと何でも知っていたい僕
夏惜しむ胡弓の音色「風の盆」
挫折まだ知らぬ若さが大地蹴る
無理だけ敢えて茨の道を選ぶ
まぶしいな勝者敗者の甲子園
明日からまた頑張れる旅のあと
九条に語り継がせる終戦日
百面相しながら鏡見てる老母
男前でないと思うボクの顔
思いきり蹴って遠くへ踏みだせる

敦子
勝弘
利子
和宏
恭子
紀華
光久
弘委智
弘子
ひとみ
初正彦
いわゑ

大地蹴り少年駆ける一直線
胎動を感じてやつと母の顔
又来いよ負けたチームのせつない背
せつなさの想いメールじゃ届かない
打ち水で涼が得られた良きむかし
親元気心豊かな時は過去
なまくらになりたくもなるこの暑さ
平和です妻一強の五十年
生きていることがせつない日もあった
産声をあげた我が子を覗くパパ

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見 柳歩報

野鶴
りこ
邦男
新録
伯備
清弘子
忠夫
紀乃
良種
芳山
芳恵
雪代
輝子
豊山
寿代
とも子
弘充
左余
みちを
瑞人
ゆき
柳歩
桂子

性欲の機能は多少残ってる
安物も機能安心日本製
万全の機能にあつた想定外
生かされた機能最後のネジを巻く
この胸が高鳴っていく星座見る
相植を打てど本音は胸の内
八月の交換日記ざわざわわ
親指を自由にさせる薬草履
忘れぬA子さんとのレンゲ摘み
草刈機野を唸らせる我卒寿
抜かれて分かる俺も雑草だったんだ
ほし草の上でハイジは明日の夢
初めてのジャガイモゴロリ草の中
草の上理屈もなしに手をつなぐ
哀しみの袋の底は開けておく

美智子
青帆
德利
あきら
モナカ
草庵
照彦報
石花菜
次男
紀美恵
由紀子
恭子
龍枝
雄大
麦青
重忠
日出子
けいこ
茂夫
智恵子
玲子
完司
康子
鬼一
風露
美知江

胸底の砂漠に落ちて来た卵
底辺の私みんなが降りてくる
どん底の心鎮める結跣踏坐
近道を求めどん底けもの道
古井戸に割れたお皿とかんざしと
結局は底引網に掛る稚魚

倉吉川柳会(鳥取) 竹信 照彦報

雑草と馬鹿は暑さには強い
蛇さえも散歩控えるこの猛暑
彼岸まで暑さ続くぞばてるなよ
おしゃべりが口も廻らぬこの暑さ
サウナだが動物園はちゃんと保護
この酷暑もたらす害は我が脳に
ちよつとした言葉白目に囲まれる
火遊びが大きなつげとなつてきた
ちよつと行くサンダル履いてハワイまで
ハガキにも余白が残る筆不精
まだ帰らぬちよつとと言つて出かけたが
年金をちよつと持ち寄りお茶にする
頑固爺ちよつとの事で臍曲げる
ちよつと待てそんな手立ては古いんだ
ひからびたミミズを跨ぐ散歩道
窓跨ぎ老人救う消防士
跨線橋やたらに増えた高速度
昭和から平成跨ぎ八十路行く
豊の耳踏むな跨げと駄糸

ふわふわと生涯君にぶら下る
ちよつとだけ飲んでも呑んだ気がしない
百回忌ちよつとお経が長すぎる
ちよつとした珍事逃さぬ週刊誌
ふわふわと八十年代では死ねんわい
蝶のよう風にも乗つて宇宙まで
晩酌はふわふわ豆腐あてで飲む
日韓の溝ひと跨ぎせぬ総理

柳柳あまがさき(兵庫) 大浦 初音報

年金を繰り下げたのに早よ死んだ
欲を捨て笑顔の日向子夢つかむ
遅れるよ登校時間大声で
悪代官最中の下の小判好き
愛人は欲しいが金がかかりすぎ
荒れる子の心の叫び聞いてくれ
甲子園負けてもひかるユニホーム
嬉しいと母が叫ぶと子も叫ぶ
西行の歌で客寄せ樹木葬
反抗期些細なことでよく叫ぶ
話したいこといっぱいあった亡母さん
カギツ子の笑顔満開ママ帰る
好きだよと叫ぶがこだま返らない
こっそりと逢瀬を重ね恋つものる
勝ち組の愚痴をとくとく聞かされる
地獄絵図阿鼻叫喚の三十五
子の世話にならずに来いと妻が呼ぶ

節子 醉芙蓉
萩江 尿もれパンツ誰にも知られない様に
祐子 欲ばって胃散飲むはめバイキング
隆昌 この街で少年のまま生きてます
大鯰 こっそりと品定めする紙パンツ
明友 ジイさんの血でもうまいかオイヤぶ蚊
照彦 負け犬の遠吠え聞いている屋台
三冠王深夜に千回バット振る
ウナギ屋がナマズ仕入れている噂
夫婦げんか夫の負けと決まってる
藤吉郎夏は草履を冷やそうか
変わらない意欲が花を開かせる
哀しみをこっそり海へ捨てにゆく
欲得を言わず天使の顔になる
幕降ろすその日迄はと虹を追う

感情の欠片奪っていくスマホ
死ぬ迄に一度浴びたい銭の雨
尿もれパンツ誰にも知られない様に
欲ばって胃散飲むはめバイキング
この街で少年のまま生きてます
こっそりと品定めする紙パンツ
ジイさんの血でもうまいかオイヤぶ蚊
負け犬の遠吠え聞いている屋台
三冠王深夜に千回バット振る
ウナギ屋がナマズ仕入れている噂
夫婦げんか夫の負けと決まってる
藤吉郎夏は草履を冷やそうか
変わらない意欲が花を開かせる
哀しみをこっそり海へ捨てにゆく
欲得を言わず天使の顔になる
幕降ろすその日迄はと虹を追う

雅美 高千賀子
こみつ 真桜子
雄次 宏造
正和 宏修
良種 万彩
耕治 かずお
美籠 ヨシエ
靖鬼 ヨシエ

柳柳塔わかやま吟社 小谷 小雪報

姉さんはべっぴんさんと言われている よしこ
税制にひとこと文句言わせてよ 寿子
鏡見て年ごろなりに意識する ほのか
子のテリトリーで時どき吠えている 富美子
年頃に似あわず私まだ翔ぶ気 徑子
それなりの年ごろおしゃれも恋もする 紀久子
夫テレビ家事出来るのが有り難い 秀子
愛想のない年ごろの子が二人居る 愿子
年頃に女鏡にとらめっこ 准一

大山滝句座(鳥取) 新家 完司報

イマ女なの釣りに集印そして馬
よく弾む手毬そろそろ適齢期
年ごろの頃に卯の花が匂う
観衆も泣いた笑つた甲子園
水掛け不動インバウンドに仰天し
御来光人人人の富士登山
人込みにひとりの砂を噛んでいる
さついいのはあなりの娘だからです
負けん気でもう一花の彩を織る
はんなんりの腰に強気が解けたす
花柄で強気を隠すコート着る
鉛筆をみな失らせている強気
一周忌すぎて女は強気なり

サーファーと北斎が知る浪の裏
さらさらと流れた小川みな暗渠
マジックの種を知るにも金が必要
知る事と理解すること大きな差
分け合つて食べようカラスも人間も
さらさらの中に余生を乗せてゆく
さらさらと口説いてみたい粋な人
知つたのに返せなかつた親の恩
妥協などさらさらないが握手する
名家が出ないものかと昼寝する
知つたつてどうする鼻腔のヒダヒダ
口数は少なめ愛はタツプリと

明 大輪
航太郎 日出男
あつみ 和弘
あきこ 知香
紀子 小雪
繁子 あかね
保州 保州

余光 けいこ
ゆたか 富隆
麦青 雄大
隆昌 風露
由紀子 幸子
芳山 楓花

遺すには少し足りない明日の酒

大笑いさらさらになる生乾き

さらさらとそめん食って死のダイブ

弱点を知つたら強くなる勝てる

秋の風この世の旅もあと少し

中国の広さを知つた三国志

少ないが孫にやりたい一億円

戦争の怖さ知つてる鉄兜

少ないが募金をします被災地へ

生前葬少ない客に落胆し

自助という言葉便利で無責任

不本意であるが少額納税者

川柳藤井寺(大阪)

太田扶美代報

風鈴も音をあげている熱帯夜

風鈴が厳かに鳴る八一五

シャイだった同級生の変わりよう

チリンとも鳴らず風鈴寝たらしい

故郷の荷を解き宙宙の笑み

はやぶさの快拳宇宙の謎を解く

僕はシャイ君のハートを掴めない

何がシャイやスバリ言うたらあかんたれ

親だけがシャイと思つている息子

かけられた謎が解けず機を逸す

風鈴が固まつているこの極暑

ヒト科には解けない課題多すぎる

泣き笑いすねて甘えてシャイな孫

紀の治

くにこ

照彦

正人

石花菜

正男

道唱

重忠

久子

清明

規雄

完司

目で火花耳で風鈴浴衣掛け

エコの涼ですと風鈴軒に吊る

風鈴にしのお昭和の涼し夏

その口で私シャイだとよくもまあ

長い夜だった風鈴鳴つていた

豊中もくせい川柳会(大阪)初代

正彦報

夏の空なお深みゆく青ひとり

のんびりしてるとボケが呼びに来る

一枚を抜いても残る二枚舌

急ぎ立ててのんびりさせぬセミの声

丁寧な妻の言葉に危険予知

釣り人の横でのんびりアオサギが

蟠踞するこの町友のいる至福

トップ抜けチャンスが巡る下剋上

一隅を照らし一遇照らされる

あの彼は妻子が居ると言つたでしょ

危険性低く張りきる訓練日

のんびりは出来ぬ財布が冷えている

手抜きへはしつべ返しをする女

円周を越えて少年鳥になる

涼風に凭れて今日を折り畳む

遅刻した人がのんびりやつて来た

役職を後釜ないと降りられぬ

ハイハイッと出た玄関で蹴躓く

星が降り朱鷺が舞い飛ぶ佐渡に立つ

紀雄

かずお

キーキー

まつお

扶美代

求芽

歌留多

英旺

英玲

多美子

時子

健二

武彦

多津子

敏昭

玲子

野鷹

ヨシエ

見清

博

耕治

美智代

千鶴子

阿から昨まで人にの世哀と楽

危険だと言われて余計湧くスリル

女の武器いつどこでも泣けますの

どしゃ降りのおとは大きな虹が立つ

湯治場につかり暮しの轆を抜く

翠洋会(大阪)

大久保眞澄報

八月の折りは戦死者の懺悔

甲子園八月の空制覇する

鎮魂うたう八月の蝉しぐれ

腹八分二分はおやつのためにある

星座のロマン語つた彼もお爺さん

星座の名覚えた里の夏休み

明日香路のキトラ古墳に見る星座

夏の夜に星座眺めて名当てする

星仲間いじめ嫌われ流れ星

いじめ合いながら五十年暮らし

にんげんの業かいじめも虐待も

中傷で暇を埋めてるおばあさん

友もなく味方もいない昔めっこ

ぐうたらな私を作る夏休み

ブラごみが青い地球をいじめてる

夏祭り夜空に咲いた万華鏡

愛たつぷり育てた子等を信じてる

たつた一言ゴメンと言えば済むものを

尺八と諸国行脚の修行僧

お互いが突つ支い棒になる残暑

黒兎

則彦

美津子

きらり

正彦

満作

弘子

希久子

眞澄

桃花

げんえい

恭昌

廣子

義之

義

理恵

敬子

昭

弘美

富子

宣子

すみ子

浩二

行久

ふりこ

目の術後鏡の前に魔女がいる
クラーかけおやつ片手に五七五
極楽は思いのままができる今
極楽を信じ善行積んでおく

川柳花の輪(大阪) 岡本

核が皆無くなっているこの地球
文通の時代想像よくはずれ
百本のバラより目立つかすみ草
安全な歩道で油断してしまふ
安全を担保する銃乱射する
想像の余生は自由だったのに

川柳さんだ(兵庫) 村田

七年も間で過ぎした蟬の羽化
父も泣くバージンロード初舞台
産声を廊下で聞いて出る涙
宜しくねあなたの隣座ります
一瞬の静寂やぶる呱呱の声
再デビュー嫁が受づく割烹着
熱血の恩師の手紙宝物
貰ってきた保護犬うちの宝物
国境があつて命の水がある
宝物はないが愛には飢えてない
は捨てるで欲しいと言われている宝
二人して育てた宝人の手に
趣味ひとつ抱えて後期仲間入り

志華子 舞夢 大子 楓楽 薫報 泰子 みちる 信子 亜成 正太郎 薫 博報 修平 利尚 祐康 ひとみ 武彦 見え つな子 健彦 哲夫 千賀子 耕治 ゆかり 好文

亡き妻の使い古した料理本
あの星を君にあげるとプロポーズ
満天の星天文台がある故郷
十三夜露天に浮かべ一人じめ
星になる友救えない無力感
順風満帆夜空に星も輝いて
堂々と夜空に響くトランペット
あのあたり父母妹光つてる
慰めたつもりがよけい凹ませる
沈んでも手を差し伸べる君が居た
子に見せる沈む野菜と浮く野菜
パブルから沈んだままの我が財布
沈んでるバアバとんもミジの手
沈む夕陽も旅の一つのおもてなし
青春の恋も沈めて社会人
ミサイルが船に当りませんように
一年も隠し通せたセレブ婚
まろやかにわたしを晒す愛謳う
三代目なのにアベさんしぶといな
風鈴がうつになつて熱帯夜
AIが人の心を読む時代
他人の子も叱つた昭和遠くなる

雄太郎 加代子 ひろ介 優子 万彩 迪 順子 廣光 宏造 寅男 久美子 正和 利子 雅尚 一子 洋一 厚子 ヨシエ 勝弘 宣子 雅司 義徳 川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

敗けてやる事も覚えて力つけ
近寄ると火傷しそうな熱い仲
あえぎつつ今日も人間しています
わずかでもチャージ金利踊らされ
やりくりが下手あげるのが好きなので
内緒です尾椎骨から汗をかく
やりくりの夕餉に鯛のつみれ汁
紆余曲折やりくりもして今がある
手厳しい言葉の裏に潜む愛
増税へ厳しい秋が忍び寄る
長生きもやりくり上手したおかげ
傘寿です恋のやりくりお手のもの
彼岸より彼岸へ向かう三度笠
負のページ母を泣かした日の記憶
空き缶をグニヤリと今日の負け戦
8・15熱い涙が溢れた日
立秋も台なし熱波この猛暑
勝負つき球児の手には熱い砂
負けるなよ強く生きろと子を諭す
宿題を忘れただけで立たすなよ
語り部が熱い八月十五日
今日よりも明日へと汗をしたたらす
ふつきれぬ義母の柩を出す時雨
やりくりの限界こえてする介護
建前を捨てて本音の丸裸
やりくりのお蔭で二泊三日です

博泉 亜成 銀杏 尚代 ルイ子 かすみ 茜 賢子 朝子 星雨 さち子 美佐子 高志 郁夫 弘一 薫 麗 武彦 秀雄 祥昭 弘委智 寿子 高鷺 壽峰 恵子

句会名	日時と題	会場と投句先
西宮北口 川柳会	14日(月)14時締切 テレビ熱す(こなす・じゅくす) ガクゴト・自由吟	西宮市立中央公民館 6F 講堂 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「ブレラにのみや」 〒663-8141 西宮市高須町2-1-31-830 福田正彦
川柳 さんだ	15日(火)13時締切 第8回さんだ川柳大会	キッピーモール 6F (JR三田駅前) 〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康 詳細は川柳塔誌9月号126ページ参照
川柳 たちばな	16日(水)13時45分締切 席題・はらはら・約束 自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7) 阪急塚口駅北へ10分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
川柳塔 すみよし	19日(土)14時15分締切 港・染まる・レンズ	住吉区民センター2階 集会室4 〒580-0026 松原市天美我堂3-130-2-404 森松まつお
豊中 もくせい 川柳会	19日(土)13時50分締切 家族・備える・鈍い・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川柳塔 みちのく	19日(土)17時締切 恋・円・プライド	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL0172-32-2591 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川柳 ねやがわ	20日(日)13時締切 遠慮・暗い・消える・席題 自由吟	寝屋川市立産業会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	20日(日)14時締切 ふくらむ・がっかり 席題 共選	藤井寺市生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお
岸和田 川柳会	20日(日)12時開場 第69回岸和田市民川柳大会 詳細は川柳塔誌7月号106ページ参照	岸和田市立福祉総合センター 3F 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 大会実行委員長 松崎大輔 TEL 072-445-4084
南大阪 川柳会	26日(土)18時締切 期限・隠れる・半端 ふにゃふにゃ	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
和歌山 三幸川柳会	26日(土)13時15分締切 新聞・コーヒー・乗り物	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市川柳会	27日(日)14時締切 忍・気配・ポーズ	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車 北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	27日(日)13時締切 自由吟・リラックス ろくでなし・そっくり・席題	県民ふれあい会館 4階(県立生涯学習センター) 鳥取市扇町21 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
京都 塔の会	28日(月)14時締切 リモコン・接・まちまち	ハートピア京都 京都市中京区烏丸九太町 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 梶本宏子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

10月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　　ら	3日(木) 14時締切 飾・ひょっこり・強がり	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄「奈良」駅④番出口 徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 安土理恵
城北会 川柳会	5日(土) 14時締切 ひょっこり・魔王・減る 自由吟	旭区老人福祉センター 3F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪府城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川柳 とんだばやし 富柳会	5日(土) 14時締切 指・灯り・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0064 富田林市不動ヶ丘8-31 山野寿之
倉吉会 川柳会	5日(土) 14時締切 褒める・ぞろぞろ・よかろう 席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 まつ え社 吟	5日(土) 13時30分締切 垂れる・所・血・台風	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江府美保関町笠浦222-1 相見柳歩
ほたる 川柳会 同好会	8日(火) 13時30分締切 祭・柔らかい・どろどろ	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール蛭池 蛭池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳塔 さ　　かい	8日(火) 14時締切 分ける・へりくつ・折句:つやま	東洋ビルディング 4F 堺東駅北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5-171 矢倉五月
川柳 あまがさき	8日(火) 14時締切 防ぐ・山・かたい・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
あかつき 川柳会	11日(金) 14時締切 宣伝・さわやか・谷・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳大阪	12日(土) 14時締切 行方・叩く・グルメ	メトロ・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪府都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
六甲会 川柳会	12日(土) 14時締切 席題・意地・慌てる・空想 自由吟	六甲道勤労市民センター 5階 E室 JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4-11-11 上田和宏
川柳塔 打　　吹	12日(土) 13時30分締切 カード・越す・美味しい・席題	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川柳会	13日(日) 14時締切 新米・わがまま・投げる・雑詠	八尾市安中町3-5-1 洪川・安中集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川柳塔 わかやま 吟　　社	13日(日) 14時10分締切 兼題=のどか・透明・馴染む 課題吟=意	和歌山商工会議所 4階 和歌山市西汀丁36 兼題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほのか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪町東2-208-5 楽原道夫

柳界展望

★「第66回八尾市民川柳大会」は8月18日八尾文化会館ブリズムホールで、100余名の参加で開催。同人成績。

秀句 両川 無限

人間を煮込むと黒い灰汁が浮く

★第3回全国誌上川柳大会には353口の投句があり本社同人成績。

特選 石橋 芳山

チューリップ溼らな口を閉じなさい

新家 完司
意地悪の仕上げに老醜を晒す

成田 雨奇
カーテンレールに玉ねぎを吊ることもある

川本 晔

海南市

山中 閑

祭」進捗状況について 項。

双乳全開窓ガラスの夜明け

紹介者 奈良県 齊藤すみれ

木本 朱夏

⑧「ウエブサイト」から 次回常任理事会10月7日の報告事項⑨定例確認事 (明)AM10時

川本 晔

紹介者 奈良県 田所 英雄

村上 玄也

新同人紹介

沈んでいる

平井美智子

尼崎市

寺嶋恵美子

信号を渡り終えたらお

紹介者 川端 一歩

北浦 彦弘

ばあさん

阪南市

石川 克美

▽勳 向△

神戸市

山口 光久

○川柳富柳会(大阪)4

紹介者 青山 弘

山口 光久

月より会長に山野寿之氏が就任。

神戸市

山口 光久

▽御芳志△

常任理事会11月9日6日

山崎 武彦

○片岡智恵子さん(同人)

出席20名①「新常任理事と新理事」②「第25回川柳塔まつり」関連事項について③「同人総会」関連事項について④「第8回春の誌上大会」チラシ

山口 光久

▽訃 報△

○中原みさ子さん(同人)

山崎 武彦

・鳥取市)九月五日死去。享年77。

▽新誌友紹介△

鳥取県 牧野 隆正

手を頂きました。

紹介者 新家 完司

考結果」⑦「高野山合祀

▽訃 報△

柳塔まつり」関連事項について③「同人総会」関連事項について④「第8回春の誌上大会」チラシ

山口 光久

○中原みさ子さん(同人)

鳥取市)九月五日死去。享年77。

山口 光久

▽訃 報△

鳥取県 牧野 隆正

山口 光久

手を頂きました。

鳥取市)九月五日死去。享年77。

山口 光久

▽訃 報△

鳥取県 牧野 隆正

山口 光久

▽訃 報△

鳥取市)九月五日死去。享年77。

山口 光久

▽訃 報△

鳥取県 牧野 隆正

山口 光久

▽訃 報△

鳥取市)九月五日死去。享年77。

山口 光久

▽訃 報△

鳥取県 牧野 隆正

山口 光久

きとう こみつ

—美龍・蕉子・宏造推薦

川島良子

—蘭幸・完司・朱夏推薦

横山里子

—一歩・蕉子推薦

第70回西宮市民文化祭川柳大会

日時 10月20日(日) 開場11時
 場所 西宮市民会館(市役所南隣) 4階
 会費 1500円(呈 作品集・小品)
 兼題 (各題2句・欠席投句拝辞 席題なし)
 「冗談」 阪本きりり 選
 「解く」 中菌 清 選
 「マーク」 萩原 典呼 選
 「だめ」 伊達 郁夫 選
 「火」 赤松ますみ 選
 「持つ」 小島 蘭幸 選
 「自由吟」 村上 水筆 選

出句締切 12時30分

交通案内 阪神西宮駅 市役所口 北へすぐ
 JR西宮駅南側下車～国道2号線
 を神戸方面へ約12分市役所南隣

主催 甲子園川柳社

連絡先 村上 水筆

〒655-0048

神戸市垂水区西舞子1-1-11-102

電話 078-600-8565

ケイタイ 080-1406-1717

川柳たけはら750号突破
 記念誌上川柳大会

課題 「笑う」2句

選者5人による共選

◎コピーをしますので(ボールペン・濃い鉛筆)でお書きください。

選者 弘津秋の子 梅崎 流青

木本 朱夏 新家 完司

田中 新一

締切 10月20日(当日消印有効)

※規定の用紙(コピー可) または
 適当な用紙に住所・氏名・電話・
 所属柳社を記入の上、投句料を添
 え左記までにお送りください。

投句料 1000円(定額小為替) 作品発表誌呈
 投句先 〒725-0022

広島県竹原市本町1-14-3

小島 蘭幸 宛

TEL・FAX0846-22-6626

賞 三才賞として竹原市の銘酒

発表 川柳たけはら12月号

主催 竹原川柳会

第90回 奈良県川柳大会

日時 11月4日(月・祝) 12時開場
 会場 生駒市コミュニティーセンター
 生駒市元町1-6-12(セイセイビル内)

TEL0743-73-0500

近鉄生駒駅から南へ歩道橋を渡り徒歩3分

宿題と選者

「押す」 鈴木 かの 選

「実る」 井倉 和子 選

「風」 仲村 周子 選

「ポーズ」 長谷川 崇明 選

「ふっくら」 林 ともひこ 選

「熱い」 南 芳枝 選

「空 間」 山野 寿之 選

出句締切 13時

参加費 1500円(昼食は各自でお済ませ下さい)

欠席投句 定額小為替1000円同封の上 下記へ

10月26日(土)まで

〒630-0222 生駒市老分町1487-30

小金澤 貫一 宛

TEL 0743-77-6793

懇親会 4000円 当日受付

主催 奈良県川柳連盟

川柳塔まつえ吟社 創立50周年記念大会

日時 11月4日(月・振替休日)

午前11時開場・受付

会場 高根県民会館3階大会議室

(TEL0852-22-5506)

参加費 2000円(大会誌呈)

欠席投句 1000円

(10月10日必着・切手不可・大会誌呈)

★記念講演会 「具象の力」 新家 完司氏

★謝選 「祝」 石橋 芳山 選

締切 10月10日(当日消印有効)

*当日参加者のみ投句してください。

★共選 2句「続く」

竹治 ちかし・永見 心咲

★兼題 各題2句(出句締切午後1時)

「城」 小島 蘭幸 選

「湖」 新家 完司 選

「古」 木本 朱夏 選

「山陰」 平井美智子 選

★謝選・欠席投句先

〒690-0861 松江市政吉867-5

藤井 寿代 宛

★投句方法 謝選は規定の用紙を使用。欠席

投句の方は、便箋大の用紙に共

選・兼題各2句・郵便番号・住

所・氏名・電話番号を記入の上

ご投句ください。

主催 川柳塔まつえ吟社

Sin 選

お嫁様ドアは静かに締めましょう
 トルストイの家出を想う締められて
 アーメンと一本締めは違うもの
 あのみももう締めますよいいですか
 玉手箱締めたわたしの現在地
 引き締める話ばかりで空を見る
 襖閉め作法道理に尻締める
 国民を締める手相の坐る椅子
 帯締めて解かせ次の企みへ
 レシートはいいですと締めておきます
 抱き締めていないと魔女になるおまえ
 ゆっくりとシャツのボタンで締めてゆく
 ゴキブリの圧迫痕を見てしまう
 √から抜け出せぬよう締めておく
 八月の蛇口を締める焼野原
 「ん」のネジを締め上げ今日を生き延びる
 その男塩で殺して酢で絞めて
 なりたかった自分を三杯酢で締める
 桃を食うほどネジは締まりきらない
 活けメた後もピクピクする怒り
 すみません締めてください海のふた
 締めても締めても濡れる音楽
 縁がない金縛りにも金貨にも
 公式で解ける呪縛はありません
 幸せな愛は六月締めにする
 締めすぎた結び目何を開きたいの
 思いっきり怒り締め出す換気扇
 この曲がないと親父を送れない
 ネクタイを締める優しい絞首刑
 ももいろの吃音昆布締めのことば
 白い蝶の棲む前頭葉にスパナ
 締められる首の周囲が大人だね
 佳5 肛門をきゅっ蒸し返してどうする
 佳4 1日を背負うあなたも共犯者
 佳3 帯締める真夏の舌を出しながら
 佳2 約束を四の字固めています
 佳1 みな駄馬で死んでゆく青空の下
 人 なぜ強く締めるの捨てる瓶なのに
 地 木星で締めて土星で緩む妻
 天 ふらふらと花火 終わりがはじまった

麦 乃
 板谷 達彦
 森下 博史
 四 線 蛇
 田村ひろ子
 川本真理子
 岩根 彰子
 忠
 副井ゆたか
 よ る
 海賊 芳山
 西沢 葉火
 森山 盛桜
 森山 盛桜
 辻内 次根
 三浦 蒼鬼
 居谷真理子
 月波 与生
 一音乃 遥
 小俣 鯨太
 本田こなつ
 本田こなつ
 えんどうけいこ
 えんどうけいこ
 藤井 智史
 稲垣 康江
 稲垣 康江
 加藤 当白
 怜
 河野 潤々
 水 た まり
 浅井 誠章
 守田 啓子
 美 春
 芍 薬
 米山明日歌
 柴田比呂志
 たごまる子
 隴
 守田 啓子

平井美智子 選

お嫁様ドアは静かに締めましょう
 泣き笑い話を締めるコップ酒
 サヨナラの扉は後ろ手で締める
 締切が無くて寂しい定年後
 逃げ道をすこし残して締め上げる
 要らんこと言うて自分の首締める
 締め過ぎてするりと抜けた反抗期
 十円玉握り締めてた手の匂い
 水あずきで私の透き間をパッキング
 ウエストをゴムにしてから自由人
 はしご酒締めにくかせぬしじみ汁
 諦めまいぞまだ伸び代のある八十路
 境界をでると締まっていく首輪
 抱き締めていないと魔女になるおまえ
 ドレミファで始めてソラシドで締める
 鯨飲に締めのラーメン午前2時
 ネクタイを締めて常識派に入る
 二次会の本音で始め愚痴で締め
 抱き締めて育てた子らは遠く住む
 ゴキブリの圧迫痕を見てしまう
 増税をしまし首を締めましょう
 ネクタイの締めあと悔いの痣だらけ
 八月の重さ無言が締め括る
 パンザイで人の命を締め括る
 優しいげに首に巻かれたのは真綿
 締めすぎて首の回らぬ扇風機
 草草で締めて追伸長くなる
 締めても締めても濡れる音楽
 鐘一つ鳴ってサビまで歌えない
 エビローグゆるむ絆を締め直す
 ネクタイを締める優しい絞首刑
 白い蝶の棲む前頭葉にスパナ
 佳5 木星で締めて土星で緩む妻
 佳4 締めのあいさつ準備したのに省かれる
 佳3 締めすぎたボルトの山がすり切れる
 佳2 ももいろの吃音昆布締めのことば
 佳1 雇用延長も抱きしめるものがない
 人 √から抜け出せぬよう締めておく
 地 ネジ穴がつぶれて締まらない私
 天 約束を四の字固めています

麦 乃
 大木 雅彦
 賢 石
 おかのみつる
 春 爺
 山本 進
 武本 碧
 川本真理子
 岩根 彰子
 こ み ち
 澤井敏治
 澤井敏治
 冬 子
 海賊 芳山
 雨森茂喜
 アズン安須
 伊藤 良一
 伊藤 良一
 光畑 勝弘
 森山 盛桜
 尾崎 良仁
 坂本 星雨
 塚越 孝一
 平尾 定昭
 居谷真理子
 月日 備人
 颯 爽
 本田こなつ
 西山 竹里
 木田比呂朗
 怜
 水 た まり
 隴
 寺井 一也
 龍 せん
 河野 潤々
 月波 与生
 森山 盛桜
 ま さ と
 米山明日歌

投句方法 【川柳塔】を検索→【川柳塔 WEB 句会】をクリック

senryutou.net

(サイト管理 森山文切)

全日本川柳誌上大会のご案内

(令和柳多留第1集通巻22号)

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」(令和柳多留第1集通巻22号)を開催します。日川協年次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ(一社)全日本川柳協会の権威ある三大自然行事ですので、こぞってご参加ください。

一般社団法人 全日本川柳協会

理事長 小島 蘭 幸

出版委員長 西出 楓 楽

課題と共選者 (各題2句・連記)

「新しい」 川崎 信 彰——浅原 志ん洋 共選

「満足」 江崎 紫 峰——三宅 保州 共選

「輪」 水野 壱 郎——土田 欣之 共選

「重ねる」 酒井 青 二——久崎 田 甫 共選

「ヘルパー」 岩田 明 美——西出 楓 楽 共選

第二次選者 小島 蘭 幸 江畑 哲 男 長谷川 酔 月
竹田 光 柳 重 徳 光 州

参加費 2,000円(投句料・「令和柳多留第1集通巻22集」代金含む)

賞

令和柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞
日本青少年育成協会会長賞・全日本川柳協会賞
全日本川柳誌上大会賞(予定)

締切 令和2年1月31日(金)〈当日消印有効〉

発表・表彰 第44回全日本川柳秋田大会(2020年6月)

参加方法 参加用紙に記入し、参加費2,000円(振替又は小為替)とともに下記へご送付ください。

〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-905

一般社団法人 全日本川柳協会

電話 (06) 6352-2210

FAX (06) 6352-2433

振替口座 00970-9-3575

編集後記

★旅人へ何と親しい駅だこと

薫風

★「内職に藤色があるたのしさよ」昭和41年度の路郎賞第1回作品である。作者は「内藤ささ子」さん。当時の選考方法は現在と違って、主幹を中心に選考委員が何人か合議で決められていたようだ。「内職」という言葉に時代を感じる。「藤色」という奥ゆかしくやさしい色合いに、どのような内職であったのか想像をかきたてられる。

★先月号特集のエッセイ「きやらばくは残った」にも、戦後間もなく近所の

若嫁が集まって編み物の内職をしていたとある。筆者の八木千代さんは米子市在住。95歳。体調のお加減で自由に行動できなくなった現在、きやらばく句会の方が迎えに来られ

月1度の例会を楽しまれる由。川柳仲間にあたたかさぐられしい。

★今年6月に亡くなられた作家田辺聖子さん追悼

「ことばの花火大会」川柳・俳句・短歌の交響を「楽しむ」会が、9月7日、伊丹市立図書館「ことば蔵」で開催された。聖子さんは伊丹市に住み図書館の名誉館長を務められた。演出したのは伊丹柿衛文庫理事長・坪内稔典氏。参加者はジャンルを超えて詩歌を詠む。稔典氏から出された席題は聖子さんの小説の題からとられた「言い寄る」。作句時間は15分。

★参加者90名が川柳・俳句・短歌から二つを選んで応募。あらかじめ川柳人

2名俳人2名歌人1名の選者が選んだ作品群を会場の参加者の挙手で二位の作品が決定。俳人の方が

大会の敷居

全国NHK学園川柳大会に選者として参加する機会があった。そこで嬉しい出会いがあった。沖繩の森山文切さんが主催している「web句会」の参加者で名前しか知らない人が、わざわざ長野県から参加してくれたのだ。名前しか知らないのだから探せるわけもなく、入選して呼名してくれない限り判らない状況だった。最初はその呼名を聞くこともなかったが

偶然にも私の選句の中に彼の句があり、どこに座っているか確認することができた。閉会式のあと一番にその席へと向かった。彼は「生まれて初めて川柳大会というものに参加しました」という。インターネットだけ投句している人にとって、リアル大会の敷居は高い。この敷居をもっと低くすることが出来たら、川柳大会や句会に若い人が大勢訪れるだろうなと思った。
(真島久美子)

ひとつこと

作られた川柳が最優秀作であった。「浮いてきてまた言い寄ってくる海月」作者は大阪府在住の木村和也さん。

★追悼会の企画の段階から私も参加させて頂いたが

「ことばの花火大会」という稔典さんのネーミングには、あつと目から火花が散った。
(朱夏)

□「川柳雑誌・川柳塔誌」の電子化が9月中旬に完了した。そこで、麻生路

郎師の代表句は「旅人」単純に計算すれば、あとに収められているが、その7倍なので約1万数千句他にどんな句かあるのか、どれだけの句があるのかに興味を持ち、先ず「川柳雑誌」創刊号(大正13年2月)から調べ、パソコンに打ち込み出した。

□現在、昭和4年までののかを楽しみにして路郎師「全句集」の作成をめざしている。これも「電子化」がある。これも「電子化」がある。
(勝弘)

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにご利用いたします。

作品募集

川柳塔 (8句)
水煙抄 (8句)
愛染帖 (2句)
檸檬抄 (2句)
12月号発表 (10月15日締切)

小島蘭幸選
川上大輪選
新家完司選
水野黒兔共選
鴨谷瑠美子選

一路集「えらい」「横」
初歩教室「肉」

返事
支える
熱心 (3句)
古久保和子選
奥澤洋次郎選
高瀬霜石担当

初歩教室「熱心」は1月号発表

1月号

檸檬抄「メロディ」
一路集「えらい」「横」
初歩教室「肉」

川柳塔WEB句会について お知らせ

担当者が多忙で対応できなくなったため
10月より休会とさせていただきます。

〒543-0052
大阪市天王寺区大田道一1-14-17
花野ビル201号室

定価 八百円 (送料97円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)

二〇一九年(令和元年)十月一日発行

発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート

発行所 川柳塔社
電話 〇六六七七九三三四九〇番
振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

お知らせ

10月1日から郵便料金が変わります。

定型郵便物

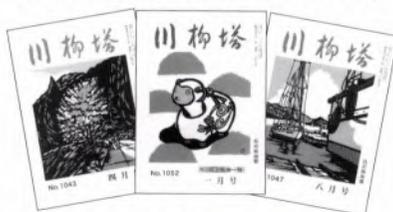
25g以内	84円
50g以内	94円
速達 25g以内	290円
通常はがき	63円

★投句の際 郵便料金不足にご注意ください。

本社 11月句会
7日(木) 午後1時から
兼題 「腹」「かわいい」「枯れる」
「巧み」「構図」

川柳・俳句・エッセイ・小説 新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
TEL (06) 4800-3018
FAX (06) 4800-3028
Eメール bikenart@ea.mbn.or.jp
ホームページ https://www.bikenart.com
※事務所移転につき住所・電話番号が変わりました。

川柳塔のホームページアドレス <https://senryutou.net>

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、
香ばしい薫り。舌と記憶に
しっかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセルス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>